GB547
G23
97W21902
O
複写

GB547
G23

大東亞戰爭

海軍戰記

第四輯

營海軍報道部編纂

興亞日本社版

K工34-54

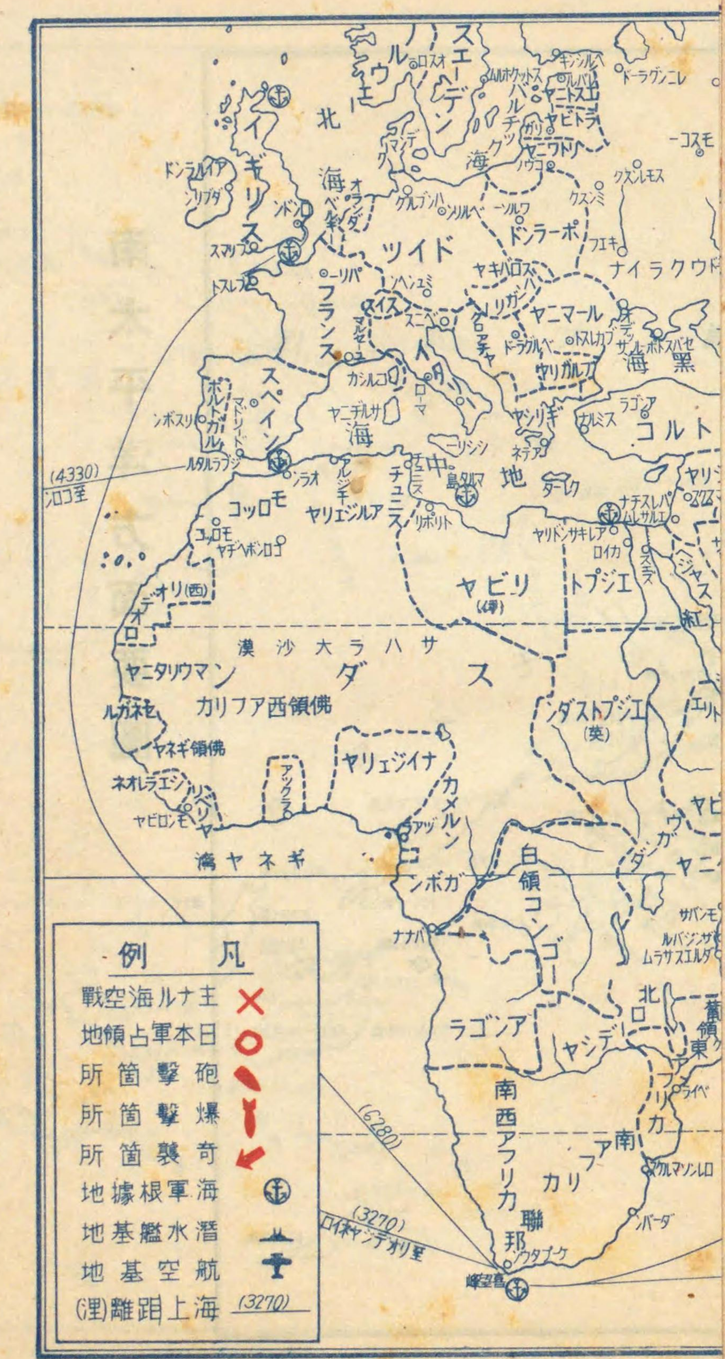
大本營海軍報道部編纂

大東亞戰爭

海軍戰記

第四輯

興亞日本社版



GB547
G23

國立國會圖書館藏書
9.5.30
97W21902

大本營海軍報道部編纂

第一刊 海軍戰記 (七・五・二七 第三十七回海軍記念日) 刊行 第一輯 〒一八八 八五

第二刊 海軍戰記 (一七・一二・八 大東亞戰爭一周年記念日) 刊行 第二輯 〒一八八 八五

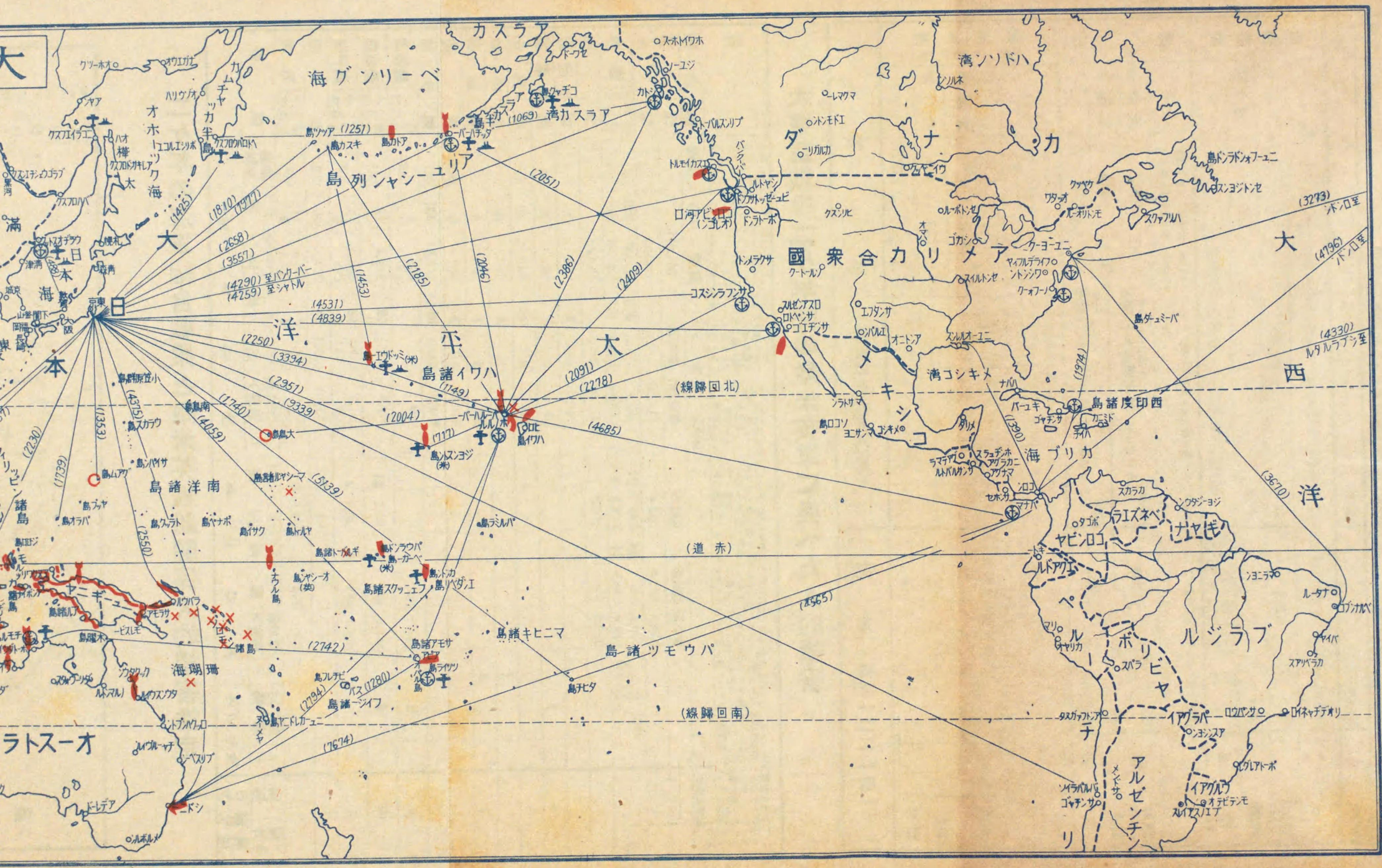
第三刊 海軍戰記 (一八・五・二七 第三十八回海軍記念日) 刊行 第三輯 〒一六〇 三一

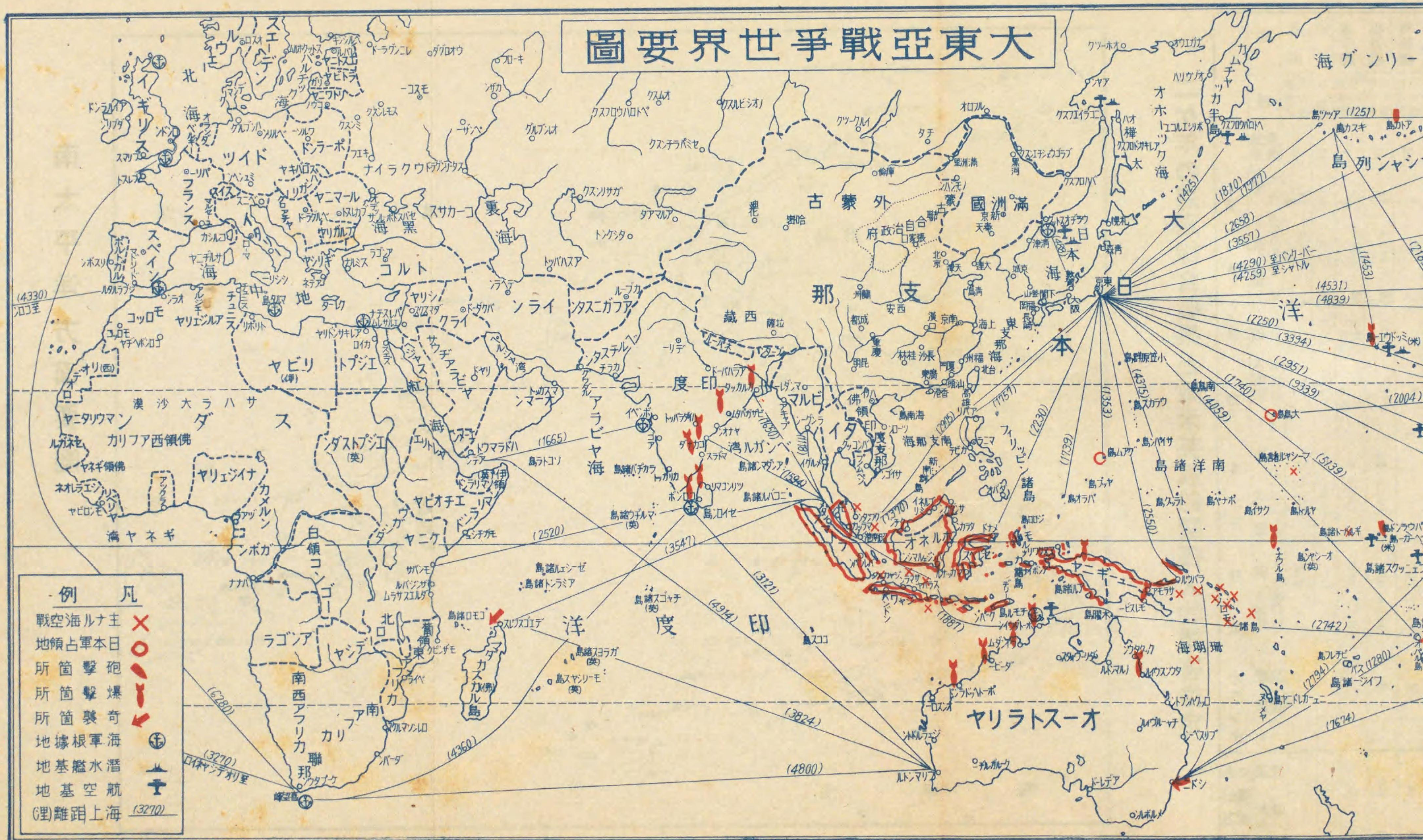
第四刊 海軍戰記 (一九・五・二七 第四輯 〒一八〇 五一

裝幀 恩地孝四郎

本書の內容

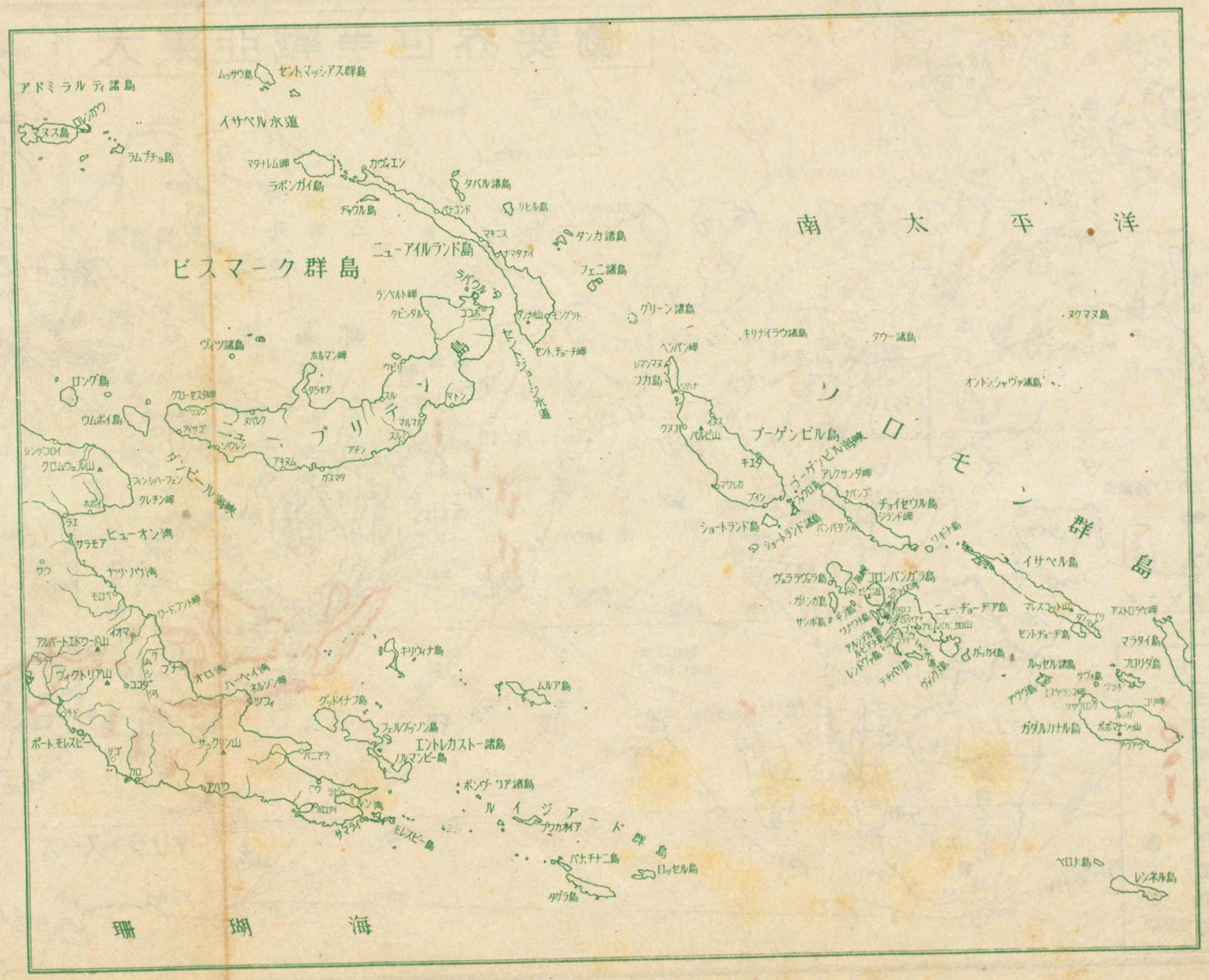
本書は、大本營海軍報道部編纂による大東亞戰爭に於ける帝國海軍作戰の綜合戰果の記錄である。さきに刊行した「海軍戰記」第一輯（ハワイ・マレー沖海戰以後の戰況收錄）同第二輯（珊瑚海海戰以後）同第三輯（ソロリダ島沖海戰迄）に續く第四輯として、その後の南太平洋方面及び中部太平洋方面の熾烈極る航空海上決戰經過を主とし、その他海軍全般作戰及び感狀受領者殊勳錄を收めたものである。


大
カスラア
海グンリーベ
湾カスラア
島クヤチコ
カムチャッカ半島
オホツク海
島列シャシーユリア
湾ソリドハ
ダナカ
國衆合カリメア
大
西
洋
太
平
島諸イワハ
(線歸回北)
メキシコ
湾コシキメ
島諸度印西
海ブリカ
島諸洋南
(道赤)
ヤーギュ
海瑚珊
島諸キヒニマ
島諸ツモウパ
(線歸回南)
ペルー
ボリビヤ
ルジラブ
ラエズネベ
ナヤヒギ
ヤビンロコ
アルゼンチン
ラトスーオ
日本海
日本
東京
(4290) 至バンクーバー
(4259) 至シャトル
(3273) ドン口至
(4196) ドン口至
(4330) ルタルラブシ至



大東亞戰爭世界要圖
凡例
主ナル海空戰
日本軍占領地
砲撃箇所
爆撃箇所
奇襲箇所
海軍根據地
潛水艦基地
航空基地
海上距離(浬)
日本
日本海
滿洲國
外蒙古
支那
印度
印度洋
アラビヤ海
オーストラリヤ
南洋諸島
珊瑚海
オホーツク海
スペイン
フランス
ドイツ
イギリス
イタリー
トルコ
イラン
アフガニスタン
アラビヤ
リビヤ
エジプト
エチオピア
ケニヤ
サハラ大沙漠
佛領西アフリカ
南西アフリカ
南アフリカ聯邦
マダガスカル島
ボルネオ
ニューギニア
フィリッピン諸島
佛領印度支那
タイ
ビルマ

南太平洋方面要圖



二ケ年の海軍綜合戰果と敵米英艦船關係人的損害推定

艦種	基準乘員	アメリカ 撃沈破 隻數	アメリカ 撃沈破 人的損害	アメリカ 撃沈破 人的損害合計	アメリカ 捕拿	イギリス 撃沈破 隻數	イギリス 撃沈破 人的損害	イギリス 撃沈破 人的損害合計	イギリス 捕拿	オランダ 撃沈破	オランダ 捕拿	わが方の損害 沈没	わが方の損害 大中破
戰艦	一、三〇〇	二	一、三〇〇	七、三五〇	一、八二〇	二	一、三〇〇	四、三四					
空母	一、四〇〇	二六	一八、八〇〇	二〇、二五〇	二、八二〇	一	七〇〇		七〇〇			一	一
巡洋艦（眞珠灣）	五〇〇	八	二〇〇	二〇、二五〇	二、六二〇	九	二、二五〇	三、二五五				三	五
巡洋艦（その他）		二	四六	四六	二四、一六〇								
驅逐艦（眞珠灣）	一五〇	六一	四、五七五	四〇	一、〇〇〇	一四	一、〇五〇	一、一七五		四		三	二
驅逐艦（その他）					五、五七五								
特務艦（眞珠灣）	四五〇	一	九〇	九〇	九〇	一	一五〇	一五〇		一		二	一
特務艦（その他）		二	五二〇	五二〇	五二〇								
潜水艦	一〇〇	一四七	一四、七〇〇	一四、七〇〇	一、〇五四							二	五
砲艦	二〇〇	八	二〇〇	二〇〇	二〇〇								
駆逐艦	一〇〇	六	一〇〇	一〇〇	一〇一〇								

二ケ年の海軍綜合戰果と敵米英艦船關係人的損害推定

艦種	基準乘員	アメリカ 撃沈破						イギリス 撃沈破						オランダ 撃沈破						わが方の損害 沈没		大中破
		撃沈		人的損害	撃破		人的損害	撃沈		人的損害	撃破		人的損害	撃沈		人的損害	撃破		人的損害			
		撃破	人的損害合計	捕拿	撃破	人的損害合計	捕拿	撃破	人的損害合計	捕拿	撃破	人的損害合計	捕拿	撃破	人的損害合計	捕拿	撃破	人的損害合計	捕拿			
戰艦（眞珠灣その他）	一、三〇〇	二	一、三〇〇		二	一、三〇〇		二	一、三〇〇		二	一、三〇〇										
空母	一、四〇〇	二六	一八、八〇〇		一三	二、八二〇		一三	二、八二〇		一	七〇〇										
巡洋艦（眞珠灣その他）	一〇〇	二	二〇、二八〇		六	三、九一〇		三	二五、五〇五		九	二、二五〇										
驅逐艦（眞珠灣その他）	一五〇	六	四、五七五		二	四〇		二	一、一七五		四	一、〇五〇										
特務艦（眞珠灣その他）	四五〇	一	五二〇		九〇			一五〇			一五〇											
潜水艦	一〇〇	一四七	一四、七〇〇		六二	一、〇五四		一五、七五四			九〇											
砲艦	二〇〇	八	八〇〇		六	二一〇		一、〇一〇			七四											
掃海艇	二〇	七	一四〇		一	七四								二								
魚雷艇	一三	三	二八〇		七	二一		三〇一														
小艦艇	二〇	二	二一〇		二六	一〇四		三一四						一								
特殊艦艇	五〇	三	七五		二	一八		九三						二								
艦型未詳	三〇〇	六	九〇〇		三	二五〇		一、一五〇														
合計			六九、九二〇			二二、一九四		八二、二一四						五、三〇〇								
船舶（兵員輸送船その他）	一、五〇〇	三一	三八、二五〇		一〇一	二五、二五〇		六三、五〇〇			六	四五〇		二	九六四		二七〇	七、二五〇		船舶の拿捕五〇三隻二十二萬トン		九六
	一〇〇	一三二	五、〇〇〇		三四	三四〇		八〇四〇			一九	九五〇		三四	三四〇		一、二九〇					
合計			四三、二五〇			二八、二九〇		七一、五四〇				五、四五〇			五、〇九〇		八、五四〇					
總計		一二三、一七〇			四〇、四八四			一三三、六五四			一〇、七五〇			四〇五四			一四八〇四					
飛行機撃墜	五、一五八	撃破	一、七一六	合計	六、八四〇														自爆未歸還	一、一五三		

註

1. 本表は帝國海軍綜合戰果を基準とせるものにして、艦艇の損害中、米英獨何れに歸屬するや不明なるものは悉くこれを米國艦艇とし、撃沈破船舶の十分の九及び十分の一は米國および英國の船舶とする。2. 艦艇の人的損害は、撃沈の場合には基準乗員の二分の一（眞珠灣攻撃の場合は五分の一）撃破の場合には六分の一（眞珠灣攻撃の場合には十分の一）とするも潜水艦撃沈の場合には全員を損害とす。撃沈には轟沈を含む。船舶一隻平均五、〇〇〇トンとし、そのうち撃沈撃破の比を一對二とし、また兵員輸送船と軍需品輸送船との比を一對三とす。撃沈には轟沈を含む。3. 船舶の拿捕は、その他とは、ニューヂョーヂア、ベラベラ、コロンバンガラ。それぞれ米國及び英國の所屬とする。4. 兵員輸送船及び軍需品輸送船撃沈の場合には、基準乗員の二分の一づゝ、また撃破の場合には十分の一を以てそれぞれ米國及び英國の所屬とする。

大東亞戰爭二ケ年間の敵米英軍に與へた人的損害

米軍（總計二七六、八〇五）

	戰死	戰傷病行方不明	撃墜	乗員損害	合計
地上部隊（除俘虜）					
比島	六〇〇	一、二〇〇			
ガダルカナル島	四、〇〇〇	（米濠合計）一八、〇〇〇			
アッツ島	一、〇〇〇	二五、〇〇〇			
ラバウル			（米濠合計）四、〇〇〇		
サラモア	一、〇〇〇		（遺屍）一、〇〇〇		
エトロキナ	一、〇〇〇				
その他	二、五〇〇		二、五〇〇		
計	一〇、一〇〇	四二、〇〇〇	四、七〇〇		
香港	三〇〇	英印軍遺屍 一、五五五	合計 八、二一〇		
マライ	一、六〇〇	英濠軍遺屍	英重印軍遺屍		
緬印	九、〇〇〇		三六、〇〇〇		
計	一〇、九〇〇	合計 七三、三八三	三六、〇〇〇		七、七〇〇
合計	二一、〇〇〇				

註

ガ島、ブナ方面の皇軍轉進完了までの敵側の損害二五、〇〇〇のうち米軍の損害を二二、〇〇〇とする。戰傷病および行方不明は戰死の約五倍とする。その他とはニューヂョーヂア、ベラベラ、コロンバンガラ。香港およびマライにおいては英軍全體の遺棄死體の約五分の一を以て英本國軍の戰死とする。

英軍（總計一二三、一四一）

	撃墜	乗員損害	合計
空軍			
戰闘機	五、二四三	五、二四三	
爆撃機	一、七四七	一三、九七六	一五、七二三
註	戰闘機と爆撃機との比率を三と一とする。戰闘機および爆撃機の乗員をそれぞれ一人および八人とする。撃墜機全乗員を戰死として、人的損害には戰死以外の戰傷を加算せず。		
陸軍による撃墜數（戰・爆を含む）（十一月二十二日まで）			二三、四七
海軍による撃墜數（戰・爆を含む）（十二月七日まで）			四、六四三
艦船關係			
陸軍機によるもの	艦艇乗員の損害	船舶乗員の損害	合計
海軍によるもの	二八、二九〇	七、二四〇	三五、五三〇
註	八、二一四	七、五四〇	一六、四五四
陸軍機による綜合戰果二八九隻（昭和十六、七年度一〇四、十八年度一八五）のうち、米英の比率をそれぞれ八と二とする。			
俘虜	三、八四三	四、八八九	七、七三二
總計	三九、九四六（同期間に米英軍による我が方の戰死傷約一五九、〇〇〇名）		

	戦傷病	行方不明	米濠合計	英印軍遺屍	英濠軍遺屍	英軍印軍遺屍	合計
部隊（俘虜）	一、一〇〇	一八、〇〇〇（二五、〇〇〇）	五、〇〇〇	四、〇〇〇（一五、〇〇〇）	二、〇〇〇（遺屍 九〇〇）	二、五〇〇	四二、七〇〇
空軍						一、五五五	八、三一〇
艦船關係						三、〇〇〇	七三、三八三
總計						三、〇〇〇	六、七〇〇

註　ガ島、ブナ方面の皇軍轉進完了までの敵側の損害二五、〇〇〇のうち米軍の損害を二二、〇〇〇とす。戰傷病および行方不明は戰死の約五倍とす。その他とはニューギニア、ベラベラ、コロンバンガラ。香港およびマライにおいては英軍全體の遺屍死體の約五分の一を以て英本國軍の戰死とす。

空軍

	撃墜	乗員損害
戰闘機	五、二四三	五、二四三
爆撃機	一、七四七	一三、九七六

註　戰闘機と爆撃機との比率を三と一とす。戰闘機および爆撃機の乗員をそれぞれ一人および八人とす。艦隊機全乗員を戰死として、人的損害には戰死以外の數を加算せず。

陸軍による撃墜數（戰・爆を含む）（十一月二十二日まで）　二、三四七

海軍による撃墜數（戰・爆を含む）（十二月七日まで）　四、六四二

	撃墜	乗員損害	合計
陸軍機によるもの	八九八	三〇〇	一、二〇〇
海軍によるもの	八九八	二、四〇〇	三、三〇〇
合計	六、一四〇	一六、三七六	二六、五一六

艦船關係

	艦艇乗員の損害	船舶乗員の損害	合計
陸軍機によるもの	二八、二九〇	七、二四〇	三五、五三〇
海軍によるもの	八、二六四	八、五四〇	一六、八〇四
合計	三三、八四三	四九、八九九	七二、六四二

註　陸軍機による綜合戰果二八九隻（昭和十六、七年度一〇四、十八年度一八五）のうち、米英の比率をそれぞれ八と二とす。

三九八、九四六（同期間に米英軍による我が方の戰死傷約一五九、〇〇〇名）

宣戰の詔書

（昭和十六年十二月八日渙發）

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

大東亞戰爭 海軍戰記 4

目次

◇宣戰の詔書……（卷頭）

大東亞戰爭の決戰段階……大本營海軍報道部長 海軍大佐 栗原悅藏（三）

戰記

南太平洋戰局……（二二）

ガ島轉進後の熾烈航空決戰……レンネル島沖海戰……イサベル島沖海戰

山本司令長官の陣頭指揮……（三〇）

士氣昂揚する前線將兵……フロリダ島沖海戰……ニューギニヤ敵據點強襲……最前線の山本長官……山本元帥の壯烈なる機上戰死

ルンガ沖航空戰……（四四）

航空決戰の新展開……南太平洋の死鬪……レンドバ島白晝の强襲

クラ灣夜戰……（六三）

水雷戰隊の本領發揮

コロンバンガラ島沖夜戰……（七二）

水雷戰隊の連續痛打……第一次海戰……第二次海戰

敵强引の正面作戰……（七八）

南太平洋の基地轉進……ブーゲンビル島海域の諸戰鬪

ブーゲンビル島沖海戰……（八四）

敵水雷戰隊擊破……同士討を演ず

ブーゲンビル島沖航空戰……（九〇）

第一次ブーゲンビル島沖航空戰……（九〇）

第二次ブーゲンビル島沖航空戰……（九六）
第三次・第四次ブーゲンビル島沖航空戰……（一〇五）
第五次ブーゲンビル島沖航空戰……（一一二）
第六次ブーゲンビル島沖航空戰……（一一八）
ギルバート諸島沖航空戰……（一二三）
第一次ギルバート諸島沖航空戰……（一二三）
第二次・第三次ギルバート諸島沖航空戰……（一三一）
第四次ギルバート諸島沖航空戰……（一三九）
マーシヤル諸島沖航空戰……（一四一）
敵わが領土に侵攻

北太平洋戰局……（一四七）
アッツ血戰の前奏曲……伊號第〇〇潛水艦奮戰……キスカ撤收作戰……
北太平洋戰局新段階へ
潛水艦作戰……（一六九）
忍苦の中の敢闘精神……サンフランシスコ型擊沈……補給戰に活躍
ビルマ・印度洋方面作戰……（一八五）
初陣の獲物發見……月明下再度の襲擊……敵飛行圏内に潛入……敵商船を擊沈……アラビヤの唄
支那方面海軍作戰……（二〇〇）
陸軍部隊との協力……廣州灣進駐……支那方面一ケ年の綜合戰果
上聞に達せる武勲錄……（二〇八）

空母戰艦を屠る（〇〇部隊機動部隊）
（基地航空部隊〇〇部隊）
敵軍事施設を壞滅（第〇〇機動部隊）
監視艇の殊勳（特設監視艇第〇〇丸）
凄烈ツラギ夜戰（〇〇部隊夜戰部隊）
空母集團を殲滅（機動部隊）
（〇〇部隊航空部隊）
夜戰敵艦隊殲滅（〇〇部隊挺身攻擊隊）
（〇〇部隊ガダルカナル島攻擊隊）
水雷戰隊の偉勳（〇〇部隊增援部隊）
大東亞戰爭海軍作戰經過一覽表 4……（二三一）

海軍戰記　第四輯

大東亞戰爭の決戰段階

大本營海軍報道部長
海軍大佐　栗原悅藏

重大戰局へ突入

今や全世界はまさに決戰の段階に突入した。しかも全世界の戰局は依然として長期戰の相貌を呈し、いつ果つべしともみえぬ激戰が、世界の各戰線にわたつて續行されてゐる。長期戰的決戰――それがまさに現在の戰局である。

世界の戰局は、太平洋と歐洲の二方面にわたつて展開されてゐるが、この兩方面の戰鬪は、つねに密接不離の關係をたもちつゝ進展してゐるのである。これは言はずしてあきらかなる事實であるが、たとへば昨年六月三十日の敵レンドバ島上陸作戰が、北阿戰鬪の終了を一つの原因としてゐたことを考へれば、いかに兩方面の戰鬪が相互に直接的な影響をもつものであるかをしることができ

るのである。

今次大戰の主流は、いふまでもなく樞軸對反樞軸の戰鬪であり、太平洋においては、日本對米英の一貫した戰鬪が熾烈に展開されてゐる。歐洲方面においては、獨、伊（ムッソリーニ政權）對米英の戰鬪とならんで、獨ソ戰がきはめて重大な展開を遂げつゝあるため、太平洋方面と異り、純軍事的發展のほかに、政治的に微妙な展開を生じ、複雜なる樣相を呈してゐる。

ことに、米英ソ三國間の政治的對立問題のごときは軍事的諸問題とならんで世界史の運命を決定すべき波瀾を包藏してゐるものといふことができる。しかし、われわれは、歐洲の複雜な情勢に眼を轉ずる前に、大東亞戰爭が現在いかなる段階に立つてゐるかを考察しなければならない。

意義重大な緒戰の戰果

現在太平洋における主戰場は、南太平洋並に中部太平洋、ニューギニヤ島であり、敵米國は全力をあげて、侵攻に狂奔してゐるが、この敵の侵攻も要するに緒戰における軍事的敗北の回復と占領地の奪還を目標としてゐるのである。この意味において潛在的な主戰場はいふまでもなく、わが南

方共榮圈なのである。したがつて大東亞戰爭の問題の中心は、わが南方共榮圈の重要性にあるのであるが、この南方共榮圈の重要性をかんがへることは、すなはち大東亞戰爭における緒戰の意義をかんがへることにほかならないのである。

大東亞戰爭勃發以來、約半歲にして大東亞共榮圈の武力的戡定が成り、それ以來わが方は有利なる戰略的態勢にたち、漸次南方共榮圈の開發をすゝめつゝ敵の反攻を邀へ擊つて奮戰しつゝあるのであるが、この開戰以來大東亞共榮圈の武力的戡定が成就するにいたるまでの戰鬪すなはちいはゆる緒戰なるものは、そも〳〵いかなる意義をもつものであらうか。

緒戰において、帝國陸海軍部隊は戰史に稀にみる偉大なる戰果をあげたのである。この戰果にたいし、一億國民が有頂天になつてよろこんだのもむしろ當然なことである。もちろんこの戰果なくしては大東亞共榮圈の戡定も爾後の戰鬪も不可能だつたのであるが、われわれはこの戰果をよろこぶと同時に、この戰果がうみだした眞の成果についてふかく考察しなければならない。しからばこの緒戰の眞の意義はどこにあつたかといへば、それは日本がはじめて自給自足の經濟を確立したこと、すなはち初めて日本が生產しつゝ戰爭を戰ひ拔く資格をうるやうになつたことにあるのである。

大東亞戰爭勃發前までは、日本は資源的に自給自足ができなかつたのである。當時においても日本はいはゆる日滿支の經濟ブロックを確保してはゐたのであるが、このブロックには石油がない、アルミニウムの材料であるボーキサイトもない、ゴムもない、錫もないといふ狀態だつたのである。平時、戰時を問はず現代の國民經濟にとつて缺くことのできない石油、ボーキサイトのやうな資源が當時の日本には缺けてゐたのである。しかも支那事變後米國の對日壓迫はだんだん强烈となり、いまにも日米間には戰端がひらかれんとする形勢にあつたのであるが、そのころまで日本はこれら不可缺の資源をじつに想定敵國米國から買入れてゐたのである。これは日本にとつてはまさに致命傷である。一旦日米間に戰端がひらかれたならば、血の一滴といはれる石油や、肉の一片といはれる鐵の不足のため、戰爭を遂行することは完全にできなくなるのである。

それだから、現代戰すなはち大消耗戰であり、補給戰の特質である、生產しつゝの戰爭を遂行するためには、どうしてもこの必要な戰略資源のあるところを取らねばならない。しかるに幸ひにしてこの日本に無い資源がほとんどすべて南方共榮圈にあるのである。石油は蘭印にある、ボーキサイトはビンタン島にある。錫、ゴムについてはマライ半島は世界第一の產地である。

したがつてこの南方諸地域を取りさへすれば、戰爭をやりとげる力を獲得することができるのである。大東亞戰爭は、御詔書に拜承するやうに、まことにやむを得ざるものではあるが、わが國としてはこれらの地域を戡定しなければ眞に一人前の國となることができなかつたのである。これらの諸地域を順調に戡定することができ、日本が獨力で戰爭をやりとげる力を獲得したといふところに緒戰の眞の意義があるのである。

なほ、この南方共榮圈についてかんがへるならば、この南方共榮圈は日本の寶島である。手近な比喩をもちゐれば、現在日本の手にあるこの南方共榮圈、すなはちスマトラ、ジャワ、ニューギニヤ、ボルネオ、セレベス、フィリッピン、臺灣はちやうど七福神の乘つてゐる寶船のやうにみえる。スマトラ、ジャワ、ニューギニヤを船體とすれば、ボルネオ、セレベスの方へ大きい帆をはつてその先端の臺灣に日章旗をたてゝゐる。

これはまさに日本の寶船である。しかもこの日本の寶船は同時に世界の寶船である。世界のいづれかの强國がこの寶船を所有したならば、その强國こそ世界最大の强國となる資格をもつのである。なぜならば、この地域にある島々を所有する强國は西太平洋および印度洋の制海權を自己の手に掌握することができ、また遂に西太平洋と印度洋の制海權を獲得する國は蘭印方面の島々を占有しうる資格のある國であり、さらに西太平洋、印度洋の制海權を掌握する國は濠洲、印度を掌握す

る國でもあるからである。

このことはかつて一小シンガポールを所有してゐた英國が廣大なる印度、濠洲を制壓してゐたことをかんがへれば明らかである。すなはち南方共榮圏の諸島嶼は地球上もつとも重要な戰略的地位をもつものであるといふことができるのである。

しかもこの方面には非常に多くの資源がある。すでに述べたやうに、石油、ボーキサイト、ゴム錫が豐富にあるほか、ダイヤモンド、銅、石炭も採掘されてをり、さらにボルネオ、ニューギニヤ方面においては今後いかなる資源がいかに豐富に發見されるかしれないのである。また將來有機物を無機物にかへる時代がくるならば、太陽熱と海洋の影響にめぐまれたこの方面の地帶は世界の寶庫になるであらうし、また現になりつゝあるのである。砂糖からアルコールを製造し、ゴムから潤滑油をつくり、あるひはパーム・オイルやコプラからいろ〳〵な油脂を製造するなどはまさしくそれであつて、このことをかんがへるならば赤道附近にあるこの方面の大森林はじつに無限の寶庫である。このほとんどすべての戰略的資源を有し、將來の無限の寶庫である南方共榮圏を確保したといふことこそ緒戰の眞の意義なのである。

制空權爭奪と敵の量的攻勢

敵米英も、もとよりこのことはよく知つてゐるのであつて、米英が現在わが南方共榮圏を奪回せんものと必死の反攻をおこなつてゐる理由もまたそこにあるのである。しかもこの共榮圏は時の經過とともにその防禦も開發もわが方に有利となることは必然であり、したがつて米英の戰爭挑發者達は、わが國がこの共榮圏を完全に開發し、必勝不敗の態勢を完成するのを阻止せねばならぬと呼號しつゝ必死になつてわが南方共榮圏に迫らんとして、いまや南太平洋ならびに中部太平洋方面に大規模な反攻をつづけてゐるのである。

現在南太平洋ならびに中部太平洋方面に於て行はれてゐる戰鬪は、これを兵術的にいへば航空基地の爭奪戰である。しかして航空基地の爭奪のために制海權の爭奪戰と、さらに制海權に先行する制空權の爭奪戰が行はれてゐるのである。南太平洋方面においては、敵は昨年六月三十日ソロモン群島、レンドバ島、ニューヂョーヂァ島に上陸を開始して以來多數の艦船、航空機をくりだして反攻をつゞけ、これにたいしわが陸海空の精鋭は全力をあげて敵反攻の擊碎につとめ、敵は莫大なる

損害をかうむつたのであるが、いはゆる量的攻勢の名のごとく敵はいかなる損害をもかへりみず反攻を續行し、ニューヂョーヂア島よりコロンバンガラ、ベララベラ兩島、コロンバンガラ、ベララベラ兩島よりブーゲンビル島トロキナ岬に進み、さらに昨年十二月にはニューブリテン島マーカス、グロスター兩岬に上陸し、同時に尨大な航空機をもつて連日ラバウルに來襲しつゝあることは、當時連日發表されたとほりである。またニューギニヤ島方面においては昨年六月三十日、敵はレンドバ島上陸と同時にサラモア南方のナッソウ灣に上陸を開始し、さらにその後ラエ北方のホボイならびにフィンシュハーフェンに上陸してラエ、サラモアのわが軍を挾撃し、フォン半島を中心として激烈なる戰鬪が展開されつゝある。

さらに中部太平洋方面においては戰局とみに緊迫化し、敵米國は昨年十一月ギルバート諸島を奪回してこゝに航空基地を設け、本年に入るやわがマーシャル諸島に連日航空機をもつて來襲し、一月三十日にはつひに有力なる機動部隊をもつてマーシャル諸島に侵攻しきたり、勢に乘じた敵は二月十七日わが戰略要衝トラック島に對し數百機をもつて反覆空襲を加へきたつた。これはすでに大本營より發表され國民の耳朶を打つたのであるが、中部太平洋戰局をかくのごとく緊迫化せしめたものは彼我の航空兵力の量の懸隔であつた。太平洋の各方面において熾烈に展開されつゝある航空

「決戰に一日も早く、一刻も早く敵に對抗しうる航空機を充實しなければならない。

歐洲戰線の機微

以上において大東亞戰爭の現段階を考察したのであるが、ひるがへつて歐洲情勢を眺めると、東部戰線においては獨ソ兩軍依然として必死の激鬪を展開してゐる。昨年來の獨ソ戰においてもつともいちじるしいことは、夏季つねに壓迫されてゐたソ軍が昨夏遂に反擊に出たことである。獨軍は昨夏地中海戰局の進展とともに獨ソ戰にとつて歷史的なオリョール、スモレンスク、ハリコフ、スターリノ、ブリヤンスク等を撤收し、漸次戰線を整理しつゝ昨年九月下旬にいたるやキエフ、サポロジエよりアゾフ海にいたる線においてソ聯軍と對峙しあるにいたり、ドニエプル河の線においてソ軍の必死の猛攻に反擊をくはへ、ソ聯軍に甚大なる損害を與へつゝあつたが、今後戰局の進展の如何はポーランド線戰ならびにクリミヤ線戰の動きを決するものとして注目されるのである。また地中海方面においては米英軍はパンテラリヤ島、シチリヤ島の戰鬪からバドリオ政權の裏切りによつて伊本土へ上陸し、これに對し機敏な處置を講じた獨軍と目下中部伊太利に於て激戰をつゞけつ

ゝある。

この伊太利の脱落の結果、伊太利艦隊の一部が反樞軸側にはしつたことは、敵のビルマ奪回作戰をかんがへる時、わが國としても大いに警戒しなければならないのである。さらに米英軍は英國を基地とする對獨空襲を執拗にくりかへし、またさらに伊本土上陸作戰も、この方面を基地として獨逸に對し大航空兵力を展開することを一つの目的としてゐるのであつて、歐洲戰線においても、航空戰の樣相は、十九年五月以降は極度に深刻化しつゝある狀況である。

現在盟邦獨逸は東部戰線においてはソ軍に對し伊太利戰線においては米英軍に對し奮戰を續けてゐるが、武力的に獨逸を敵として協同作戰をとつてゐる米英ソ三國も政治的には必ずしも一致せず、ことに第二戰線問題、ポーランドおよび沿バルト三國をめぐる對立は激化の一途をたどつてゐる。こゝに歐洲情勢の微妙な展開がみられるのであるが、それはともかくとして、獨逸の直面せる情勢も容易なものではないのであつて、われわれは盟邦獨逸の今後いつさうの奮戰を切望してやまないのである。

增產補給の決戰

さてふたたび太平洋方面の戰爭に還るが、この方面の戰果はこれを經濟的にみるときは大消耗戰であり、大補給戰であり、大生產戰である。したがつてこの方面の戰果を決定するものは生產であり、補給である。しかも太平洋において展開されつゝある戰果の最大の特徵は、基地對基地の攻防戰、すなはち敵の言葉を借りていふならば「島から島へ」の戰鬪である。かやうな戰鬪においてはもつとも必要なものは補給である。なぜならば、これらの基地は日米共に本國をはなれてゐるうへに、現地においては自己生產力、自己補給力をもたないために、すべての補給を後方に仰がなければならないからである。

したがつて後方に莫大な補給源を有し、强大な輸送力をもつことが必要である。補給力と輸送力こそ現在南太平洋において展開されてゐる、消耗戰の運命を決定するものであるといふことができる。しかしてこの補給力、輸送力はじつに銃後の生產によつてうまれるものである。飛行機の生產艦船の建造はそのまゝ前線における戰鬪力となつてあらはれるのである。したがつて一億國民のす

べての活動が戰爭の勝敗を決定するといつても決して過言ではない。前線の將兵の奮戰にむくいるために國民はいかなる犧牲を拂つても生產の增强に邁進すべきである。

この生產戰の問題において一言注意しなければならないことは、われわれは必ずしも米國と同程度の生產を行はねば勝利を獲得することができないのではないといふことである。たゞ統帥部の要求する量の生產を行ひさへすれば充分なのである。統帥部の要求する數量はもとより明記することはできないが、しかし天文學的な數字ではない。この數量に達するだけの生產を行ひさへすれば、われわれは勝利を期待することができるのである。

なほ船舶ならびに輸送の問題について述べるならば、大東亞共榮圈內の物資の交流、すなはち他の言葉でいへば大東亞共榮圈必勝不敗の態勢の確立のために、もつとも重要なものは船舶である。南方共榮圈內には、一億國民の周知のごとく、主要な資源が豐富にあるのであつて、これを完全に活用するにいたるならば、わが國の國力はまさに無限に飛躍する可能性を有するのである。このことをかんがへたゞけでも船舶の重要性は明らかである。米國としてもわが南方共榮圈の確立、大東亞共榮圈の物資の圓滑な交流は大なる脅威であり、致命傷であることを痛感してをり、そのためにわが輸送路を破壞せんものと必死になつてゐるのである。しかしながらわが方の對潛防禦は漸次强化

されつゝあり、近き將來敵潛に對する防禦が完全になつたあかつきには大東亞共榮圈內の物資の交流は一層圓滑となり、わが國の生產力が急上昇することは明らかで、そのときこそわが方が完全に米國を屈服せしめうる日であり、われわれはその日を期待しつゝ戰つてゐるのである。

米國は現在がもつとも生產力の上昇しつゝある時期であり、したがつて米國の反攻が熾烈であることはむしろ當然である。けれども米國の生產力にしてもおのづから限界があるのであつて、米國の生產力が上昇しつゝある現在その侵攻を完全に擊碎したならば、その後にきたものはわが方の反擊の時期であり、大東亞共榮圈を打つて一丸とした力によつて究極の勝利を獲得することができる。かくて、われわれの前途には洋々たるものがあるのである。

總智もつて科學戰へ

戰時において生產がいかに戰鬪の勝敗にとつて決定的であるかといふことはこれ以上敍說を要しないところであるが、生產といつても、單に既存のものをそのまゝ生產してゐるのでは不充分なのである。單に既存の武器をそのまゝ生產し、武器の發明改良を怠るならば、いかに大量生產を行つ

たにしても勝利を獲得することは出來ないのである。

新たなる武器は戰爭形態を變革するばかりでなく、戰爭の勝利を招來する根據的な力である。第一次世界大戰における聯合軍の勝利が英國の戰車の發明によることまことに大なるものがあり、また日露戰爭における日本軍の勝利がいはゆる下瀨火藥の發明に俟つところが多かつたことをかんがへたゞけでも、新たなる武器の發明がいかに戰爭の勝利にとつて決定的であるかは明瞭である。

だから、戰時に於ける生產の使命は單に既存の武器を大量に生產することにあるのではなくして、新しい優秀な武器を大量生產することにあるのである。すなはち、戰時における生產は單なる生產ではなくして科學的生產でなければならないのである。

今次大戰においても、交戰各國は科學陣を總動員して新兵器の考案に狂奔してゐる。いま敵米國の狀況をみると、米國においてはほとんど一切の科學者が動員され、現在軍需生產のために動員されてゐる米國の科學者は六十四萬人にのぼるといはれ、彼等は「科學振興局」といふものによつて統一せられ、共同して科學戰にあたつてゐるが、現在までにおいても電波探信儀、磁氣爆發尖の發明、照明彈、火焰放射器の改良等相當の業績を擧げてゐるのである。

元來戰時における科學の主なる使命は二方面にあつて、その一つはいふまでもなく武器の發明、

改良であり、他の一は代用品の考案である。まづ前者について二、三具體的な說明を加へると、前記の電波探信儀のごときは最近とくに發達したものであつて、これはいままで使用されてゐた眼鏡あるひは肉眼にかはるものであるとともに遙かに强力なものであり、この電波探信儀の發明は夜戰を根底からくつがへす偉大な發明である。現在交戰各國とも海戰に空戰にこの電波探信儀を使用しつゝある。八月十三日の英國爆擊機のベルリン空襲に際してドイツ側が電波探信儀を使用したのにたいし、英國側は電波探信儀妨害用の金屬箔を散布したともつたへられ、科學戰はいまや酣に達してゐる感がふかい。また、魚雷には命中效率の大なる磁氣爆發尖が用ひられてをり、さらに照明彈のごときも光源の捕捉を防ぐ强力なものが發明されてゐる。

科學はこのやうに直接戰鬪に使用される武器にたいして貢獻をなすばかりでなく、その他基地設營力——たとへば飛行場建設用の機械——あるひは天候氣象の測定等その効果はあらゆる方面におよび、さらに糧食の方面——たとへばヴイタミンの發明——においても戰鬪力の强化に役立つてゐるのである。

つぎに代用品の發明であるが、これはもはや贅言を要しないところであつて、人造石油、人造ゴムの發明等直接戰鬪に關與する代用品の發明から一般消費材における代用品の發明にいたるまで、

科學の活躍すべき部面は無限である。したがつて現在においては科學戰に敗れるものは戰爭に敗れるといふも決して過言ではないのである。しかも科學の進歩は日進月歩であつて、一瞬といへども遲延することをゆるされない狀態である。

現在の戰鬪はまさに航空科學戰であり、電波兵器戰である。われわれはいかなることがあらうとも敵米英に對して航空科學戰の、また電波兵器戰の勝利を爭ひとらねばならない、そしてそのためには全國の科學者の協力を必要とすることはいふまでもないが、一億國民こぞつて科學に傾倒し、科學者の研究をたすけ、もつて科學戰における勝利へ邁進する決意を必要とするのである。

國民戰鬪配置へ

現在の決戰はことごとくすでに述べたやうに、大消耗戰であり、大補給戰であり、大生產戰である。したがつて前線、銃後を一體とした力によつてはじめて戰爭が遂行できるのである。これを一つの軍艦に例をとつてみると、軍艦には敵艦にむかつて砲彈をうつ砲員がをり、この砲員のところへ彈藥をはこぶ給彈員がをり、この給彈員に彈藥をわたす彈火藥庫員がをり、この三者の力によつてはじめて戰鬪ができるのであつて、この三者はみな戰鬪員である。現在第一線で戰つてゐる將兵はこの砲員にあたり、補給に從事してゐるものは給彈員に當り、銃後において生產にしたがつてゐるものは彈火藥庫員にあたるのであつて、銃後において生產に從つてゐるものも立派な戰鬪員なのである。一億國民のすべてが同じく立派な戰鬪員であるといふことこそ總力戰の眞の意味であつて、偉大な戰鬪力はまさにこゝから生じてくるのである。

くりかへし述べたやうに、いまや太平洋の戰局は重大な局面にあり、ことに中部太平洋における戰局は極度に緊迫化してゐる。敵のマーシャル諸島上陸はわが神聖なる領土に對する敵の最初の侵攻であるばかりでなく、中部太平洋における爾後の敵侵攻、とくにトラック島との關聯、あるひはフィリッピンおよびわが本土へ向ふ侵攻基地として由々しき出來ごとであり、また南太平洋、ことにラバウル戰局との關聯もまた重大である。

ギルバート諸島を奪還しマーシャル諸島を侵攻した敵は大機動部隊をもつて二月十七日、ついにトラック島に來襲してきた。その侵攻をみるにもつとも警戒すべきは敵が勢に乘じて强力な侵攻企圖を有してゐることである。すなはち敵はギルバート諸島を奪還した勢に乘じてマーシャル諸島に來襲し、マーシャル諸島に侵攻した勢に乘じてただちにトラック島に來襲してきてゐる。しかも敵

はみづから誇號する大規模な機動部隊をもつて來襲しきたつてゐる。したがつてわが方は勢に乘じた敵の侵攻を何としても現在のわが戰略要線上において徹底的に擊滅しなければならない。

敵大部隊がギルバート諸島からトラック島にまで來襲してきた狀況はまさに六百年の昔弘安、文永の役に元の大軍が壹岐を侵し、對島を略して博多灣に迫つた狀況を髣髴たらしめるものである。弘安、文永の役に壹岐對馬の守備にあたつた御家人は寡兵よく元の大軍と最後の一兵にいたるまで奮戰して玉碎したのであるが、その報至るや、日本全土は敵愾心に沸きたち、老いも若きもすべて一切を元寇の擊滅に捧げたのであつた。かくて元の大軍は博多灣において壞滅的打擊を受けて敗退し、わが國は安泰なることを得たのである。

まさにギルバート諸島は壹岐にあたり、マーシャル諸島は對馬にあたるといふことができる。しかして敵はいま太平洋の博多灣ともいふべきトラック島に迫つてきた。六百年の昔、壓倒的に優勢な、しかも新しき兵器と戰術とをもつて來攻せる元の大軍を、一擧に多々良濱邊に擊滅した當時の國民的團結と勇猛心を振起して、一億協力もつて大日本帝國を永遠の安きにおかなければならない。

海軍戰記

南太平洋戰局

ガ島轉進以後の熾烈航空戰

波たかき南太平洋の一角、ガダルカナル島に、皇軍挺身部隊が、言語に絶する困苦缺乏に耐えて約半歳にわたり勇戰奮闘、血みどろの死闘を續けてゐるとき、後方ソロモン群島の各要線には、强靱な戰略的陣地が完成しつつあつた。

後方における戰略的根據地の設定が完了すると、たゞちに、隱密裡に、挺身部隊は轉進を開始した。すでに敵が飛行場を設け、絶えざる艦艇群の監視の目を放つが島の一角から轉進することは、非常に困難な作戰であつた。勇士らは、かつて幾多戰友の屍をふみ越えて、壯烈な戰ひを續けた思ひ出の激戰場と訣別した。名殘りを惜しむ勇士たちの感慨は、いかばかりであつたらうか。

轉進は、敵前において堂々と行はれた。〇〇隻の驅逐艦に乘艦して、一兵をも損せず、きはめて整齊確實に、昭和十八年二月上旬、戰略的轉進を完了したのである。

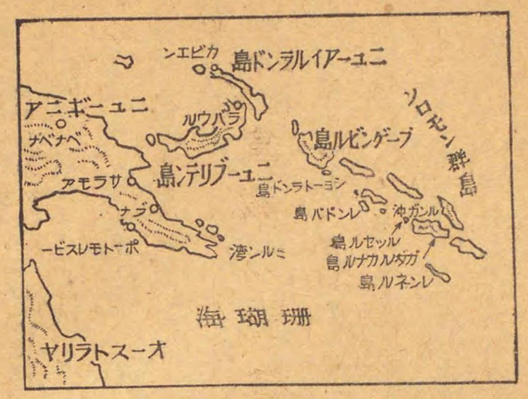
轉進によつて、南太平洋における攻守自在の態勢を獲得した帝國陸海軍部隊は、攻擊精神を極度に發揮して敵反攻に斷乎大鐵槌をふりおろした。かくて彼我の制空權の爭奪は、晝夜をわかたず、連日苛烈を極めてきたのである。

敵は十七年の十二月ごろから、艦隊の損害を避けるため漸次航空戰による反擊を狙ひはじめた。その傾向は、昭和十八年二月のわが轉進作戰以後いよいよ拍車をかけてきた。

航空戰が戰爭の上に決定的に現はれて、つひに「航空決戰」とよばれる現段階に立ちいたつたのである。わが轉進作戰の直後、十八年二月の中旬から敵の反擊は、非常に激烈となつた。二月の中旬だけでも、ソロモン群島、あるひはニューギニヤ島方面に實に七百二十四機の敵機が來襲してきた。十日間に七百二十四機、一日にすると出擊回數において六回乃至七回、機數にして約七十機、二月の下旬にはやゝ減少して四百五機、三月に入ると上旬が六百九十三機、中旬に五百三十四機、下旬が五百五機、四月の上旬は五百五機、中旬は五百八機、下旬はぐつとふえて實に七百三十二機と敵機の來襲は凄烈さを加へてきた。

かくして彼我の前進基地の間には、熾烈な航空決戰が展開された。わが航空部隊と地上部隊はこの敵の猛烈な反攻を邀へ撃つて勇戰奮鬪した。二月中には百二十三機、三月中には百三十一機、四月中には約二百機を撃墜破するといふ大戰果をあげてゐる。

またこれと同時に、わが海鷲の鵬翼は一瞬と雖も羽博きを止めず、二月二十一日の如きは長驅ニューヘブライヅ諸島のエスピリツ・サント島を急襲して驅逐艦二隻を轟沈破し、三月十五日にはボート・ダーウインを白晝攻撃ののち、敵機十六機を撃墜するといふ輝かしい戰果を擧げてゐる。



越えて三月十九日より二十六日に至る間には、長翔して三回に亘りカントン島を爆撃、さらに四月一日にはルッセル島方面に進撃して、敵戰鬪機四十七機を一擧に撃墜し、四月二十三、八日には、エリス諸島フナフチ島を攻撃するなど、航空決戰におけるわが海鷲の長驅活躍を遺憾なく發揮したのであつた。

轉進作戰以後の戰局の特質としては、航空決戰と補給戰とが全く表裏一體の關係にあるといへる。南太平洋にみられるやうに、彼我の戰略據點が接近し、相對峙してゐる場合、補給戰はもつとも重大なそして困難な戰ひと云はれよう。

戰鬪が不斷の航空決戰の形態をとつてゐるときには、補給もまた不斷に行はれねばならない。轉進作戰後の南太平洋においては、不斷の航空決戰——不斷の補給戰——不斷の通商破壞戰、といふ立體的な戰鬪が熾烈に續行され次のやうな決戰が展開されたのである。

レンネル島沖海戰

決戰に明けた昭和十八年の劈頭を飾るレンネル島沖海戰は、一月二十九、三十日の兩日にわたつて、帝國海軍航空部隊が、敵の大艦隊を强襲して、敵の戰艦二隻と巡洋艦三隻を撃沈、更に戰艦一隻、巡洋艦一隻を中破、戰鬪機三機を撃墜した輝かしい海戰である。

レンネル島の位置は、昭和十七年八月初旬米兵が、上陸以來、半年餘にわたつて敵味方の間に激鬪が行はれたガダルカナル島から約二百キロを離れた海上、ソロモン群島の最南端にある。

敵は、ソロモンと東ニューギニヤ方面のわが陸海軍協力の果敢な行動に反撃しようと、航進してきたのであるが、わが海鷲は、敢然とこの敵艦隊を太平洋の底にたたき込み、勝利の一頁を刻んだのである。

レンネル島沖海戰は、驚歎すべき奇襲戰に成功した點においてハワイ海戰に、また敵の大艦隊を撃滅しながら、我が方の損害が戰果の割合に僅少であつた點において、マライ沖海戰に匹敵する海戰といへる。しかも攻撃第一日に敢行された薄暮雷撃は、開戰以來、初めてのことであつたが、わが海鷲の敢闘によつてこれに成功、大東亞戰爭史上さらに新らしい記錄を殘したものである。

この薄暮雷撃と晝間强襲の二日にわたる戰果は、大本營より次のごとく發表された。

大本營發表（昭和十八年二月一日十時）

帝國海軍航空部隊は一月二十九日ソロモン群島レンネル島東方に有力なる敵艦隊を發見、直に進發、悪天候を衝きて之を同島北方海面に捕捉し、全力を擧げ薄暮奇襲を敢行敵兵力に大打撃を與へたり、敵は我が猛攻を受くるや愴惶として反轉南東方に遁走せんとせしが翌三十日更に我が海軍航空部隊は晝間强襲を決行し、之に大損害を與へ敵の反撃企圖を破摧せり

本日迄に判明せる戰果及び我が方の損害左の如し

戰果　戰艦　二隻撃沈　巡洋艦　三隻撃沈　戰艦　一隻中破　巡洋艦　一隻中破

戰闘機　三機撃墜

損害　自爆　七機　未歸還　三機

（註）本海戰をレンネル島沖海戰と呼稱す

イサベル島沖海戰

レンネル島沖海戰に引續いて、三月一日から、イサベル島沖海戰が行はれた。

イサベル島沖海戰は、わが陸軍部隊のソロモン群島ガダルカナル島からの轉進作戰を妨害しようとして、巡洋艦、驅逐艦、魚雷艇の快速機動部隊をもつて出撃しきたつたものを粉碎した戰闘である。

さらにこのイサベル島沖海戰の行はれた同時刻ごろ、二編隊の有力敵機群が反撃のために西進してきた。航空部隊は直ちにこれを捕捉して、二個所で壯烈な空中戰をまじへた。

第一の空中戰では、ボーイングB17重爆機、グラマン戰鬪機連合の十數機であつたが、奮然、これに挑戰し重爆四機をニューヂョーヂヤ北方の海中に擊墜して、わが方は全機無事に歸還した。

第二の空中戰は、戰爆連合の敵三十機内外の大群と、第一の空中戰と前後してニューヂョーヂヤ北方海上で遭遇した。たちまち輕爆擊機一機、グラマン戰鬪機十二機、合せて十三機を擊墜、その他の敵を潰走せしめた。わが損害は二機である。

この戰果については大本營から次の如く發表された。

大本營發表（昭和十八年二月四日十六時）

帝國海軍航空部隊は二月一日ソロモン群島イサベル島南方に機動中の敵海上部隊を捕捉攻擊し又ニューヂョーヂヤ島方面に於て挑戰し來れる有力なる敵航空機群と交戰之に多大の損害を與へたり。

戰果　巡洋艦一隻轟沈　巡洋艦一隻小破　飛行機三十三機擊墜（内大型爆擊機四）

我方の損害　自爆及未歸還十機

大本營發表（昭和十八年二月十日十五時）

其後の詳報に依れば帝國海軍部隊は二月一日以後同七日迄に、イサベル島東方に於て、左の戰果を收めたること判明せり

巡洋艦一隻　轟沈　巡洋艦一隻　擊沈　驅逐艦一隻　擊沈　魚雷艇十隻　擊沈

飛行機　八十六機擊墜

尙この間に於ける我方の損害を左の通り改む

驅逐艦一隻　大破　驅逐艦二隻　中破　飛行機　自爆及未歸還十二機

つづいて發表されたやうに、前後一週間を通じて行はれたこの海戰は、精强なる陸軍部隊の、新たに設定された要線根據地への轉進に對し、海軍部隊が果敢なる掩護をなしたものであり、敵に乘ずるの機會なからしめた戰史上極めて重大な意義をもつ海戰であつた。

山本司令長官の陣頭指揮

士氣昂揚する前線將兵

太平洋總反攻を呼號する敵の不逞な觸手はかゝる連續的な痛擊にもかゝはらず、わが轉進作戰以後、專ら航空機をもつて、ソロモン群島ならびにニューギニヤ島の前進基地に及んできた。いかに叩かれても潰されても、その犧牲をかへりみず、壓倒的な物的兵力の量をもつて、押しておし押し切らうとする敵の强引なる反攻作戰である。

この敵を邀へて、烈々たる鬪魂に燃える我が南太平洋陸海軍前線將兵は、一歩も退かぬ血の激鬪を續けた。

かくのごとき戰局の推移を熟視しつゝあつた山本聯合艦隊司令長官は、みづから進んで南太平洋

の最前線に、陣頭指揮をとられたのであつた。

昭和十八年〇月〇日、〇〇基地の司令部に、長官旗がへんぽんと飜つた。

「山本聯合艦隊司令長官が來られる！」

この報は、口から口へ基地の荒鷲たちの間に忽ち傳へられた。

「長官閣下がこんな最前線まで來られたんだ」

「うむ、やるぞ」

前線將兵の感激は絶頂に達し、特に〇〇基地の荒鷲たちの士氣はいよ／＼昂揚したのである。

かくて山本長官の陣頭指揮による四月の航空作戰は遂行されたのである。

この作戰のうち、主なるものをあげてみると、四月七日には大擧フロリダ島ツラギ港及びガダルカナル島コリ岬を强襲して敵輸送船十五隻を一擧に擊沈破するといふ開戰以來最大の通商破壞戰に輝くフロリダ島沖海戰、さらに四月十一日の第二次オロ灣攻擊、翌十二日のポート・モレスビーの晝間强襲、續く十四日には、ニューギニヤ島ミルン灣竝にラビ飛行場の急襲など、いづれも敵航空兵力の擊滅に、通商破壞戰に、大本營發表の如く、赫々たる戰果を擧げたのである。

フロリダ島沖海戰

「ガダルカナル島周邊にある敵艦船を攻擊し、敵の反攻企圖を粉碎すべし」

といふ命令に對する回答が、四月七日のフロリダ島沖海戰であり、その戰果は、實に敵艦船十五隻擊沈破、敵機三十七機擊墜といふ輝やかしいものであつた。

襲擊當時は決して好天とはいへなかつたが、わが海軍航空部隊の攻擊精神は、完全にこの惡天候を克服して、敢然ガダルカナル島上空に殺到、敵補給船團を擊滅し、敵が虎の子のグラマン戰鬪機を手當り次第に叩き落したのである。これこそ明らかに敵反攻の出端を叩いた鮮かな航空奇襲戰であつた。

白晝、惡天を衝いて果敢に出動したわが海鷲の奇襲は、敵巡洋艦、驅逐艦各一隻を擊沈するとともに、八千トン以上の大型輸送船二隻、五千トン以上の中型輸送船六隻、三千トン級の小型輸送船二隻を相次いで擊沈、中型輸送船一隻、小型輸送船一隻を大破、大型輸送船一隻を中破せしめ、空中戰ではグラマン戰鬪機三十機、ロッキードP38戰鬪機六機、飛行艇一機を擊墜、敵の執拗な反擊

企圖と海上補給に一大痛擊を加へたもので大本營から左の如く發表された。

大本營發表（昭和十八年四月九日十五時）

帝國海軍航空部隊は、四月七日大擧ソロモン群島ワロリダ島方面の敵艦船を强襲せり、戰果及び我方の損害左の如し

戰果　擊沈　巡洋艦一隻　驅逐艦一隻　輸送船十隻　大破　輸送船二隻　小破　輸送船一隻

擊墜　三十七機

我方の損害　自爆六機

（註）本海戰をフロリダ島沖海戰と呼稱す

海上補給を不可缺の要索とする近代戰において、敵船舶を十三隻も擊沈破したこの大戰果は特筆に値する。しかしわが方にも自爆六機といふ尊い犧牲を出してゐる。

また、敵のソロモン方面への增强企圖が執拗極まるものであること、決戰場としての南太平洋戰局が、一面補給戰として重視しなければならないことをこの海戰がはつきりと示したのである。

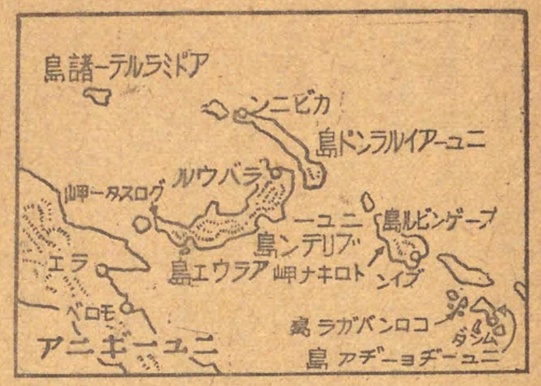
ニューギニヤ敵據點强襲

作戰の進展を左右する彼我補給戰は南太平洋上に日一日と深刻化しつつある。寧日なく時と所を選ばず、發見された敵輸送船團が、わが海軍航空部隊の必滅の强襲を受ければ、敵もまた必死の邀撃をもつてこれに應へる。そこには連日のごとく展開される熾烈な航空戰があるのみである。偉大な戰果とともに貴い犧牲がある。

ニューギニヤ島の補給路として敵の最も重要視されるブナ附近にあるオロ灣を强襲した四月十一日も南太平洋〇〇基地のわが海鷲にとつては、敵輸送船三隻、驅逐艦一隻を撃沈し、敵機二十一機を撃墜すると同時に、わが方にも六機の自爆未歸還を出した激しい一日であつた。

あくれば四月十二日、帝國海軍航空部隊のポート・モレスビーに對する强襲は、白晝、戰爆連合の大編隊をもつて堂々決行された。

濠洲を護る敵の關門、戰備を整へ空軍力を集中してゐるモレスビー大空襲である。七日のフロリダ島沖海戰、十一日のニューギニヤ東岸オロ灣の艦船襲撃と手痛い打撃を續けざまに受けてゐる敵



は、未曾有の大空軍がこの日モレスビーを襲ふとは、夢にも考へてゐなかつただらう。

四月十一、十二日兩日間にわたる大戰果は左の如く發表された。

大本營發表（昭和十八年四月十三日十六時三十分）

一、帝國海軍航空部隊は四月十一日ニューギニヤ、オロ灣方面の敵艦船及び航空機群を攻撃し、輸送船三隻、驅逐艦一隻を撃沈、戰鬪機二十一機を撃墜、小艦艇數隻に相當の損害を與へたり、我方の損害自爆及び未歸還六機

二、帝國海軍部隊は四月十二日ポート・モレスビーの敵飛行場及び船舶を攻撃せり、戰果及び我方の損害左の如し

戰果　撃沈　輸送船一隻　撃墜二十八機　地上撃破　大型機數機　小型機十數機　地上爆破　軍事施設數箇所　撃破　兵舎二十數棟

我方の損害　自爆五機

わが海鷲は、翼を休めるいとまもなく、四月十四日またもやニューギニヤ島東南端ミルン灣の敵基地を強襲した。

この攻撃は南太平洋方面に於ける海鷲部隊の積極的作戰の現れであり、擊沈した敵船は、約七萬トンに達するといふ驚嘆すべき實を結んだ。

ミルン灣は、敵の最大策源地であるポート・モレスビーを發して、海路ブナ方面に至るニューギニヤ島東南端の敵補給の中間基地となつてゐる。

飛電一閃、〇〇基地、××基地に待機してゐた攻擊機、戰鬪機の大編隊は、ミルン灣目指して飛び立つた。

この地方特有の北々西風は、珊瑚海からニューギニヤに衝き當つて時々碧空を一變させる。この日も天候は折々行手をはばんだ。ある時は雲がたれこめ、そこ〻に、スコールの柱が、海面からニュッとたれさがる雨雲を支へるやうに、幾本も〳〵突立つてゐた。かうした中を、わが大編隊は、一糸亂れぬ進擊を續けた。

目指すミルン灣上空に突入したのは午前〇時〇分、攻擊隊は、直ちに爆擊進路に入つて行つた。

指揮官機先登、一番機からバラ〳〵と爆彈は投下された。見る〳〵うちに、敵船に吸ひ込まれるやうに小さくなつて行く。パッと眞黑い煙があがる。初彈命中だ。

この頃から、敵の防空砲火は熾烈となつてきた。急を衝かれた敵直衛機は、機首をめぐらして、襲ひかかつて來た。ロッキードP38、ベルP39、カーチスP40と彼等が誇る新鋭戰鬪機である。だがわが海軍新鋭戰鬪機の前には、全く齒が立たない。一機また一機と尾を曳いて、星の双翼は、海中へ、ジャングルへと突入して行つた。

この間、他の戰爆連合の一隊は、敵飛行基地ラビ飛行場上空に殺到してゐた。あはてて舞ひあがらんとする敵機或は敵の燃料庫兵舍に、爆彈と機銃掃射の雨は注がれた。さらに舞ひ上つた敵戰鬪機とここでも壯烈な空中戰が行はれた。

かくて大型輸送船（八千トン級）三隻、中型（五千トン級）一隻をまたたく間に、海底深く屠り去り、さらに大型輸送船二隻、中型四隻、小型（三千トン級）一隻は、大破炎上の後、これまた藻屑と化した。

これらの敵船には、兵員、資材、燃料、食糧等が滿載されてゐた。彼等のニューギニヤ補給の企

圖が挫折したのはいふまでもなく、輸送船を破碎したわが機は、また附近に航行、或は繫留中の敵小艦艇にも痛擊を加へ、これら數隻を擊破し去つた。

敵戰鬪機擊墜は實に四十四機に達し、地上擊破また十數機を算したが、わが方も尊い五機を失つた。

この日の輝く大戰果は次の如く發表された。

大本營發表（昭和十八年四月十六日十六時）

帝國海軍航空部隊は四月十四日敵輸送船團のニューギニヤ　ミルン灣來着を偵知し、大擧之に攻擊を加へ、更に他の部隊はラビ飛行場を急襲し左の戰果を收めたり

擊沈　輸送船四隻　大破炎上後沈沒　輸送船七隻　擊破　小艦艇數隻　擊墜四十四機　地上擊破十數機　爆破炎上　軍事施設五箇所　この間に於ける我方の損害　自爆五機

最前線の山本長官

山本長官の陣頭指揮は、前線將兵に大きな感激を與へ、士氣をいよ〳〵昂揚させ、航空作戰をはじめ、戰果に、それはどしどしあらはれた。

四月〇日午前〇時、基地飛行場には、整備員が、徹宵して整備を終つた。爆擊機戰鬪機が、ぎつしり整列し、早くもプロペラの爆音を天地一杯に、振動させてゐる。けふぞモレスビー强襲に、發進するのだ。

戰鬪指揮所の前には、搭乘員が集合して、各分隊長から敵情、攻擊目標などの詳しい指示を受けてゐる。

「全員整列」

司令が壇上に立たれた。とそのとき、本部から疾驅して來た自働車が、指揮所の前でぴたりと停つた。純白の第二種軍裝に威儀を正し、軍刀の柄をしつかと握つて降り立たれた人――荒鷲達はハツト息を呑んだ。

「おゝ、長官だ、山本大將だ」

この基地に來られて、初めて接する長官の威容なのだ。

「敬禮ッ！」

長官は司令の横の階段に、不動の姿勢で立たれて、靜かに答禮された。おおその擧手の禮、それは海兵團に初めて入團したそのままのいんぎん、端正な擧手の禮であつた。

長官は、擧手の禮をされたのみで、その時は言葉一つすら口にされなかつた。無言の答禮は、千萬言にも勝る感動を與へた。その時の長官の態度、海鷲育ての親ともいふべき長官の慈眼に、ぢつと注目する若鷲達の眦は裂け、口にこそ出さね異口同音に、

「長官、御安心下さい、必ずやります！」

と誓ふやうであつた。

「健闘を祈る」

との司令の訓示が終るや、搭乘員たちは、愛機の許へ四散する。その足どりも心なしか力强い。朝陽にきらめくプロペラの轟音が、一際高く唸りを生じたかと見る間に、早くも一機、二機、三機と、砂塵を捲いて滑走し、舞ひ上つてゆく。

長官は、と見れば、いつの間にか、滑走路の横に立たれ、一機また一機軍帽を力强く振つて勇士達の出擊を激勵してをられた。

舞ひ上つた〇〇戰爆連合の大編隊が、鮮かな編隊を整へ、指揮官機を先頭に、椰子林の彼方にゴ

マ粒のやうなその機影を沒するまで、軍帽を手にしたまゝ、時餘にわたつて、ぢつと立ち盡してをられる。

それから〇日の後、長官は、この基地を去つて、さらに最前線の某基地に向はれた。その出發の前夜、長官のために特別にしつらへられた粗末なヴアンガロー風の一室で、長官を圍んで、さゝやかな別離の宴が開かれた。常なら午後七時には宿舍に歸られる長官が、その夜に限つて幕僚や司令を相手に、夜の更けるまで語られた。

山本元帥の壯烈なる機上戰死

山本聯合艦隊司令長官は、昭和十八年四月〇日、南方最前線において、爆擊機に搭乘、全般作戰指導中、敵戰闘機〇〇機と交戰、機上にて壯烈な戰死を遂げられた。

全艦隊の總帥たる山本元帥の戰死、しかも最前線で飛行機上における壯烈なる戰死は、銃後の國民にとつても、前線將兵にとつても、まさに晴天の霹靂であつた。

近代海戰の壯烈なる樣相では、聯合艦隊司令長官の戰死も當然考へられるところであるが、飛行

機上の交戰に參加してゐようとは、だれも思はなかつただけに、たれの胸をも打つた。一億國民すべて前線も銃後も、皆この名將の忠烈な最期に泣いた。元帥が戰死せられた當時、南太平洋方面においては特に熾烈な彼我の航空決戰が、晝夜を分たず展開されてゐた。

帝國海軍航空部隊は、その鵬翼を連ね、ほとんど連日、ソロモン群島方面においては、ガダルカナル島、フロリダ島、ルッセル島、ニューギニヤ方面においては、ポート・モレスビー、オロ灣、ミルン灣などを攻擊して大戰果を齎らした。

この間敵機の來襲も亦熾烈で、延機數にして四月の上旬には五百五機、中旬には五百八機、下旬には七百三十二機、合計千七百四十五機の多數に達してゐる。

元帥は、「この激戰の最前線に進出されて、身を以て陣頭に立ち、奮戰せられたのであつた。

元帥の壯烈な機上戰死の報が傳はつたとき、前線基地の荒鷲たちはさつと色を失つた。しかし、

「長官でさへも戰死されたのだ、まして我々が……」

といふ氣持はやがて荒鷲たちの胸のうちに、烈々たる敵愾心となつて煮えくりかへつて來た。

聯合艦司令長官が作戰陣頭に立ち、遂に壯烈なる護國の英靈となる垂範は、前線將兵に限りない感奮振起を與へた。

長官が身を以て示されたこの烈々たる敢鬪精神は、全將兵の精神の中に生き、米英擊滅の一大推進力となつて、前線將兵の血肉の中に受け繼がれたのである。

元帥がその愛する海鷲の背で壯烈極まりなき戰死。嶋田海相談に、

「元帥はこの間終始泰然自若として、軍刀の柄を堅く握りながら、最後の瞬間まで主將としてまことに崇嚴なる態度を持してゐた」

とある如く、元帥日頃の覺悟からみても、從容たる立派な最期であつたらう。しかも元帥自身のためには、武人として得難き死所を得たる武運のめでたさを讃ふべきである。

南太平洋では、昨日も今日も、愴絶な海、陸、空の血戰が續けられてゐる。あの最前線基地では、今朝もまた生還を期さぬ荒鷲たちが、烈々の山本魂を銀翼に漲らして、米軍擊滅に飛び立つたことであらう。山本元帥戰死に關するわが大本營發表は次の通りである。

大本營發表（昭和十八年五月二十一日十五時）

聯合艦隊司令長官海軍大將山本五十六は本年四月前線に於て全般作戰指導中敵と交戰飛行機上にて壯烈な戰死を遂げたり

後任には海軍大將古賀峯一親補せられ既に聯合艦隊の指揮を執りつつあり

ルンガ沖航空戰

航空決戰の新展開

南太平洋の戰局はガ島轉進作戰以後に於ては、主として航空兵力によつて制壓せんとする彼我の航空戰を中心として展開されるに至つた。

敵は五月に入ると、ソロモン群島のわが最前線たるニューヂョーヂア島、コロンバンガラ島などは勿論、ニューギニヤのラエ、サラモアなどに對し、頻りに空襲を試み、その都度わが方の反擊に手痛い眼をみたのである。

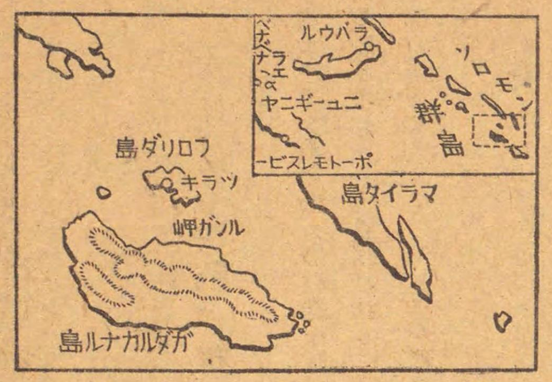
敵のかかる航空反攻に對し、わが精强海鷲部隊も、晝夜の別なく連日出擊し、或はソロモン海域に蠢動する敵船團を攻擊、ルッセル島等の敵空軍基地を擊摧、また遠く北濠ポート・ダーウィンに鵬翼を伸して、これに痛擊を加へるなど縱橫の活躍を續け、次の輝く戰果を擧げてゐる。

かくて同方面の彼我の航空戰は、逐次熾烈となり、空の決戰の樣相は日一日と深刻苛烈になつてきた。

六月に入つて敵機の來襲も從來に比して機數を著しく增してきた。七十機乃至百機といふ編隊はめづらしくない。これに對しわが海鷲は六月四日ショートランド島に來襲の敵機を邀へ擊つて二十五機を擊墜破した。

七日は敵機四十九機を、十二日には三十二機を相次いで擊墜した。ルッセル島上空空中戰で敵航空兵力に大損害を與へた海軍航空部隊は、息つく暇もなく、十六日さらに戰爆連合の大編隊をもつて、ガダルカナル島上空に殺到し、ルンガ沖において增援中の敵輸送船團に、果敢極まりない攻擊を加へ、敵船舶大型四隻、中型二隻、小型一隻、敵驅逐艦一隻、計八隻を擊沈するとともに、敵機三十二機以上を擊墜するといふ、さる四月七日のフロリダ島沖海戰に匹敵する大戰果をあげた。

ガダルカナル島上空の航空威力圏のまつ只中であげられたこ



の戰果は、わが屢次の攻擊に叩かれても叩かれても執拗に進攻せんとする敵の企圖に一大痛打を與へたもので、十六日午後のわが進擊に際し、敵戰鬪機百機以上は邀擊に出で、こゝに彼我二百機の大空中戰が展開せられ、わが海鷲はよく敵機三十二機以上を擊墜すると同時に、敵輸送船團上空に殺到し、熾烈極まりない地上、海上からの防禦砲火の彈幕をくぐりつつ敵船團に猛攻を加へ、右のごとき戰果をあげた點に、一大强襲戰の實が示される。

擊沈敵艦船のうち中型輸送船一隻、驅逐艦一隻は海鷲の體當りによつて瞬時に轟沈したのであるが、本航空戰が、いかに激烈を極めたものであるかは、わが方も未歸還二十機といふ尊い犧牲を出したことでも明らかである。

この損害は十八年に入つて六月に至るまでの最大ともいふべきもので、十七年秋の南太平洋海戰につぐ損害であつた。

かくて、敵のガ島方面への補給はまたまた深刻な損害を蒙り、南太平洋の決戰場における海鷲の攻勢の鋭鋒はます〳〵鋭きを加へつつあるとともに、執拗極まりない敵の反攻企圖は侮るべからざるものがあつた。

ルンガ沖海戰を以て知られたガダルカナル島ルンガ岬、こゝに敵の輸送船團が入泊した。偵察機は連日出動して、これが偵察監視に任じた。そしてこれに對する攻擊命令が爆擊隊に下つた。戰鬪機隊は、この爆擊隊の掩護に任ずることとなつた。

〇〇の飛行場の戰鬪機隊宿舍は、海を眼下に見下す嶮崖のうへにあつた。百五十メートルくらゐもある切り立つた崖の上に夕食後、隊員は椅子を持ち出した。〇飛曹長の持つて來たウヰスキーを皆でなめながら、星の話が眞つ先に話題となつた。

南十字星、それからそれによく似た僞十字星、それに關聯して北十字星、それが白鳥座とも言はれ、中世の善男善女が聖なる十字架としてこれを拜した話、あるひは蝎座の心臟アンタレスその蝎が、巨人オリオンを刺し殺した話など、あるひは北斗七星に對する南斗六星、射手座、その射手が蝎を狙つてゐる話など。しかしこれ等は、海軍の、特に飛行機乘り士官の話としては、そんなに永續性のある話題ではなかつた。

間もなく、あれが星でなく金平糖であつたらとか、最近五、六年金平糖なんか食つたこともないとY隊長がこぼせば、

「理化學的に見て、金平糖の代用としては、アルコールが最も適當であります」

などとS隊長が茶化す。

それからひとしきり、酒の話が賑はつたが、やがてみんな眠くなつて來た。出撃前夜のとばりも深くなつた。

「兎に角、人生の快樂睡眠に如かずとは、蓋しショーペンハウエルが喝破せし稀代の名言に非ずや」

とB隊長が言つたのを期に、みんなぞろぞろ立つて、椰子の下なる細道を宿舍へと歸つて行つた。

翌六月十六日、天候は上々であつた。八時ごろボーイング一機が偵察に來たが、戰鬪機が大損害を與へて追つ拂つた。

〇時戰爆連合の大編隊は、ソロモン群島南方海上を一路ガダルカナル島に向け進撃した。〇時ガダルカナル島突入寸前、右前方高度八千メートルに双發双胴の怪物戰鬪機P38型五機が現れた。

掩護隊として、爆撃隊の〇〇メートル直上にあつた我が戰鬪機が直ちにこれに反撃、P38の一機は須臾にして黑煙をはいて撃墜され、殘る四機は愴惶として退却した。

間もなく、我機はガダルカナル飛行場の眞上に殺到した。

本年一月皇軍將士が萬斛の恨を呑んで撤退したルンガ河附近の敵陣地からは、空を蔽ふ防禦彈幕

が射ち出された。そして、右から左から、グラマン、P39、P38等數十機の群が津波のやうに次から次へと襲ひかかつて來た。

今や爆撃隊を護り通すために、戰鬪機は自らを楯とせねばならなかつた。降り注ぐ敵の曳痕彈と爆撃機の間に身を挺して敵の銃彈を盡く我が機に吸收し、火達磨となつて自爆する戰鬪機の姿、それは悽愴にして莊嚴なる神の姿であつた。

一機自爆すれば又一機が、今自爆した僚機の位置に代つて入つた。そして又敵の銃彈に身を曝して爆撃機を護つた。かくて爆撃隊がいよいよかの戰慄すべき急降下に移るまでには、爆撃機は被害皆無であつた。

爆撃機〇〇機は二隊に別れ、一隊はルンガ岬の敵船團に、一隊はコリ岬の敵船團に、眞つ逆樣に突つ込んだ。

帝國海軍が世界に誇る必殺の急降下爆撃！　凡百の姦惡を戰慄の坩堝に叩き込み、轟炸と、破滅と、火焰と、呪詛の地獄に死滅せしめる恐るべき急降下爆撃！

中空を蔽ふ防禦砲火の彈幕に天日も昏く、敵の艦船、飛行場、陣地より射ち出す無數の曳痕彈が、億兆の流星となつて織り交ふ中を、ただ盡忠の鬼となつて驀進する急降下爆撃機〇〇機、その必殺

の巨彈は投下された。一萬トンを超える敵大型輸送船四隻及び同中型二隻、同小型一隻は木つ葉微塵となつて碎け散り、同大型一隻を中破させた。更に防禦砲火に火を發した爆擊機一機は、附近海上に遁げ迷ふ驅逐艦一隻に、體當りを敢行、これを轟沈せしめた。

爆擊機とともに急降下した戰鬪機群もまた、防禦砲火の洗禮を浴びなければならなかつた。然も爆擊を終へて避退する爆擊機に對し、執拗なる敵戰鬪機の攻擊を防がねばならなかつた。海面すれ〳〵に這つて高速避退する爆擊機、これに襲ひかゝる敵戰鬪機、これを追ひ散らし蹴散らす味方戰鬪機、スコールのやうな敵砲火に眞白に泡立つ海上で、これ等の間に凄烈なる戰鬪が展開された。

爆擊機危しと見るや、救ふに遑なく身を以て敵に激突して散つた戰鬪機、火を吐きつつも爆擊機に寄り添つて風防硝子を開き、訣別の手を振りつつ身を醫して自爆を遂げた戰鬪機、或は寄り添ふ戰鬪機に、痛手に還る望みなきを報せて、笑ひながら海中に突つこんで行つた爆擊機の操縱者。我方は未歸還二十機の尊い犧牲を出した。

大きな戰果、然し大きな被害、昨夜あんなに朗かに談笑した戰友が今日はゐない。空しく殘され

た夕食の席を見て、泣かざる者があらうか。特に勇敢なること鬼神の如く、溫和なること菩薩の如く、機敏なること隼の如き、Q飛曹長の喪失は、前のM二飛曹の未歸還以上の衝擊であつた。

「死んだ者のことをくよ〳〵するのは止せ、何れは早いか遲いかの話だ。我々より一歩お先に靖國神社へ行つた戰友を祝福しろ」

と、搭乘員を集めて言ふ〇〇大尉の言葉は、それはそのまゝ大尉自身に對する言葉であつた。この日味方戰鬪機の擊墜せる敵機數は三十二機以上であつた。

大本營より次の如く發表された。

大本營發表（昭和十八年六月十八日十五時三十分）

帝國海軍航空部隊は六月十六日戰爆連合の大編隊を以てガダルカナル島ルンガ沖敵輸送船團を强襲せり

本日迄に判明せる戰果左の如し

輸送船　大型四隻　擊沈　同中型二隻　擊沈　同小型一隻　擊沈　同大型一隻　中破　驅逐艦一隻　擊沈　飛行機　三十二機以上擊墜

我方の損害　未歸還二十機

（註）本戰鬪をルンガ沖航空戰と呼稱す

このルンガ沖の大戰果を最初として、今後大本營發表において、海軍航空部隊による戰果に對して「航空戰」といふ新呼稱が用ゐられることとなつた。開戰以來海軍部隊の戰果はひとしく「海戰」との呼稱をもつて呼ばれてゐたのであるが、以後艦艇部隊のみ或は艦艇、航空部隊協同作戰による戰鬪については從來通り「海戰」と呼ばれるが、航空部隊のみの戰鬪は「航空戰」と呼ばれる。

すなはち、わが戰鬪部隊が航空部隊のみである場合、敵艦隊、敵船團、敵地上施設、敵航空部隊等との間に展開される戰鬪は、大本營發表により「〇〇航空戰」と呼ばれる譯で、航空部隊の活躍が決定的なものを持つ現戰局において、この新呼稱が生れたことは、航空部隊の奮戰の戰果を明瞭ならしめる點から極めて意義深いものがある。なほこの呼稱は既往には遡らない。

南太平洋の死鬪

あくまで量の反攻を恃む敵は、執拗にわが基地への來襲をくり返し、その機數もますます增大す

る。六月下旬の十日間の來襲機數は實に延千四百機の多きに達した。

かゝる執拗な敵機の攻勢に對し、海軍航空部隊はもとより、わが地上部隊も勇戰力鬪、來襲の都度、敵に大損害を與へて擊退したのであるが、かくの如き空の反攻を前奏曲として、敵は六月三十日レンドバ島へ上陸したのである。

六月三十日未明、敵米軍は、巡洋艦、驅逐艦に護られ、上空を有力な航空部隊をもつて蔽つた大船團をもつて大膽にも、レンドバ島北岸のレンドバ港を中心に揚陸を開始した。

かねて警戒を嚴にしてゐたわが方は、直ちにこれを偵知して、即刻戰爆連合のわが海鷲の出擊となり、赫々たる大戰果を擧げ、先づ敵反攻の出鼻に痛擊を加へたのである。

翌七月一日には、わが海鷲部隊は、またもレンドバ島に出擊、敵船團に猛攻擊を加へ、敵乙級巡洋艦一隻、大型驅逐艦二隻を擊沈、乙級巡洋艦一隻を擊破、敵機二十七機擊墜の戰果を擧げて敵に大打擊を加へた。

かくの如く三十、一日の兩日にわたるわが海鷲部隊の猛擊をもつて、中部ソロモン方面における血戰の幕は切つて落され、敵は損害に次ぐ損害をもつてする大消耗戰に入つたのである。

わが方は、攻擊の手を緩めず、二日午後も引續き陸海軍航空部隊が鵬翼を連ね、レンドバ島の敵

上陸地點一帶を攻撃し、陣地構築に狂奔する敵部隊に猛爆撃を浴せ、大火災を生ぜしめ、また附近海上の敵輸送船を爆撃し、輸送船一隻を撃破、舟艇多數を撃沈し、上空にゐた敵機九機を叩きおとしたのである。

レンドバ島への上陸と相前後して、敵は一衣帶水のニューヂョーヂア島に上陸を企圖し、同島東南岸及び北西岸の數ヶ所に有力部隊を以て上陸を開始し、ここに同島の守備部隊との間に激戰が展開されるに至つた。

かくて熾烈なる激戰は、レンドバ島からニューヂョーヂア島へ擴大したのであるが、敵は一方においては、六月三十日ニューギニヤ島東南岸のサラモア南岸にも上陸して、大がかりの反攻意圖を企てるとともに、ソロモン方面では、ニューヂョーヂア島のムンダ南方數キロの海上に位する小島ルビアナ島に進出した。敵はこれを足がかりにニューヂョーヂア島攻略を推進しようと目論み、陣地構築を開始したのである。

これを知つたわが海鷲部隊は、七日ルビアナ島の敵を强襲し、敵陣に爆彈の雨を降らせて大火災を起させるとともに、敵新鋭機群に突入して、遂に三十一機撃墜の戰果をあげ、敵の反攻企圖に大鐵槌を加へた。

わが海鷲の勇戰奮鬪に呼應して、ソロモン方面に作戰中であつたわが水雷戰隊は、敵の反攻を豫期していよ〳〵警戒を嚴重に、何時たりとも敵の出現に萬全の策を講じてゐた。

その矢先きへ七月四日夜、ニューヂョーヂア島西北部、遙かにコロンバンガラ島と相對するクラ灣に臨むライス灣竝にバイロコ方面に敵の有力部隊が上陸したのをむかへて、我が水雷戰隊は、敵艦隊を必殺の網中にひつ捕へ、ここにクラ灣夜戰の目覺ましい戰果が擧げられたのである。

クラ灣海戰に續いてその後十二日夜半にはコロンバンガラ島沖海上において壯烈極まりない激戰が展開、またもわが水雷戰隊の偉功が、ソロモンの海上に打樹てられたのである。

敵は上陸作戰に當つて優勢な航空兵力をくり出し、船團の掩護、補給增援の協力などに當らしめるとともに、わが地上部隊や陣地を空から制壓せんとして連日この方面のわが基地に來襲した。

一例を擧げると、ニューヂョーヂア、コロンバンガラ島などに對し、八日七十機、九日七十機、十日百機と大編隊をもつて來襲し、空の反攻を執拗に繰り返へした。わが海鷲部隊もこれに對し連日出撃、敵機撃滅に、艦船攻撃、或は敵地上部隊の爆撃に、息つく暇もなく敢闘を續け、かくて同方面の航空決戰は、日一日と熾烈の度を加へ、嘗てない悽愴さを呈するに至つた。

レンドバ島白晝の强襲

昭和十八年六月三十日未明、死闘續くソロモン群島の一角レンドバ島に、突如、敵米軍は、大船團を擁して陽陸を開始した。

對日總反攻を呼號して、小癪にも同島を奪取せんとする敵は、多大の犠牲にも懲りず、巡洋艦、驅逐艦に直衛され大型輸送船十數隻をもつて、押寄せてきた。好餌ござんなれと地上部隊の猛攻に呼應、〇〇基地に待機中のわが雷擊機隊、戰闘機隊の精鋭は、敵全滅を期して、一齊に羽搏いた。堂々たる白晝の强襲である。

かくて忽ちに敵上陸部隊並に艦船を、完膚なきまでに叩きのめしたのである。

以下は敵船團擊滅に偉勳を樹てたわが海軍航空部隊雷擊機隊の胸のすくやうな戰闘の詳報である。

秋のやうな涼氣が漂つてゐた六月二十九日夕刻から、翌日の拂曉にかけて、瘴煙蠻雨のここ〇〇

基地は、異常な涼しさに襲はれてゐた。内地の十月中旬を偲ばせるうすら寒さだ。基地の空一杯に雨雲が、低く垂れこめてゐて、天候の變調は「なにかある」といふ豫想を抱かせてゐる。

夕食が濟み、消燈前後から一機、また一機とひつきりなしに敵機がやつてきた。

照空燈や高角砲に追ひかけられては、サツと逃げてゆく。そして椰子林や飛行場を遠く離れた草原を盲爆して姿を消す、暫くするとまた別なのが、上空に姿を現はしてくるといふ有樣である。

「ふうむ、よからぬことを企ててゐるな」

防空壕の傍で煙草をふかしてゐた飛曹長がいつた。

「珊瑚海々戰や、第一次、第二次ソロモン海戰のときも、さうであつたが、敵さんがかうして根氣よく眠氣醒しにやつてくるときには、必ず何かあつた。きつと今夜もそれに違ひない」

果して不氣味な夜が明けた三十日朝、いつものやうに四時半に起床した總員が、朝食もそこそこに戰闘指揮所へと急いだ。飛行場に急ぐ勇士が、

「おい、けふは雷擊するらしいぞ」

と話し合つてゐるのを耳にし、全神經がこの一言に集中し、わが海鷲たちは思はず胴ぶるひした。

間もなく中庭越しの電話室の方から、癇高い聲がきこえた。かなり興奮した聲だ。通信員が、〇

○から來たものを、わが戰鬪指揮所に傳へようと電話口で呼んでゐるらしい。

「今朝敵はソロモン群島のレンドバ島に向け來襲中である。攻擊隊○○機は敵船團を攻擊せよ、戰鬪機○○機は、攻擊機隊を掩護せよ」

矢繼早やに情報が飛込んでくる。張切つた乘員達は、すでに指揮所前に全員集合、いまや遲しと發進命令を待つてゐる。

一方には燃料を滿載、魚雷を抱いた雷擊機がピンと鵬翼を張つて待機してゐる。空征く服裝に威儀を正した勇士は、ピストルや傳家の寶刀を片手に、攻擊隊指揮官の訓示を受けてゐる。

この日の戰鬪指揮官は、更に語をついで敵情を說明した。

「今朝○時、レンドバ島附近に現はれた敵船團の兵力は、大型輸送船、輕巡驅逐艦計約十數隻なり攻擊隊は○○隊を一番隊、○○隊を二番隊、○○隊を三番隊とし、雷擊法は高度○乃至○○から魚雷を發射、今朝同島上空の天氣概況は、曇、濕氣あり、視界十五キロ。」

はき〳〵した語調が一人一人の胸に深く刻みつけられる。こまぐ〳〵とした注意も與へられる。

○○部隊長が莊重な口調で力强い訓示をした。

「本日の攻擊は實に重大である。各自は日頃の腕に十二分の自信を持ち、一發必中の戰果をあげよ。

健鬪を切に祈る」

この間にも天候情況を知らせる情報が、刻々と入つてきた。漸次天候は回復しつつあるといふ。やがて發進命令は下つた。戰爆連合の大編隊は、さらに基地上空を大きく半周して一路南へ飛び去つた。

編隊がニューヂョーヂア西南方のワナワナ島附近上空に、その勇姿を現はしたときだ。

「おお、敵船團だッ！」

○○時、レンドバ島東側のブランチエ水道にゐる。レンドバ島の綠の樹々が、眼下にクッキリと浮彫されてゐる。その水邊に敵船團が急に動き初めた。避退行動を開始したのだ。間髪を容れず、指揮官機から、突擊命令が發せられた。時に○○時、敵船團の上空は、天氣良好で、東方ニューヂョーヂア島上空は雲が多少ある。絕好とはいへないまでも惠まれた天候だ。直ちに編隊が解かれ、各機はニューヂョーヂア島海岸沿ひにグン〳〵高度を下げながら、雷擊進路に入つた。その時今まで雲間にかくれて發見出來なかつた同島上空から、突如敵戰鬪機數十機が猛然と襲ひかかつた。

敵輸送船團は驅逐艦に誘導され、輕巡、驅逐艦に護衞されながら、速力○○節で航行してゐる。戰鬪機が「こ奴ッ」とばかり敵機群中に突擊して行つた。雷擊隊は全速で降下しながら、魚雷發射

直前の態勢に突込む。物凄い彈幕だ。しかも敵艦船は、雷擊機隊めがけて艦砲の水平射擊でやつてくる。

攻擊隊員の頭の底に、一發必中、一死報國——こんな文字が閃く。

指揮官機の右發動機に、突如敵戰鬪機グラマンが喰ひついた。二十ミリ機銃彈を瀧のやうに注ぎ込んでゐる。黑煙が煙幕のやうに流れた。ガクッと高度が下つた。無念指揮官機自爆と見てとつた後續機は「已れ逃すものか」とぐいぐい突込んでゆく。必殺の魚雷は次々とぶち込まれて行つた。

敵船に近接すること僅か〇〇米、高度〇米、僚機全部が海中に突入したかと思はれた瞬間、矢繼早やに魚雷が發射された。

おお、僚機が火達磨となつて敵に體當りしてゆく。振返れば雷擊進路に入りながら、執拗に喰ひ下る戰鬪機を一機、二機と射ち落しながら、サッと見事な圓を描いて避退してゐる機もある。

〇番機はグラマン二機を叩き落し、兩發動機から物凄く火を噴きながらも魚雷を發射、敵艦橋を吹きとばした。見上げる戰鬪機隊は全くの獨壇場、うち落し叩き込み、燃える木の葉のやうに敵機が落ちてくる。

眼を血走らせて海面を見下した。見れば敵艦一隻がまさに沈沒せんとしてゐる。轟沈だ。見事轟

沈だ。輸送船は沈沒寸前の黑煙を吐きながら傾斜してゐる。他の驅逐艦も同樣だ。黑煙をひいて、波間に突つ込んでゆく。成功だ。大戰果だ。直ちに機首を基地に向けた。途中小癪にも敵戰鬪機の生殘りが、一機、二機と追尾してきたが、これを擊退した。いまや空には敵機影を認めない。

「やつたなあ」

「うん、存分にやれたあ」

攻擊隊、戰鬪機隊員は、機上で互ひに成功を祝福しながら基地へ急いだ。

夕陽が白雲を背景に椰子の葉ずゑを彩りはじめた。押し包むやうに宵闇がひた〳〵と迫つてきた。と空の一角からかすかな爆音がきこえてきた。見よ、仄明るい夜を背にピンと張つた鵬翼も逞しく海鷲は歸つてきた。

この日の綜合戰果は、大型驅逐艦二隻擊沈、驅逐艦一隻擊破、輸送船三隻擊沈、同三隻擊破、飛行機五十機以上擊墜であつた。

大本營の發表は次の如くである。

大本營發表（昭和十八年七月一日十七時三十分）

一、六月三十日早朝ソロモン群島レンドバ島方面に輸送船、巡洋艦、驅逐艦等より成る敵有力部隊出現、その一部は同島に上陸せり

二、帝國海軍航空部隊はこの敵に對し數次に亘り果敢なる攻撃を加へ輸送船六隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻を撃沈破し、敵機三十一機以上を撃墜せり

三、同方面帝國陸海軍部隊は鞏固なる協同の下に作戦續行中なり

大本營發表（昭和十八年七月二日十六時三十分）

帝國海軍航空部隊は七月一日引續きレンドバ島の敵を攻撃せり、六月三十日及び七月一日の綜合戦果左の如し

乙級巡洋艦一隻撃沈、同一隻撃破、大型驅逐艦四隻撃沈、驅逐艦一隻撃沈、同一隻撃破、輸送船三隻撃沈、同三隻撃破、飛行機七十七機以上撃墜

我方飛行機三十一機未歸還

クラ灣夜戦

水雷戦隊の本領發揮

クラ灣夜戦は昭和十八年七月四日夜間から五日黎明にかけて、ニューヂョーヂア島西北部、クラ灣方面に上陸を企圖せる敵部隊に對し、陸海軍守備隊と、作戦中の水雷戦隊とが協同して敵艦三隻を撃沈した海戦竝に五日夜半にクラ灣北方海域に制壓中の水雷戦隊所屬數隻の驅逐艦が、敵巡洋艦、驅逐艦十數隻の有力部隊に突入、巡洋艦二隻、特務艦一隻を屠つた海戦を含めて、呼稱されるものである。

この數日來、この方面は、日沒と共に豪雨が襲來、雨と霧は暗憺たる海上を包んで視野は極度に狹められてゐた。四日の夜もかうした天候であつた。雨は海岸沿ひの密林に降り注ぎ、海上には灰

色の厚いヴェールをかけてゐた。敵はこの悪天候に乘じ、その夜の十時すぎ、乙級巡洋艦をはじめ少くとも三隻以上の軍艦をもつて、クラ灣の奥深くへと、不逞にも忍び足で航行してゐた。敵艦の艦砲は、暗の彼方ニューヂョーヂアの陸岸と覺しき方角に砲口を向け、齊射の態勢を示してゐた。

この時敵艦の行動に鋭い警戒の眼を瞠つてゐたわが水雷戰隊に捕へられたのであつた。暗夜に捕へた敵艦影、帝國海軍傳統の壯烈無比なる水雷戰隊の肉迫攻擊は、忽ち開始された。

轟然とどろく砲聲、必中の巨彈と、必殺の氣合をこめて發射された魚雷が、敵艦列に釣瓶打ちに集中された。手練の魚雷は、見事敵巡洋艦の胴體に命中、忽ちあがる巨大な水柱は、夜目にもしるく、海上を震はす大轟音とともに、敵艦は海中に沒し去つた。

敵艦擊沈に勇み立つたわが水雷戰隊は、續く敵艦に砲雷擊を集中いよ〳〵凄じさを加へたのであつた。

この時遙かの陸上に百雷の一時に落ちるやうな砲聲殷々と轟き、巨彈は闇を截つて敵艦列の頭上に注がれた。○○島を固めるわが陸上部隊の重砲陣が、敵艦隊に向つて砲火を吐き始めたのであつた。

今やわが勇猛なる水雷戰隊と陸上砲火の海陸の協同作戰は、渾然一體、敵一艦も逃すまじとばかり、巨砲と魚雷の猛攻は益々熾烈となつた。逃げ腰になりながらも、わが陸海の部隊に對し應射を續けてゐた敵大型驅逐艦が突如火を吐いて爆發した。海面に眞紅な焰を彩りながら、次第に傾斜すると見る間に、大型驅逐艦は、艦首から沈んで行つた。

敵艦二隻を屠つたわが海陸の猛砲火は、更に艦型未詳艦に集中、忽ち全艦火炎の塊りとなつて海面から姿を消し去つた。いつしか豪雨の雨脚は弱まつたが、まだ夜の明けやらぬ海上に、かくて壯烈な夜戰は一先づ終つたのである。

この戰鬪は、わが水雷戰隊の奮戰に陸上砲陣が協力して敵艦隊を擊破した輝かしい戰果とともに、海戰に陸上部隊の參加といふ點で戰史にも珍らしいものである。この夜クラ灣の海深く葬つた敵巡洋艦はサンタフェ乙級巡艦であり、驅逐艦はストロング型大型驅逐艦であることが大本營發表によつて明かにされたのである。

七月五日のクラ灣夜戰は、傳統を誇るわが水雷戰隊の一發必殺、得意とする肉迫戰法をもつて、わが方の一方的勝利を博した海戰であつた。

敵はニューヂョーヂア島北岸に揚陸した部隊を、さらに增援掩護するため、巡洋艦、驅逐艦など十數隻よりなる有力艦隊をもつて、クラ灣方面に出擊し來つた。敵艦影を發見したわが水雷戰隊は數において絶對優勢な敵艦隊の眞只中に「なぐり込み戰術」を敢行、五日夜から六日拂曉にかけ、ヘレナ型乙巡一隻轟沈、艦型未詳の乙巡一隻擊沈、特務艦一隻擊沈の戰果に輝いた。帝國海軍にしてはじめて成し得る夜戰の放れ業なのだ。

わが水雷戰隊は、五日の日沒後間もなく、旗艦〇〇を先頭に基地を出擊した。

砲術長と主計長が、

「また久し振りで愉快な戰爭が出來さうだ」

と話し合つてゐる。何時の間にか、右に〇〇島、左に〇〇島、が墨繪のやうに見えた。

今宵の出擊は蠢動する敵艦隊を發見次第、夜襲を決行してこれを擊滅すべき重大任務を帶びてゐた。一路ソロモン海域を南下してゐた。天候は非常に惡い。雨さへ降つて、視界も利かなくなつた。

うるさい敵機も全く姿を見せず、行く手には敵艦影一つ無く、戰隊は寧ろ拍子抜けしたやうな氣持でクラ灣に入つた。

この時突如、旗艦より「敵大部隊見ゆ、集結せよ」の命令を受けた。別働隊はすでに旗艦を先頭に、右舷前方の敵に向け突進してゐる。隊も直ちに急反轉して別働隊の後を追つた。早くも別働隊は砲門を開き、敵と交戰しはじめた。

敵は驅逐艦一隻を先登に、巡洋艦三隻が砲口を揃へ、その背後にさらに、驅逐艦數隻を配した有力部隊らしい。別働隊はこれに猛烈に魚雷を發射、交戰僅かに數分、〇隊が、戰列に入つた時にはすでに敵艦一隻は、大音響とともに水柱を高くあげて轟沈され、一隻は炎々と燃えつつのたうち廻つてゐた。

既に別働隊に手ひどくやつつけられた敵は、戰意を喪失したのか、間もなく遁走してしまつた。折角の好餌を逸して、無念の齒がみをしつつ灣内の索敵警戒に任じて、六日未明、各艦それぞれ歸途についた。

〇艦は單艦で、〇〇島の東側を電り、さきの戰場附近に差しかかつたとき、突如右前方から魚雷が一本右舷すれすれにつつ走つた。敵潛水艦が待伏せしてゐたのだ。速力を增すと同時に轉針して

ゐる時、さらに艦の前後に二本の魚雷を見舞つてきた。間髪を容れず、爆雷を投射して應答してゐるうち、今度は同じく右前方から敵の盲彈が一齊に、〇艦めがけて飛來して來た。

さきに逃げ出した敵が歸りを待伏せし、單艦と侮つて戰ひを挑んできたものである。この時とばかり、全員勇躍して、砲、魚雷を一齊に浴せた。雨は上つてゐたが、海上一面靄が立ち籠めて全くの暗黑の中に、敵も味方も一切探照燈をつけず、火を吐く砲口を目標に激鬪約五分、突進する艦の左後方に、轟然たる音響とともに大きな火の柱が二つ、それに水柱が高く天に冲するのを認めた。

「やつつけた」

乘員が快哉を叫んだ。火焰に浮き出た敵艦列を見ると、巡洋艦二隻、駆逐艦二隻のうちの第二番艦の胴腹に魚雷が命中、斷末魔の有樣が手にとるやうに見えた。

しかし快哉を叫んだのも束の間、この時飛び込んで來た一彈は、左舷中部に當り、火災を起し初めた。そのとき脫兎のやうに火のついた彈藥箱に飛びついた一水兵の姿があつた。彼は矢庭に燃え上つてゐる三十キロもある彈藥箱を兩手で抱きかかへると、すぐさま海中に投げ棄てた。

これと殆ど同時に三米も高所にある機銃臺から一人の下士官が甲板へ飛び下りてきた。同じく燃えはじめてゐる箱を抱いて海中にはふり込んだ。かうして二人は眼にも止まらぬ敏捷さで、火のつ

いた彈藥箱を悉く海中に投じて、火災を全く消し止めてしまつた。

箱の內側に火が廻ると、忽ち爆發を起して、その身は木葉微塵に吹き飛ぶことは、百も承知で行動したのだ。火災から救つた二人の決死の働きに不屈のわが海軍魂が祕められてゐる。

敵艦隊も、二番艦が沈むと同時に、呆つ氣なく沈默してしまつた。僚艦の討死を見て、怖氣づいて愴惶と逃げ出したものらしい。

六日の午後、さらに搜索したが敵影を發見し得ず、現場を離れ歸途についた。わが僚艦〇〇は右の戰場附近を北進中、逃げ行くさきの敵に遭遇して、魚雷を見舞ふと、僅かに敵は申しわけに砲を射ち忽ち煙幕を張つて姿を消してしまつた。敵が如何にわが方の正確無比の魚雷攻擊に縮み上つてゐるかがよくわかるのである。

この夜戰において、軍艦〇〇が示した沈着果敢な行動は實に稱讃さるべきものであつた。同艦は黎明時までは、困難な特別任務を遂行してゐたが、夜が明け初めてから、さらにクラ灣奥深く突入し、ここを死守する友軍第一線陸上部隊と緊密な連絡をとりつつ、夜明けとともに豫想される敵機の執拗な來襲などに、一切頓着なく、實に〇時間上陸掩護につとめたのである。

當時の狀況からすれば、艦乘組員の全滅を賭して、己を殺して、友を生かす沒我犧牲の精神に徹し、はじめて克くなし得るところで、帝國陸海軍のみが持つ眞に一心同體の美しさ、强さを同艦が身を以て具現したものといふべきだ。

同艦が歸途に就いてから間もなく、敵機は約三十機の大編隊で來襲したが、折から來援した友軍戰鬪機の掩護の下に、微傷も負はずに、白晝堂々と基地に引揚げたのであつた。

大本營發表は次の如くである。

大本營發表（昭和十八年七月七日十五時三十分）

一、ソロモン群島方面の敵は、六月三十日レンドバ島方面の一部揚陸に引續き隣接するニユーヂヨーヂア島の奪取を企圖し、その數ヶ所に上陸し來り同島各地に於て目下戰鬪續行中なり

二、ニユーヂヨーヂア島北西部クラ灣方面に於ける今日迄の戰鬪狀況左の如し

（一）七月五日黎明同地帝國陸海軍守備隊竝に同方面作戰中の帝國水雷戰隊は艦種不詳の敵艦三隻を擊沈せり

（二）同日晝間帝國海軍航空部隊はクラ灣上空に於て敵機群と交戰しその十機を擊墜せり

（三）同日夜半帝國水雷戰隊所屬驅逐艦數隻は巡洋艦、驅逐艦十數隻より成る優勢なる敵部隊に對し肉迫攻擊し巡洋艦一隻轟沈同一隻を擊破炎上し之を潰走せしめたり

（註）本海戰をクラ灣夜戰と呼稱す

大本營發表（昭和十八年七月十日十二時）

その後の詳報に依ればクラ灣夜戰の戰果左の如くなりしこと判明せり

七月四日　サンタフエ型乙級巡洋艦一隻擊沈、ストロング型大型驅逐艦一隻擊沈、艦型未詳一隻擊沈

七月五日　ヘレナ型乙級巡洋艦一隻轟沈、艦型未詳乙級巡洋艦一隻擊沈、特務艦一隻擊沈

コロンバンガラ島沖夜戰

水雷戰隊の連續痛打

コロンバンガラ島沖夜戰は昭和十八年七月十二日夜半、わが帝國水雷戰隊がその精華をあますところなく發揮し、壯絶果敢な夜襲戰法により敵巡洋艦二隻を擊沈、同一隻を擊破炎上し、敵部隊を敗走せしむるの偉功を樹てたクラ灣夜襲につぐ海戰である。

コロンバンガラ島はクラ灣を隔てて、ニュージョージア島と一衣帶水の位置にあり、中央に富士山を思はせるやうな扇型の美しい死火山のある周圍約百キロの小島である。

この夜の奇襲戰は實に一時間餘、月明下と暗黑下の二回にわたり凄壯な砲戰、魚雷戰を交へたもので、明暗いづれにも強い我が水雷戰隊の猛威が遺憾なく示された。

この戰鬪に率先探照燈を照射して、僚艦の砲雷擊を容易ならしめたわが巡洋艦は、敵の集中砲火を浴び無念にも大破するにいたつたが、大破しつつも依然砲擊を止めず、終始敵を猛攻したのである。

わが巡洋艦の身を犧牲にしてのこの奮戰に、味方將士は崇高な感激に打たれ、士氣いよいよ昂り勇戰奮鬪遂に大戰果を收めたのである。

第一次海戰

敵艦隊を發見次第これを擊滅せよとの命を受けて、コロンバンガラ島方面に出擊中の我部隊が、敵巡洋艦四隻以上といふ好餌を捕捉したのは十二日夜半だつた。

敵はニュージョージア島北西海上を西に針路をとり、我方はコロンバンガラ島北方海上を東南に向け進擊中であつたから、ちやうど右前方鼻先に敵艦影がヌツと現れたわけだ。

有力な敵部隊發見の報にわが部隊は雀躍してこれに突進した。敵を索めて首尾よく敵を發見する時の喜びは大きいが、それが有力な敵であればあるほど思はず「占めたつ」と口に出るほど身内の

血が滾つて鬪志が滿々と燃え上るものだ。夜襲は常に小人數で斬り込む方が思ふ存分暴れ廻ることが出來るから、餌が大きければ大きいほどこちらには都合がよい。この時も思はず「占めたつ」と叫んだ。この晩の夜食は胡麻鹽の握り飯であつた。これで腹は十分出來てゐるし、兵隊は皆白鉢卷をして張切つてゐた。士氣はもう戰ふ前に敵を呑んでゐた。戰場は間もなく島影に落ちようとする上弦の月に照らされ海面は波靜かだつた。

敵影を發見してから間もなく、我が巡洋艦〇〇からサッと探照燈が照射され大きな敵艦影四隻が眼の前にクッキリと浮び上つた。間髪を容れず〇〇の主砲は猛烈に火を吐き、同時に魚雷戰が開始された。

各艦もこれに續いて戰鬪に入り、彼我の撃ち出す砲彈は火の玉となつて入り亂れ、轟音と爆風のため海上に怒濤が卷き起つたかのやうだ。

〇艦は〇〇の直ぐ後に續いて攻撃してゐたが、敵はたゞ一隻大膽にも探照燈を點じて驀進する我

巡洋艦に對し一齊に砲火を集中してきた。しかも我巡洋艦は泰然自若として、敵砲火を一身に誘導しつつ次々に敵艦影を照射して、僚艦の砲撃を自在ならしめてゐる。爲に〇艦以下の僚艦には敵砲彈がほとんど來ない。

やがて我巡洋艦は火焔に包まれつつもしかもなほ艦列を離れようとせず、半身不隨になりつつも依然として、巨砲を敵に向つて浴びせてゐる。われ〳〵はこの態度を見て崇高な感に打たれた。同時にかくまでも僚艦を庇つてくれるのかと思ふと胸のうちが熱くなり、鬪魂はいよ〳〵たぎつた。

魚雷攻撃開始後約五分とたたぬ間に、敵の二番艦が一大轟音とともに赤紫色の焔に包まれ、ついで濛々たる眞黑な煙の塊が、沖天高く上つたかと見る間に、今まであつた巨體は忽ちかき消す如く消え失せてしまつた。

「魚雷命中！」快哉を叫ぶ間もなく、こんどは三番艦に水柱一本高く上つたと思ふ瞬間見る見る火を發し、全艦猛火に包まれるのが手に取るやうに見えた。

そして次の瞬間、今まで勇敢に砲を撃つてゐた他の二艦がいつの間にか姿を消してゐた。間もなく海上はもとの靜けさにかへつた。今まで凄壯な戰場を照らしてゐた月は暗雲に隱れ、我艦は猛烈なスコールの中に入つてゐた。

第二次海戰

わが部隊は一時北方に針路をとり再び敵を索めて南下突進を開始した。そして間もなくまたちや右前方に敵艦影を發見したのである。艦型から推してこれは新手の艦隊である。

「魚雷戰」の命令とともに、各艦は一齊にこれに肉薄、矢庭に砲魚雷の集中攻擊を食はせた。こんどは敵も猛烈な砲擊とともに魚雷を擊ち出して應戰しだした。

數だけは無闇に多い敵砲彈は艦の前後左右に落ち、立ち上る林のやうに物凄い水柱のため一時は前方が見えなくなる程だつた。

交戰數分ののち我艦の發射した魚雷は見事敵艦一隻に命中、忽ち全艦火の塊となり、二三百米も黑煙が上つたかと思ふと巨體は跡方もなく海に呑まれてしまつた。この間十秒とかからなかつたらう。この時だけは激しい戰鬪眞只中にあるのも忘れて艦橋に感激の拍手喝采が沸き起つた。

逃げ足の早い殘敵はいつの間にか姿を晦し戰の終つたのは十三日零時を過ぎてゐた。この二度目の戰鬪の時はすでに月が落ち、海上は暗黑だつたが、われわれは日頃の訓練そのままの氣持で思ふ

存分戰ふことが出來た。

それに引かへ敵は全く我方とは逆で、巡洋艦について來てゐたらしい驅逐艦二隻が戰鬪中、周章狼狽して同志討を演じ、胴體が眞二つになるまで激戰を繰返し、二隻とも刺し違へて沈んでしまつたのを、僚艦乘組員が確認してゐるのである。

クラ灣夜戰に續くこの夜戰の經驗で、我水雷部隊は艦隊同士の決戰においては絕對不敗の確信をいよいよ固めた。この方面の戰鬪は今後さらに激化するに相違ないが、求敵必殺の決意をますます固めて、敵殘存艦隊を全滅し去るまで一路邁進するばかりである。

大本營發表（昭和十八年七月十三日十五時三十分）

一、七月五日以來ニューヂョーヂア島數箇所に上陸せる敵は南北兩方面よりムンダ方向に對し前進中にして我守備隊はこれに對し果敢なる反擊を加へつゝあり

二、右に呼應し帝國水雷戰隊はコロンバンガラ島北方海域に作戰中十二日夜同方面に出擊し來れる敵巡洋艦四隻と交戰、巡洋艦二隻を擊沈、同一隻を炎上し之を敗走せしめたり、我方巡洋艦一隻大破

（註）本海戰をコロンバンガラ島沖夜戰と呼稱す

敵强引の正面作戰

南太平洋の基地轉進

ソロモンの島々を硝煙に罩め、陸、海、空の血戰に明け暮れた七月も終り八月に入つた。

いまコロンバンガラ島及びベララベラ島より我が陸海軍守備部隊が後方基地へ轉進するに至るまでの戰鬪經過を辿つてみると、六月三十日レンドバ島に敵が上陸を强行して以來、わが陸海軍部隊はニユーヂヨーヂア島を新戰場に、敵の機械化兵力と洪水のやうな火力を向うに廻して、言語に絕する激鬪を續けてきた。

しかして敵は更に、ニユーヂヨーヂア島に對する攻擊に呼應してその西方のわが基地、コロンバンガラ島を迂廻し、同島の背後のベララベラ島に對し、八月十四日より十五日にかけて上陸を敢行

し來つたのである。

ここにおいて我が方は、八月下旬ニユージヨージア島より兵を退き、アルンデル島、コロンバンガラ島などに據つて應戰した。この間敵の大航空兵力による猛爆下、わが海鷲の敵陣爆擊の掩護下に、密林を焦土と化す敵の猛砲火の眞只中、肉彈以て敵の戰車を擁する機械化部隊を隨所に仆しつつ、苛烈極りなき戰鬪を繼續して、ニユージヨージア島の敵に大損害を與へてきたのであつた。

かくて九月に入ると、敵はさらにアルンデル島ウツドフォード島に進出、一方ベララベラ島においても陸海軍守備部隊は、同島北部で敵と交戰、逐日熾烈を極める敵の砲爆擊下に、寡勢を以て克く奮鬪、ベララベラ島においては九月三日より二十一日までに敵兵七百餘を仆し、多數の兵器を鹵獲したのである。

敵はその後方基地との距離が短く、補給の條件が好い上に、基地建設を速かにして豐富な航空兵力に物をいはせてる

た。敵機の出撃は七月以來、連日百機を越えるに至つた。

これに對し我が方は前線と後方基地との距離の大なる上、就中兵站線は陸上ではなくして海上のみであるため、前線に對する掩護と補給には非常な悪條件の下にあつた。

まして有力なる敵の基地航空兵力の絶對的制空權下に突入しての作戰であるから、その困難は、言はずして明らかである。にも拘らず海鷲部隊は連日出動、長驅敵陣深く突入して、敵航空兵力撃滅に、或は敵の上陸地點やその他の陣地の攻撃に、晝も夜も間斷なく奮戰した。

また海上部隊は敵の基地航空兵力の跳梁下に、高速魚雷艇や敷設機雷など嚴重な敵の海上防衛陣の眞只中を突破して、至難な補給戰にあたり、終始わが陸海軍地上守備隊に協力した。

かうして敵のレンドバ島上陸以來約百餘日、ベララベラ島上陸後五十餘日、酷熱瘴癘の蠻地に、戰史に曾てなき激烈な戰鬪と、赫々たるわが戰果を殘して、十月上旬コロンバンガラ島並にベララベラ島よりの轉進は殆ど敵の妨害を受けることなく完了したのである。

ソロモンに於ける我が最前線は、中部ソロモンより北部ソロモンに移動、ブーゲンビル島を中心に、ラバウル、カビエン等のビスマルク群島など南太平洋の我が戰略要線が、敵の反攻に正面して大きくクローズ・アップされるに至るとともに、南太平洋戰局もまた新なる轉換をみるに至つた。

ブーゲンビル島海域の諸戰鬪

顧れば昭和十七年八月七日、敵米軍が南太平洋戰線において一大攻勢に轉じ、ソロモン群島のガダルカナル島およびフロリダ島ツラギに上陸を敢行して以來、ソロモン、ニューギニヤを繞ぐる空陸海の凄壯な死鬪滿一年一ケ月ののち、十八年十月に入つてからは、敵は、ガダルカナル島、ニュージョージア島方面の局部的戰況の好轉に乘じ、作戰の主導性を掌握したものと盲信して、主力をブーゲンビル島方面に集結、執拗强靱な反撃を展開してきた。

ブーゲンビル島はソロモン群島北端に位する南北二百三十キロ、東西百五十六キロの最大の島嶼である。その上に十月上旬の我がコロンバンガラ、ベララベラ兩島撤收後は、ソロモン群島におけるわが方の重要據點である。

さて、南太平洋の反攻に焦慮した敵米軍は、わが撤收より約三週間後の十八年十月二十七日早朝、ブーゲンビル島南端六十キロのモノ島にまづ上陸したのである。

モノ島はブーゲンビル島の我が基地、ブインより六十キロ、ショートランド島より四十キロの近

距離にある。

敵のモノ島上陸は、明かにブーゲンビル島に對する上陸作戰を行ふための牽制作戰であるが、モノ島上陸より四日後の十月三十一日早朝、わが海鷲部隊は數群に分れた敵の大輸送船團がニューチョーヂア島、ガツカイ島南方から北上してゐるのを發見した。爾後この敵にわが海鷲は觸接を續けて、敵が或はベララベラ島南方、またはモノ島南方における敵船團の動靜を報告したので、帝國海軍航空部隊竝に海上艦艇部隊は、勇躍出動、ここに十月三十一日より十一月二日迄の三日間に亘るブーゲンビル島沖の血戰が展開された。

敵の巡洋艦、驅逐艦數隻より成る海上部隊は十月三十一日にはブーゲンビル島北端のブカ島に艦砲射擊を加へたのち更に南下して翌十一月一日朝ショートランド島に砲擊を加へたが、これを牽制作戰として輸送船團を擁する他の大部隊はベララベラ島竝にモノ島の南西方面から北上して、一隊は十一月一日早朝ブーゲンビル島西岸の中央部ガゼレ灣トロキナ岬に、他の一部は二日未明トロキナ岬北方約五十キロのハモンに夫々上陸を開始した。

この上陸作戰開始を契機として、南太平洋方面に集中した彼我の海空兵力の間に大激鬪の火蓋が切られ、相次ぐわが大戰果は、圖に乘り切つた敵の出端を見事に叩きのめして　敵陣を潰亂狀態に

陷れたのであつた。數次に亘るブーゲンビル島航空戰に敵は手痛い損害を受けても、なほ引續き强引な正面作戰を敢行、大艦隊、大輸送船團を繰り出し、堂々と輸贏を決せんとする敵の意圖は、全く輕視出來ないものがあつた。

かくてブーゲンビル島を繞る海域は、最高度の緊張感と慌しさに包まれてゐた。わが海軍航空部隊の敵陣出擊と、要衝ラバウルに對する敵機の來襲とで、南太平洋上は晝夜筏を織る如く敵味方機が行き交うてゐる。南太平洋戰線はまさに、決戰の連續にある。

この前線の將兵の奮鬪に酬いる道は唯一つ銃後國民の戰力增强あるのみである。今日の一機、今日の一船一彈は、直ちに明日敵の戰艦、空母を擊沈し得るのである。

ブーゲンビル島沖海戰

敵水雷戰隊擊破

昭和十八年十一月一日午後、〇〇港にあつたわが艦隊は、ブーゲンビル島西方海面の敵艦隊をむかへ、勇躍出擊した。

既に航空機の偵察で、敵艦隊が遊弋してゐるとの報が入つてゐる。南下するに從つて、三日月は西に落ち、闇が濃くなつてきた。夜襲には絶好である。しかし、〇〇島を過ぎる頃から敵機の觸接を受けてしまつた。高速で航行する艦の航路は白く長い尾を曳く。敵機はこれを絶好の目標として執拗に追尾し航行の攪亂を期して爆彈や吊光投彈投下を試みさへする。敵艦所在の海面までは、なほ〇時間を航行せねばならぬ。

敵は無電連絡によりわが刻々の位置を知り、萬全の邀擊態勢を整へてゐるであらう。司令官は斷然强襲を決意した。味方偵察機は夜の闇の中に發進し索敵に努めた。觸接機に對して沈默の對峙を續けながら、さらに南下すること〇時間、突如味方偵察機から、

「敵艦發見」の飛電が入つた。

「占めた！」士官も兵員も各々の戰鬪配置で拳を叩いて勇躍した。正に〇時である。

戰場は近づいた。海面はソロモン方面特有の油を流したやうな靜けさで闇に靜まり返つてゐる。東の方ブーゲンビル島は、黑く長く連つて、その上山のあたりに雲が濃く、時々スコールが過ぎ、視界は僅か〇〇米にしか過ぎない。蹣つて西の空には星がまたゝき、ほんのりとした微光が海面に漂つてゐる。敵はこの天象を利用し、島側の闇に潛み、明るい西方海面を透視する有利な位置で、邀擊しようと待機してゐるのだ。わが强襲艦隊は〇〇ノットの高速力で風を起し、波を卷いて突き進んで行く。

「敵艦隊の上空に達せり」との報告と共に偵察機は吊光投彈を投下した。その光の下に編隊航行中の〇番隊が右前方に敵艦隊を發見した。距離僅かに〇〇米、同時に敵側に數個の閃光がきらめくと見るまに雨のやうに砲彈が落下して來た。敵は大巡一隻を先頭に、驅逐艦三隻が針路を北寄りにと

りわれに反航、大巡數隻を基幹とする主力は、われに同航しつつわが針路を遮斷、挾撃せんとの態勢をとつてゐた。

わが〇番隊は雨注する敵彈下に、必殺の氣をこめて魚雷によつて應戦、續いて猛砲撃を開く。忽ち反航する敵のうち、驅逐艦二隻を雷撃により轟沈、劈頭戦の血祭りに上げた。併し、折から襲來したスコールのために、視界を遮られ、主力との交戦が不可能となつた。艦隊は針路を稍左へ變じ、敵主力を島寄りに壓迫しつつ次第に距離を狹めて行つた。

互ひに敵狀を探りあふ緊張の沈默二十五分の後に〇〇彈射撃が發令された。忽ち敵の主力、巡洋艦七隻、驅逐艦十隻以上が、盛んに砲撃しつつ必死の遁走を試みる姿が浮び上つた。

距離〇〇米、待ちに待つた砲撃命令が下る。天地をつんざく主砲の第一齊射の轟音が消え去らぬうちに、間髪を容れず魚雷戰が發令され、ジューッ…バシャッ！と魚雷の波に躍る音が響いた。

敵驅逐艦は前方と後尾とを同航しつつ、煙幕を展張して主力の遁走を助けようとする。

「取舵！」わが部隊は更に針路を敵側へ向けて烈しく斬り込んだ。敵一番艦に大きな閃光があがつた。

「砲彈命中」見張員が叫ぶ。閃光が忽ち大きな火柱となる。

「敵火災！」見張員の二度目の報告の瞬間、艦橋の十倍以上もある大水柱が敵艦を掩ひかくした。

「魚雷命中」第一聲だ。一番艦の水柱がまだ消え去らぬうちに、「二番艦に魚雷命中」の叫びが上つた。

二本の魚雷が同時に命中し、一番艦より更に幅の廣い大水柱を噴き上げる一面の火となつたが、その火災がすーつと收つた時、敵艦の姿はすでに海面を消え去つてゐた。胸のすく轟沈である。

續いて三番艦に魚雷が命中する。巨大な眞白な帆をかけたかの樣に大水柱があがり、瞬時にして黑煙に變じ、惰性で航進してゐたが、二分後には一番艦と前後して海底にのまれて行つた。

この間にも吊光投彈は次々と敵艦隊を照し出し、砲彈は敵艦に炸裂したが敵はひたすら電探によつて盲砲撃を行ひ、その壓倒的な數の砲口から送り出される敵彈は、わが艦隊の前後左右へ落下して水煙をあげ飛沫は甲板を洗つたが勿論命中せず、一、二、三番艦を同時に轟沈された敵主力艦の射撃は忽ち絶え、狼狽して護衛驅逐艦の煙幕と、またも襲來したスコールとにかくれて極力南下遁走せんとしたが、滿を持してゐた〇番艦の雷撃は、またもや見事に命中し、敵の大型巡洋艦または大型驅逐艦一隻が火焔の中に沈沒し去つた。かくて戰は終つた。

醜態同士討を演ず

艦隊は轉針して歸路についた。毀軍を引受けたわが驅逐艦二隻は、敵驅逐艦十五隻に取り圍まれたが、巧みな回頭によつて、重圍を脱し、主力隊の後を追つた。

この間に敵は攻撃目標を失ひ、〇時〇〇分頃に遂に同士討を始め、最初は高角砲か、あるひは主砲かと見られる赤曳痕彈と青曳痕彈との射ち合ひであつたが、次第に接近して機銃の水平射撃まで行ひ、遂に一方が火焔に包まれるのが望見された。

南海の早い朝が訪れたとき司令官坐乘の軍艦〇〇の檣頭高く揭げられた軍艦旗は、二發の敵彈貫通の跡を止め、激しかつた戰鬪を物語りながら、朝日にはためいてゐた。この日航空機の偵察によれば、蹌跟として逃走中の敵敗殘巡洋艦は、僅か三隻しかなかつたことが確認されてゐる。

大本營發表（昭和十八年十一月五日十五時）

一、モノ島上陸以來敵の動靜を監視中の所十月三十一日有力なる敵輸送船團數群に分れニューヂョーヂア島南方海面を北上中なるを發見し所在帝國海軍航空部隊竝に海上部隊は直ちに出撃、これを邀撃して左の戰果を得たり

（一）海軍航空部隊は十月三十一日夜より十一月二日朝にかけモノ島東方海面及ブーゲンビル島西方海面に於て一部上空直衛を配せる敵輸送船團を攻撃せり

イ　敵に與へたる損害

轟沈　大型輸送船二隻　撃沈　巡洋艦一隻　驅逐艦一隻　上陸用舟艇四十隻以上　撃墜　十機

撃破　大型巡洋艦一隻　巡洋艦（若しくは驅逐艦）一隻　大型輸送船二隻　小型舟艇多數

ロ　我方の損害　自爆未歸還合計十五機

（二）海上部隊は十一月一日夜ブーゲンビル島ガゼレ灣外に於て有力なる敵巡洋艦驅逐艦部隊と交戰せり

イ　敵に與へたる損害　轟沈　大型巡洋艦二隻　大型驅逐艦一隻　撃沈　大型巡洋艦二隻　巡洋艦（若しくは大型驅逐艦）一隻　撃破　大型巡洋艦　一乃至二隻　驅逐艦二隻　其他驅逐艦一隻同士打ちにて炎上せるを認む

ロ　我方の損害　驅逐艦一隻沈沒　巡洋艦一隻小破

（註）本海戰をブーゲンビル島沖海戰と呼稱す

ブーゲンビル島沖航空戰

第一次ブーゲンビル島沖航空戰

かくして一日夜のブーゲンビル島沖海戰は我方の赫々たる戰果に終つたが、敵は執拗にもブーゲンビル島上陸强行の意圖を捨てず、既述の如くハモンに上陸を敢行すると共に、我が有力基地を攻擊し、二百數十機の編隊を以てラバウルに、百三十五機を以てブカに襲ひかかつたのである。

ラバウルに待機してゐたわが海軍航空部隊、海上部隊、地上部隊は一體となつてこれを邀擊、航空部隊によつて百二十七機、海上部隊によつて五十一機、地上部隊によつて二十三機合計二百一機を擊墜し、一方ブカに於ては地上部隊が來襲敵機の内三十九機を擊墜し、一日にして總計二百四十機を擊墜したのであつた。そのうちラバウルに於ける二百一機擊墜の如きは、基地來襲敵機に對す

る擊墜記錄としては、まさに開戰以來の新記錄であつて、實にわが航空機及び搭乘員の質的優秀さを示して餘りあるものである。

このブーゲンビル島沖海戰竝にラバウル上空々中戰後わが方はその後の敵反攻と補給企圖に對し、いよ〳〵警戒を嚴重にしてゐた處、五日午後わが海軍哨戒機はモノ島、ウツドラーク島の中間地帶に航空母艦二隻、巡洋艦四隻、驅逐艦五隻より成る敵有力部隊が北上しつゝあるのを發見海軍航空部隊はこの敵機動部隊に殺到したのである。

十一月五日、南太平洋は雲が濃かつた。半弦の月も雲間に隱れ、周圍は暗黑で視界は殆どきかぬ。雲の下に拔けようと思つた瞬間、サツと雲の裂け目に出た。

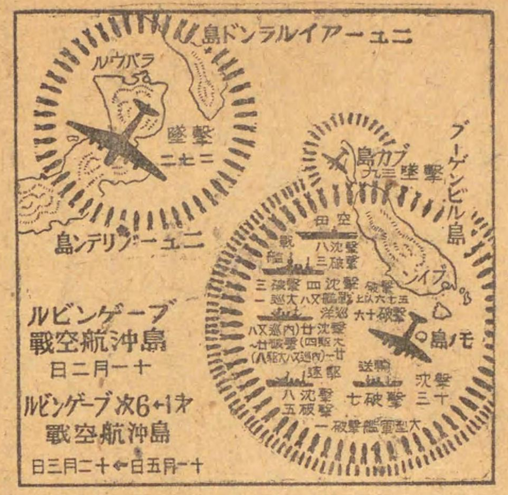
反射的に海面を見下すと燈火を管制した船團が、二十節以上の快速で北進中だ。眞白い航路が夜目にもはつきりと見える。そのうちの二隻は確かに空母だ。甲巡もゐる。

「ようし。空から魚雷のお見舞だ」

と張り切る刹那に敵艦もわが飛行機を發見したらしく、バン〳〵と熾烈な防禦砲火を大空に打ち揚げて來た。敵艦を發見するのと、敵の防禦砲火の炸裂と殆ど同時であつた。いはば暗夜に互に拔き

討ちに太刀を相手に斬り附けたやうな形となつた。

一番機が海面すれすれの超低空で艦橋の高く聳える大型空母目懸けて必殺の魚雷を打つ放した。ハワイ海戰に、マライ沖海戰に驚異的な威力を發揮した誇りの魚雷は白い航跡の尾を曳きつゝ母艦の横腹に吸ひ込まれるやうに命中した。



瞬間起る大爆音と焰、その晝を欺く火焰を目指して、更に一機が止めの魚雷を打ち込んだ。雷擊の强襲と見るや、敵は高速を利して魚雷回避を行ひつついまや懸命な對空砲火を浴びせてくる。

つぎ〳〵に殺到したわが海鷲は、思ひ思ひの獲物に必中の魚雷を投射した。○次攻擊隊が艦船の上に殺到した際には、大型空母は早くも九分通りその巨體を海中に沒し、鬼火のやうに海上を漂ふ。火のついた重油がそのはかない最期を弔ふが如くだつた。

甲巡はいまや天に冲する火を吐きつゝ狂つた如く機

銃を發射しつつのたうつてゐる。○次攻擊隊も遲れてならじと魚雷を放つた。

僅かに○分間。否○○キロの魚雷を、この短時間のうちに悉く投射し、しかも、全部命中させるといふ離れ業はわが無敵海軍以外のどこの海軍に期待し得よう。

刹那の激鬪のうちにこの一戰に備へた默々血の滲む訓練の精華は遺憾なく發揮され、實を結んだのだ。

飛行場の小高い指揮所には痩身美髯の飛行長が、さき程からじつと立ち盡してゐる。その横の見張り臺にも、下の空地にも、月光を浴びて澤山の飛行帽が動いてゐた。

搭乘員士官達が僚友の戰果とその安否を待ちあぐねてゐるのだ。

「味方飛行機らしきもの一機近づきます」

見張員が報告した。乘用車が一臺指揮所に向けて走つて來た。停つてドアーが開くと、飛行服姿の士官が小走りに指揮所に登つてきた。○○大尉の元氣な顏である。大尉は飛行長に敬禮した。

「やあ御苦勞。どうだつた」

「確に航空母艦であります。大型です。右舷に艦橋が焰の中で見えました。私がやらうと思ふ前に

一面の火となり沈んでしまひました。指揮官機がやつたものと思はれます。仕方ありませんので、私は目の前にぐうつと出てきた甲巡に當てました。旋回して敵の彈幕からのがれて振り返ると大火災を起し沈沒しかけてをりました。次の航空母艦は見る間に甲板が火の海となり、しきりに誘爆してをりました。沈んだものと思はれます」

○○大尉が報告を終ると○○飛曹長がすぐいつた。

「あれは沈みました。私がこの眼で見屆けました。乙巡か大型驅逐艦かよくわかりませんでしたが、二隻これも沈みました。艦型から見て巡洋艦ではないかと思ひます。他に甲巡二隻炎上中でした」

攻撃機二機がまた飛行場上空に現れた。これで○○機降着だ。あと歸らぬのは○機だな。一機はややあぶない着陸であつた。飛行長が振り返つて叫んだ。

「○○軍醫中尉をゐか。直ぐ救急車を廻せ。どうもをかしい。負傷してゐる」

飛行長の豫感は當つてゐた。操縦員は右肩貫通銃創、電信員は壯烈な機上戰死を遂げてゐた。他の一機の搭乘員により戰果は全く確認された。

「甲巡二隻とも沈沒いたしました」

ああ、空母二隻、甲巡二隻、乙巡或ひは大驅二隻の轟、撃沈は全く素晴しい戰果であつた。飛行

長は、につこり笑ひ乍ら得意の髯をひねつた。

「どうぢや、訓練の賜ぢやらうが。あの悪視界のなかで見事敵を捕へて○分間でやつてしまうたといふのも、みな不斷の訓練あつてぢや」

誰も彼も忍苦に滿ちた激しい訓練の月日を想ひしのんでゐるかに見えた。

大本營發表（昭和十八年十一月六日十一時）

帝國海軍航空部隊は十一月五日夕刻ブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を發見し之を攻撃して左の戰果を得たり

轟沈　大型航空母艦　一隻　撃沈　中型航空母艦　一隻　大型巡洋艦　二隻　巡洋艦（若くは大型驅逐艦）二隻

我方の損害　未歸還　三機

（註）本航空戰を「ブーゲンビル島沖航空戰」と呼稱す

第二次ブーゲンビル島沖航空戦

十一月八日早朝、〇〇爆撃隊と戰鬪機隊に出撃命令が下つた。昨日も、一昨日も攻撃待機が下令されてゐながら、目ぼしい敵船團の攻撃もなく髀肉の嘆を喞つてゐた爆撃隊は時も時ブーゲンビル島敵揚陸點附近に大船團現はるの快報に、「それつ、一兵も剩すな」とばかり搭乘員が我先にと愛機に飛び乘つた。

〇〇キロの爆彈をしつかりと胴腹に抱込んだ爆撃機が、離陸間隔〇秒毎に鮮かに發進して行く。すでに基地上空を壓する爆撃隊と直衛の戰鬪機隊が、堂々の鵬翼を張つて進撃に移つた。胸をときめかさずにはゐられない戰爆連合の大編隊が白晝の强襲を敢行するのだ。

やがて廿分、卅分と過ぎた。H大尉は〇〇隊の先登をきつて〇〇機の急降下爆撃機を從へて目指す敵船團上空に急いだ。

天候は幸ひ概ね晴、翼下に去來する斷雲の間に波一つ見えない靑海原が何處までも續いてゐる。高度〇〇、速力計の針がぴたりと〇〇節を指して動かない。エンジンも頗る快調だ。

もう左手遙に、ブーゲンビル島が斷雲の間に巨大な姿を横たへ標高三千三百余メートルのバルピ山が雲間に隱見してゐる。あと〇〇分で戰場到着だ。もう一度ぐつと唇を嚙みしめながらあたりを見渡すと、一糸紊れぬ後續機が堂々の編隊陣を組みながら、我遲れじとくつついて來る。

戰鬪機隊がぐつと速力を落しながら、邀撃に來る敵機に鋭い警戒の眼を光らせてゐる。更に五分過ぎ、十分たつた。突然傳聲管を流れる偵察員の聲がかん高く響いた。

「ゐたつ、敵船團だ」

見よ、左翼下に敵上陸地點、トロキナ岬沖二千メートル附近を巡洋艦、驅逐艦各〇隻にがつちりと護衛され輸送船〇〇隻が速力十五節で出撃してゐるではないか。

攻撃隊はトロキナ岬沖〇キロ、高度〇〇で通過しながら、ぐつと敵陣形を見下した。すると更に同船團南東三千メートル附近に眞白な航跡を殘しながら全速で同船團に近づかんとする巡洋艦〇隻驅逐艦〇隻のほか、揚陸點附近に無數の舟艇がうよ〳〵してゐるのだ。

絶好の攻撃目標だ。幸ひ敵艦船上空を遮る雲もなく、附近一帶に雲高千メートル、雲頂五千五百メートルの層積雲が漂つてゐる。敵部隊發見に成功した攻撃隊は、更に進路を南西にとり、ぐつと

大きく左に旋回、ガゼレ灣を右翼下に見ながら遂に突擊が下令された。

時に〇〇時、息詰る緊張がさつと體を電流のやうに過ぎ去つた。直衛の戰鬪機隊がさつと編隊を解いて、全速で北東へ飛び去り始めた。

ふと目を走らすと雲間から二段、三段に分れた敵戰鬪機群が、嵐の如く爆擊隊目がけて殺到して來るのだ。「來たな」と直感しながらも、敵戰鬪機の始末を味方直衛機の戰鬪に任せて、ぐん〳〵急降下進路に入つて行つた。爆擊隊の一群が雲間を突破して高度〇〇から機首を眞逆さまに突込んだ瞬間、敵の防禦砲火が一齊に火を吐いた。

敵艦船の高角砲や、ボン〳〵機銃が狂氣の如く集中射擊を浴せて來るのだ。たちまち、大空が眞黑になつたかと怪しむばかりの彈幕が爆擊隊の前後左右を包み、眞赤な曳痕彈が目も眩むばかりに彈幕を縫つた。攻擊隊員は齒を食ひしばり、瞳を血走らせながら得意の急降下爆擊に移つた。

爆擊機がいくつもいくつもキーンと發動機の不氣味な降下音を殘しながら彈丸のやうに突込み、狙ひに分秒の狂ひもなく續けざまに巨彈を叩き込み、さあーつと機首を引起した。見よ。瞬時にして敵艦の艦橋が吹飛び、大爆發を伴ふ眞紅の焰が天に冲してゐるではないか。

「やつた。やつたぞ」

思はず膝を叩いたH大尉が急上昇しながら、再び戰場を見下すと、四分五裂になつた敵船團のあちこちから天を焦す大火災が卷起り、がくつと左舷に傾斜したもの、全速で遁走を企てるものなど、一瞬に凄絶無比な修羅場だ。

後續機が息つく暇もなく強襲を續ける。爆彈投下直後機首をぐつと引起す刹那、敵防禦砲火の直擊をうけて水煙をあげて自爆した友軍機もあり、味方戰鬪機の間隙を拔けて襲つてきた、グラマンF4F戰鬪機を見事擊墜しながら急降下に移つてゐる壯絕無比な僚機もある。

かくて熾烈目を奪ふ決死の攻擊は僅か五分間で終了した。驅逐艦三隻、輸送船四隻を、瞬時にして葬り去り、巡洋艦二隻、輸送船一隻を大破又は中破せしめ、敵機十五機を擊墜した戰爆連合の攻擊隊は、凱歌高らかに〇〇基地へ歸投した。だがこの日の戰鬪で、敵ロッキードP38、グラマンF4F、ヴオートシコルスキーF4U、五十機以上と空戰、南海の空に散華したわが戰鬪機隊の俊秀納富大尉を失つた海鷲の痛恨は深い。

月齡十日、白銀の月がぽつかりと青空にかゝつてゐる。遙か西南の空に凄い雷鳴が轟き、電光が

絶え間なしに積亂雲を劈いてゐるが依然雨は降りさうもない。强烈な午後の太陽がじり〳〵と大地に灼けついてゐる。戰鬪機に衞られた急降下爆擊隊が基地上空に歸投した頃には攻擊隊がもうすつかり雷裝を終へて出動を待つてゐた。

ブーゲンビル島西南方の海面に戰艦を含む有力な敵艦隊が北西に進行してゐるといふのだ。偵察機から刻々に敵情を報じて來る。更に決死の觸接機○機が間もなく發進する。雷擊隊出擊の時間が刻々迫つて來る。各隊長は何れも眉宇に決死の色をほのめかしながら、部下に攻擊要領を說明、更に烈々の訓示を與へた。好漢S中尉は搭乘員達を前にあたりを壓する大聲で、

「敵戰鬪機と刺違へるなら男子の本懷だ。わが隊の一番槍はこの俺がつける。敵の對空砲火や戰鬪機の襲擊が、どんなに物凄くても斷じて突擊あるのみだ。遮二無二俺の後にくつついて來い。雷擊は最も豪膽、沈着にやれ」

と激勵してゐる。やがて觸接機が發進し、Q大尉の率ゐる第一次雷擊隊が離陸進路に入り、第二次第三次攻擊隊も時を移さず發動機の試動にかゝつた。

去月末以來の相踵ぐ輝かしい戰果に攻擊隊員の士氣はますく〳〵軒昂たるものがあり、戰前既に敵を呑んでゐる。飛行場附近から驅け集まつた地上勤務員達が力一杯日の丸や帽子を振つてゐる。魚

雷をぐつと抱き込んだ雷擊機が次から次へと羽搏いた。往きて還らぬ覺悟、一機一機が決死隊といへるのだ。

莞爾と笑つて擧手の禮を最後に基地上空遙かに飛び去つた。一時間過ぎまた卅分たつた。

暮れるに早い南國の空は、午後四時半を過ぎると早くも日沒が迫り、指揮所に重苦しい沈默が續く。

觸接機から刻々に敵情を報じてくる。敵兵力は○群をなし戰艦、巡洋艦、驅逐艦など、有力艦隊が枚を銜んで速力○○節でブーゲンビル島沖○○浬の洋上を南西に進んでゐるのだ。

戰場に近づくに從つて天候が悪化してきた。既に太陽は水平線に沒し去り黃昏が洋上を包んだ。

各雷擊隊はがつちり編隊を組んだまま進擊に進擊を續け、遂に薄暮、戰場に到達したのだ。

附近天候は雲高僅か五百メートルから雲頂七、八千メートルの亂雲が一面に漂ひ、ところどころにスコールを伴ふ積亂雲が發達、皎々と輝やいてゐるであらう月光も僅かにその位置を知るに足るだけ、だが何といふ天佑ぞ、敵艦隊上空のみ僅かに隙間があり、隱密裡に行動中の敵陣形が忽ちわが觸接機に捕捉されてしまつた。

この狀況が逸早く雷擊隊に通報され、雷擊の大編隊が一路戰場へ驀進して行つた。敵はすでに電波探信機で我軍の高度、進路、兵力を知つてゐるだらう。だが今は必殺の雷擊あるのみだ。第一次攻擊隊のQ大尉機は素早く目標を摑むや否や、間髪を入れず「全軍突擊」を下令した。

編隊を解いた指揮官機がぐんぐん高度を下げながら雲間を抜けて雷擊進路に入れば、後續機も何條遲れをとらう、滅茶苦茶に射上げる對空砲火をものともせず、目標艦に殺到、海上僅か〇〇メートル、距離〇〇メートルで必殺の魚雷を發射、敵艦列を縫ひながら全速で避退する。

おゝ魚雷命中、相次いで〇本瞬時にして、敵戰艦一隻に大火災が起り、巡洋艦二隻が魚雷〇本の直擊をうけ忽ちに艦影を海中に沒し去り、更に巡洋艦一、驅逐艦三が炎上してゐるのだ。ああ凄壯鬼神を哭かしめる薄暮雷擊はかくて火蓋を切つて落した。

敵の對空砲火はなほも凄い彈幕を張り繞らし、曳痕彈が何百發となく愛機の前後上下を通り過ぎる。微笑を頰に刻んだQ大尉は全速で避退を續けながら戰場を離れた。

第一次雷擊隊が戰場を脱した頃、最早、野坂大尉指揮の第二次雷擊隊が時を移さず、游弋中の別の艦隊を捕捉猛然攻擊に移つた。

晝をあざむく防禦砲火の炸烈を尻目に、高度を下げながら雷擊進路に入るのだ。

出擊前固く生還を期してゐなかつたのであらう野坂大尉は、戰場上空に到達するもなほ機尾燈を明々とつけたまゝ雷擊進路に入つて行つた。この熾烈な對空砲火の好目標になる事を覺悟の上で後續機の誘導に一身を獻げてゐるのだ。後續機の搭乘員は、流れる涙を拭ひもせず、指揮官機に續いて、的確無比な雷擊を敢行した。

炎上する戰艦四隻のうち一隻が海中に姿を沒した。既に散華した幾多戰友の萬斛の恨みをこめて捨身の雷擊が行はれたのだ。しかし野坂大尉は魚雷發射後、その姿を失つた。そこへ止めの第三次雷擊隊が突入したのだ。

指揮官機のS中尉機は友軍部隊の先陣を承つて火焰に包まれながら、僅かに蛇行運動を繰返してゐる敵戰艦に壯烈無比な體當りを强行、見事戰艦と差違へて鬼神も哭く壯絶な自爆を遂げ、續く〇〇機の雷擊機もまたこの忠烈に勵まされ、なほ苛烈を極める防禦砲火をものともせず、われ先にと生殘る敵艦めがけて突込んだ。

敵戰艦並に大巡に魚雷の正確な直擊を喰はせ、敵艦斷末の物凄い形相を網膜に灼きつけて歸途についたH、K兩飛曹長等は「我等勝てり」の言葉をぢつと嚙みしめながら、凱歌高らかに生還した

のだつた。

大本營發表（昭和十八年十一月九日十六時）

帝國海軍航空部隊は十一月八日朝以來ブーゲンビル島南方海面に於て敵輸送船團並に護衛艦隊を猛攻中にして只今の處判明せる戰果左の如し

撃沈　戰艦　三隻　巡洋艦　二隻（轟沈）　驅逐艦　三隻　輸送船　四隻　撃破　戰艦　一隻（炎上大破）　大型巡洋艦三隻以上（大破）　巡洋艦（若くは大型驅逐艦）三隻（炎上大破）

大型輸送船　一隻　（炎上大破）　撃墜　一二機以上

我方の損害　自爆未歸還　合計一五機

（註）本航空戰を第二次ブーゲンビル島沖航空戰と呼稱す

大本營發表（昭和十八年十一月十日十五時）

第二次ブーゲンビル島沖航空戰の戰果に左記を追加す

撃沈　戰艦　一隻（既報撃破戰艦一隻（炎上大破）とありしもの）　撃破　大型巡洋艦　三隻

（大破）　巡洋艦（若くは大型驅逐艦）　一隻　撃墜　三機

我方の損害に自爆未歸還五機を加ふ

以上の綜合戰果左の如し

撃沈　戰艦　四隻　巡洋艦　二隻（轟沈）　驅逐艦　三隻　輸送船　四隻　撃破　大型巡洋艦六隻（大破）　巡洋艦（若くは大型驅逐艦）四隻　大型輸送船　一隻（炎上大破）　撃墜　十五機

我方の損害　自爆未歸還　合計二十機

第三次、第四次ブーゲンビル島沖航空戰

ブーゲンビル島南方海面に空母〇隻を中心とする、敵大部隊に白晝堂々の強襲を加へ、急降下爆撃と雷撃による一戰は曾て見ざる凄壯な航空戰であつた。

この攻撃隊が〇〇基地に歸投したころ、續いて第二次雷撃が下令された。

十月廿七日敵がソロモン群島モノ島に上陸以來、寸刻の餘裕もなく緊張し續けてゐる戰鬪指揮所では、矢繼早にあげる戰果に凱歌を奏しながら、立ちどころに雷擊機隊の編成が時を移さず決定した。

無氣味な魚雷を運ぶ運搬車が走り廻り、トラックが凄い土埃をあげながら搭乘員を運んでくる。整備員は愛機の試動に汗と油で眞黑になり、忽ち雷裝は完了した。

基地上空は快晴に惠まれてゐるが刻々偵察機から報ぜられるブーゲンビル島西南方の天候は全く思はしくない。

いつかとつぷりと夜の帳が重く垂れ、月齡十三夜の月が、もう大分高く上つてゐる筈なのに、それすら見出せない密雲だ。

がつちり編隊を組んだ攻擊隊はなほも進擊を續けて行つた。だが、空母を含む敵部隊は發見されない。最早敵艦隊附近に進出してゐる筈だのに、目指す目標が捕捉出來ないのだ。卅分、一時間と必死の索敵を强行したが、遂に空母群は發見されない。

その時だ。觸接中の〇番機から、ムツビナ岬西南方〇〇浬に、速力廿ノットで、西北に進む敵艦隊發見を報じて來た。忽ち雷擊隊は機首をかへして觸接機が發見した敵部隊上空に殺到した。

突如翼下の海面から高角砲とボンボン機銃が、どつと一齊に打上げられた。

「おゝ、敵だ」

と直感した指揮官機は反射的に全速で、さあつと右に急旋回しながら、ぐつと海上を見下すと、一

「ゐた、ゐた、敵艦隊だ」

見よ、戰艦〇隻を掩護する巡洋艦、驅逐艦約〇〇隻が狂氣の如く對空砲火を擊上げてゐるのだ。

後續機も右へ急旋回した。幸ひ一機の故障もない。雷擊隊はさつと一度敵艦隊から離れて急反轉した。その時、編隊を解いた各機は逸早く目標を選び、必殺の雷擊進路に入つて行く。

指揮官機は猛烈な彈幕を突拔けて敵戰艦に照準、高度〇米、距離僅か〇〇米で、だつと魚雷を發射、敵の艦橋すれ〳〵に全速で避退した。

眞赤な對空砲火の火花が、前後左右上下に無數に炸裂した。緊張の頂點に達した一瞬だつた。

「戰果如何に？」

と機首を右に旋回した大尉が操縱桿にぐつと力を入れながら振向いた途端、物凄い尖光とともに天に沖する大水柱が敵艦の艦尾から、どつと吹上つた。

「よし。命中だつ」

思はず歡喜が腹の底からこみ上げてきた。他の搭乘員達も見交す視線にいひ知れぬ喜びを交錯させてゐる。

後續機もわれ遲れじと突込んだ。巡洋艦又は大型驅逐艦と見える敵艦が、胴腹に正確な雷擊を受け、がくつと右に傾斜したまま、刻々波間に艦影を沒し去り、驅逐艦一隻も夜空を焦して炎上してゐる。

かくて、壯絶な夜間雷擊に成功した攻擊隊は、再び惡天候を衝いて全機〇〇基地に凱歌を擧げた。〇〇航空部隊にとつて雷擊機隊全機歸還の記錄は二回目である。

眞紅の太陽が、何事もなかつたかのやうに東天に輝き、世紀の決戰場を彩る戰ひの日がけふも訪れた。

午前中敵の動靜を覗つてゐたわが航空部隊に、十三日未明突如また雷擊待機が下令された。ブ島ムツピナ岬西南方〇〇浬で空母二隻を中心とする敵大部隊が、またもわが索敵網に引掛つたのだ。攻擊隊の〇〇機がすつかり雷裝を終へた午後〇時ごろ、十數日來雨を見なかつた飛行場に、さあ

つとスコールが通りすぎ、夕闇が迫るにつれて天候は昨日にも增して惡化してきた。

攻擊隊員は、戰鬪指揮所で夜露に濡れながら、大空を仰いで一時間、二時間と天候の回復を待つた。やがて、十四日の月も明るく下界を照らし出した。

「それつ。出擊だ」

N飛行隊長の率ゐる雷擊機隊、〇〇機は時を移さず離陸して行く。地上員達が帽子を振り續けながら戰友の出擊を見送つてゐる。進むにつれて天候は依然惡い。

基地を出てから〇時間が過ぎた。攻擊機隊の大編隊は豫想される戰場上空を旋回しながら搜索を續けた。と〇時〇分、比較的雲量の少ない海面に遂に敵大部隊を發見したのだ。

指揮官機は慌だしく列機に通報。さつと編隊を解いて直ちに突擊命令を發した。

敵艦隊は漸くわが襲擊に氣がついたか、一齊に防禦砲火の火蓋を切つた。

無數の火花が飛散り、曳痕彈が縱橫に交錯してゐるすさまじさ。敵兵力は空母二を含む戰艦、巡洋艦、驅逐艦など〇〇隻の大部隊だ。輪型陣を形づくり空母はすでに低く垂下つた層雲の中に突込んでゐる。

指揮官機が戰艦の艦尾に必殺の魚雷を叩込み、これを大破せしめたのを皮切りに、後續機が捨身

の雷撃を强行した。

あはてふためく敵艦は主砲までも打出し、總ての火器が物凄い火を吹上げてゐる。だが決死のわが雷撃機は一發、二發と正確無比な雷撃を續行した。

水柱に包まれる空母、忽ち轟沈された大型巡洋艦、大水柱と共に沈み行く驅逐艦、他の巡洋艦一隻も撃沈された。

この頃友軍機らしきもの一機が火を吐きながら壯烈な自爆を遂げたのが認められたが、これが單機敵艦上空に潜入して友軍攻撃隊を誘導した觸接機であつたことが後刻確認されたのだつた。

この夜敵機がわが飛行場附近の草原に爆彈數個を投下して遁走した頃、雷撃機隊は全機その勇姿を上空に現した。どつと歡呼の聲がまだ明けやらぬ戰鬪指揮所に沸き起つた。」

大本營發表（昭和十八年十一月十三日十六時）

一、帝國海軍航空部隊は十一日晝夜間に亙り惡天候を冒しブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を捕捉攻撃し左の戰果を得たり

撃沈　巡洋艦（若は大型驅逐艦）　一隻（轟沈）　撃破　戰艦　一隻（中破）　大型航空母艦

二隻（小破）　大型巡洋艦　一隻（大破炎上）　巡洋艦（若は大型驅逐艦）　三隻（大破炎上）

驅逐艦　一隻（大破炎上）　撃墜　二機

我方の損害　自爆未歸還　合計三〇機

（註）本航空戰を第三次ブーゲンビル島沖航空戰と呼稱す

二、帝國海軍航空部隊竝に海上部隊は十一日「ラバウル」に來襲せる敵約二百機を邀撃し其の七十一機を撃墜せり

本戰鬪に於て我方損害驅逐艦一隻沈沒、巡洋艦一隻小破、未歸還一〇機なり

大本營發表（昭和十八年十一月十四日十五時）

帝國海軍航空部隊は十一月十三日未明ブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を捕捉攻撃し左の戰果を得たり

撃沈　大型巡洋艦一隻（轟沈）　巡洋艦一隻（轟沈）驅逐艦一隻　撃破　戰艦一隻（大破）中型航空母艦一隻（大破）

我方の損害　未歸還二機

（註）本航空戰を第四次ブーゲンビル島沖航空戰と呼稱す

第五次ブーゲンビル島沖航空戰

〇〇基地の殺氣に包まれた海鷲達は一齊に躍り上らんばかりにして、出擊準備を急ぐ。〇時整列〇〇飛行場の一隅では指揮官〇〇が部下を集めて雷擊についての最後のおさらひをした。

「近よれば近よるほど、命中の精度は良好になる。〇百米ほど接近して射つても艦底通過をする心配はない。折角射つのだから出來るだけ接近するやうに」

平素雷擊訓練に出かける前に教へるのと少しも變らぬ聲音である。黑い一團となつて、それを承る人々の樣子もまた山の如く靜かだ。螢が靑い尾を曳いてその中をよぎる。ほのかに浮び出す人々の顏、それは微笑さへ浮べてゐるではないか。

この頃。同じ飛行場の他の一隅ではK攻擊隊が、そして〇〇の飛行場ではH攻擊隊が、これもまたはやる胸を抑へつつ出擊の準備を急いでゐた。そして〇時、各隊は相前後して離陸、ガッチリ組んだ編隊を示しつつ飛行場の上空を大きく旋回し、そして一路戰場へと針路をとつた。

十七日午前〇時〇分、I攻擊隊は足下に數個の燈火が點々とするのを認めた。

「しめたッ、敵發見」

だが豫想戰場とは若干の差がある。これが果して目ざす船團であらうか、燈火の正體を見屆けねばならぬ。

陰曆廿日の月がかかつてはゐるのだが、あまりに天頂にあるため、飛行機直下の海面が僅かに明るく見えるだけで、外は全く眞の闇と異らぬ。I中尉はその上空を旋回しはじめた。突込んで行けばはつきりすることは判つてゐる。だが、一度突込めば最後再び上げ舵を取り得る期待は持ち得ぬ決死の降下なのだ。「空母群を擊滅せよ」と命ぜられてゐる。他の物を狙ふことは許されない。旋回した。だが正體はまだ判然としない。中尉はなほも旋回を續けた。

これより先にK攻擊隊はやうやく豫想戰場に到達、これも同じく不利な天照を忍びつつ附近海上を搜索すること〇時間。突如脚下に空母群を發見した。發見が困難だつた筈だ。天照の不利に加へて敵は從來の經驗に懲りたものか、暗夜にも白く光つて見える航跡を立てぬため、速力を落して、我が方の目をくらまさうとしてゐたのだ。

しかしこの韜晦戰法も、ねばり强い我が海鷲の目には遂に發見されざるを得なかつた。

K攻擊隊は忽ち、突擊隊形をとつて襲ひかゝつた。それまでは韜晦をこととし發射しなかつた敵も矢庭に立ち直つて猛烈な防禦砲火を浴せかける。

幾十條の火焰放射器でまきちらすやうな機銃彈の流れ、高角砲の炸裂、其炸裂に煽られて雷擊機は波にゆられるやうだ。發射、空母二隻の舷側に稻妻のやうな閃光が走る。巡洋艦一隻が一大火柱を天に吹き上げた次の瞬間、その火柱が海中に吸ひこまれるやうに引いて行くのと共に、はやくも姿を海中に沒し去る。K隊は颶風の如く敵艦上をかすめて避退、この時、H攻擊隊も馳せつけてきた。

この隊も「空母を射つまでは燃料の續く限り」との悲壯な決意のもとに〇時間も附近海上を搜索してゐたものだつたが、K隊の攻擊の火の手を見ると共に勇躍これに突入して行つたのであつた。

一本、二本、三本、魚雷ばきらりと月光をうけて波間に躍り、白銀の一線が走る。先の攻擊に一發をうけた空母がまたも一發を喰ふと共に灼熱の鐵片を八方に吹き散らせたのを最後にグーッと波間に吸ひ込まれて行く。今まで無傷でゐた他の空母も必殺の魚雷を喰つて忽ち炎上をはじめる。巡洋艦が赤い腹をかへして燃える。流出した重油に火がついて、海は火の海、文字通りの修羅場である。

怪しい燈火を認めてその上空を旋回してゐたI攻擊隊はK攻擊隊の「全軍突擊」の無電をうけると同時に自らの脚下のものが空母群でなかつたことを知り、直ちに眞の目標へ向つて突進した。そして遙かにこの火焰を發見した。

二隻の空母の窓といふ窓から吹き出す火焰が上空からはあたかもイルミネーションのやうに美しく見える。その横に何型か、これも巨大な一隻が太い火焰を吹き上げてゐる。「よし、俺も遲れはとらぬぞ」直ちに突擊に移らうとしたI中尉だつた。だがその時同中尉の胸は更に不敵な考へによつて占められた。

三隻と聞いてゐたが燃える空母は二隻しか見えない。射ちもらしがあるかも知れぬ。遲れついでだ。じつくり全貌を見渡してから止めを刺してやらう。

そしてそのためには、〇時間後に來る天明を待つよりほかに方法はない。そして、それは夜間、闇にまぎれて接敵する利を一擲して白日のもとに身を曝しつゝ强襲を敢行しようとする眞に決死の大決心である。しかし、「空母を擊滅すべし」との命令の前には、それも敢て意とするに足りぬ。同中尉は敵の上空を旋回しはじめた。以心傳心。隊長の決意を知つた列機も一糸亂れぬ編隊でこれ

に從ふ。上空をつきまとはれてゐることを知つた敵が射ち上げる猛烈な防禦砲火の中を編隊は巧みに旋回を續ける。

かくて〇時間、東天の一角にほのかな白さがさして來た。西の空は未だ暗黑、この一瞬、黎明攻擊の最適時期だ。

見渡せば炎上中だつた一隻の空母はすでに甲板上に水をかぶり、次第に波間に沈まんとし、他の一隻が左舷に大傾斜しつつなほ醜くのたうつてゐる。その近くに一隻、何型か巨艦が赤い艦腹を見せつつ漂つてゐるし、附近の海面にはすでに擊沈された敵艦の名殘りをとどめる浮游物が、おびたゞしく漂つてゐる。

好機逸すべからず。全軍突擊。I中尉は列機とともに炎上する空母に突進した。そして正に發射桿を引かうとした時、一足早く射つた列機の魚雷に空母は大渦卷の中に呑み込まれた。

巡洋艦が、もいだやうに二つに割れる。その中へ列機が一機火となつて、自爆して行く。I中尉はやり直しをして今度は巡洋艦を狙つたのち避退しつつ、最後になほ一度全局を見渡した。

空母三、巡洋艦〇、驅逐艦〇と報ぜられた敵の大艦隊も今や空母なく、巡洋艦また殆ど見えず、僅か〇隻の驅逐艦が狼狽の姿も見苦しく逃げのびて行くのみ、海面一帶は流出した重油が、朝日を

「うけて、ギラ〳〵と輝き、その中におびたゞしい浮游物が漂ひ、上空一圓には幾隻もの敵艦を燒き盡した煙が低くたなびいて米艦隊の最期を物語つてゐる。

戰ひは終つた。I中尉は驅逐艦の射ち出す火網の虹を飛び越えて、歸路についた。

大型空母一隻、中型空母二隻、巡洋艦三隻、艦型未詳の大型艦一隻擊沈の大戰果、かくて第五次ブーゲンビル島沖航空戰は終つた。

しかして、この大戰果はマライ沖海戰以來雷擊三回の記錄をもつY飛曹長をはじめ五機の尊い犧牲と、參謀連までが「いやよくもねばつたものだよ。聞いてゐるこちらがハラハラした」と舌を卷いた程の全員一體となつての執拗なねばりにより、海鷲の必殺雷擊戰史に更に輝く一頁を加へた尊い戰果であつた。

大本營發表（昭和十八年十一月十七日十六時）

帝國海軍航空部隊は十一月十七日未明ブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を捕捉し、左の戰果を得たり

轟沈　大型航空母艦　一隻　撃沈　中型航空母艦　二隻　巡洋艦　三隻　大型軍艦（艦種未詳）一隻

我方の損害　未歸還　五機

（註）本航空戰を第五次ブーゲンビル島沖航空戰と呼稱す

第六次ブーゲンビル島沖航空戰

大東亞戰爭開戰以來滿二年目の十二月八日を目前にして十二月三日夕刻、ブーゲンビル島南方海域に、またしても輝かしいわが海鷲の大戰果が擧つた。大本營より第六次ブーゲンビル島沖航空戰と世紀の名稱を冠されることになつた。

敵米軍は十一月の始めから五次に亘る大海空戰を交へ、その都度常にわが海鷲雷擊機の猛威の下に大損害を蒙つたが、十二月三日夕刻新らたな侵攻出擊の滿々たる意圖を秘めて、空母を中心とする有力艦隊を編成、舳艫相銜んでモノ島西方海面を北上し來つたのである。

彼の出擊を察知したわが雷爆連合の編隊は戰機を失せず發進して、これをモノ島西方數十浬の洋

上に捕捉して敵空母三隻撃沈、戰艦一隻撃沈、大型巡洋艦一隻撃沈、同一隻撃破、驅逐艦一隻撃破戰艦一隻撃破の大戰果を擧げ、またも海鷲戰史に燦然たる一頁を加へたのである。

その日〇時〇分基地を發進した海鷲雷擊隊は、目的の海面めざして快翔を續けた。やがて南海の陽は早くも水平線に沒した。進むに從つて青空は雲に狹められ、行手の空には積亂雲がむくむくと立ちはだかつてゐる。

西の空の餘映も次第に薄れ、濃藍色の海面から次第に暮れて行く。

まもなく前方のスコール雲の裾の邊りに黑くモノ島の島影が見え出した。めざす戰場もほど近い海面に隅なく視線を配りつつ進んだ。だが敵艦らしいものは見あたらない。

機は島に向つてどんどんぶつかるやうに驀進してゆく。

このときさつと陸岸の方から探照燈が照射すると殆ど同時に高角砲の彈幕が、脚もとに炸裂し出した。編隊は彈幕を巧みに躱すと反轉して針路を逆に北に向けた。

敵戰鬪機が數機横合から挑みかかつてくるのを雲を利してまきながら敵艦求めてなほも進むうちすぐ脚下の海面に斷雲の中から敵の輸送船が四、五隻現れた。

いよ〳〵目的物は近いぞと勇躍高度を下げ眼をじつと海面に凝らしながら驀進を續ける。果して間もなく行手に當つて黑々とした艦影を並べてゐるのは、紛ふ方なき敵艦隊だ。とつさにみただけでも十隻餘り、輪型陣だ。驅逐艦を周圍に、護衛の巡洋艦を前と左右に置き、眞中に空母を挾んで夕闇迫る海面にかすかな白波を立てながら北西の方向に航進してゐる。

眼を凝らすと遙か前方には、戰艦らしい艦影も見える。求める敵は遂に發見された。

時刻はまさに薄暮攻擊に絶好の日沒後〇〇分といふ時間だ。機を逸してはならない。

「全軍突擊せよ」

との命令が指揮官機から下つた。時に午後〇時〇分、餌物は多い、すかさず突入して行つた。

この時赤い吊光投彈がポツリと敵艦隊の眞上に眞紅の提灯を吊したやうに浮んだ。先發した索敵機が投下したのだ。眞先きに突進した指揮官機に續いて列機はいづれも赤い火の玉を目じるしに猛然敵艦列めがけて殺到した。

敵艦からも一齊に對空砲火の火蓋が切られた。わが猛擊を脫れんと高角砲、高角機銃は勿論、主砲までも亂射し狂氣の如く射ち出した。殊に護衛巡洋艦の高角機銃は、曳痕彈の眞赤な彈道が一面

の火の幕を張つたやうな物凄さだ。

一旦目標めがけて雷擊針路に入らんとした指揮官機はあくまで狙ひの正確を期し、この鐵と火の眞紅の焰を突き拔け、大膽にも敵艦列の眞中を全速で突切つた。今度は反對の側から敵艦めがけて突込むなど、やり直して最好の位置で突入した。敵前で悠容迫らず、會心の狙ひで、必殺の魚雷を放つた。敵艦は急旋回する指揮官機に一段と激しい砲火を集中する。

この頃海上は夕闇が次第に濃くなり、空は殆ど雲に蔽はれ、時々櫛のやうな月が雲間から顏を出して海面に淡い光を投げてゐる。

雷擊機隊の各機は果敢な肉薄攻擊を續けてゐる。

かくて全軍突擊下令後約〇〇分、敵艦一隻は魚雷命中して忽ち暗い海面から姿を沒する。續いて空母一隻にも魚雷が命中、艦の中央から天に冲する火柱を奔騰させたと思ふと忽ち甲板は火の海となり、ついで全艦猛火に包まれた。またこれより二分後、更に一隻の空母は胴體に魚雷を食ひ、轟然爆發を起すと見る間に大火災となり、眞紅の猛焰は天を焦して噴き上げた。次いで他の一艦にも魚雷命中、激しい閃光が海面の夕闇を裂き切る。

だが列機の二機はこの激鬪の最中に無念敵彈を受け、火の玉となつて敵巨艦に突入、壯烈な自爆

を遂げたのであつた。

一方魚雷發射を終つた指揮官機は被彈二十ケ所に及んだ。ガソリンは漏れながらも戰場上空にとどまり、悠々僚機の戰果を見屆けた上で、敵母艦の炎々たる火焔の色どる戰場をあとに凱歌を擧げて歸投針路についたのである。

敵來らば必ず擊滅せずばおかぬわが海鷲の無比の鬪魂と戰力は、またもソロモンの海に赫々たる殊勳を打ち立てたのである。

大本營發表（昭和十八年十二月五日十五時）

帝國海軍航空部隊は十二月三日夕刻ブーゲンビル島南方海面に於て敵機動部隊を捕捉攻擊し左の戰果を得たり

擊沈　航空母艦三隻（內二隻轟沈）戰艦（若は大型巡洋艦）一隻　大型巡洋艦一隻　擊破　戰艦一隻（大破炎上）　大型巡洋艦一隻（擊沈概ね確實）　驅逐艦一隻（擊沈概ね確實）

我方の損害　未歸還十機

（註）本航空戰を第六次ブーゲンビル島沖航空戰と呼稱す

ギルバート諸島沖航空戰

第一次ギルバート諸島沖航空戰

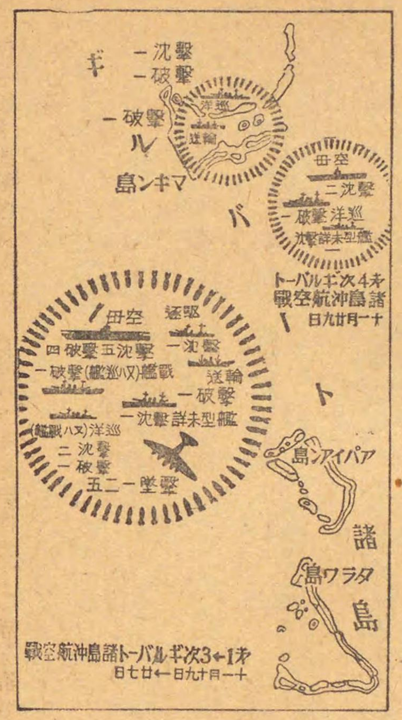
昭和十八年十一月十九日朝來敵米軍は、空母竝に戰艦數隻を基幹とする有力艦隊を以て、ギルバート諸島マキン島タラワ島に猛烈な砲爆擊二晝夜の後、一部兵力は二十一日朝兩島に上陸した。

かくて南太平洋方面における戰局と共に中部太平洋においても、日米の決戰が展開された。

吹き荒ぶ暴風雨を衝いて、一發必中の魚雷を抱いた海鷲が、一機又一機、離陸して行つた。司令官以下全將兵が、もどかしく待つた〇時間、やがて全身に被彈した機が、あの第一次ギルバート諸島沖航空戰の赫々たる戰果を齎らした。しかしその蔭には、隊長機をはじめ幾多の壯烈な體當りがあつたのだ。以下は第一次ギルバート諸島沖航空戰記である。

十一月十九日未明、延機數約百四、五十機に及ぶ艦上爆擊機、グラマン戰鬪機をもつて、大擧ナウル、タラワ、マキン島に來襲した。

次いで齎された海軍索敵機からの「敵機動部隊出現」の報に、攻擊隊精鋭は、全員腕を撫して待機した。



この日朝來、基地附近は南洋に珍らしい細目の雨に、十二、三メートルの突風を交へた暴風雨になつて、遙かに東天の白みかかる頃には降つてはやみ、降つてはやみしてゐた。

見張臺の上で黑い雨具を着た見張員が、ずぶ濡れになつて、懸命に双眼鏡をつけてゐた。指揮所の二階では、司令官以下幕

僚、司令以下攻擊隊幹部が、雨漏りのする屋根の下で額を集め、地圖にコンパスをあてながら、しきりと凝議してゐる。

やがて偵察、索敵、觸接、雷擊の要務を帶びた各隊は、次々に發進して行つた。

見事な離陸ぶりであつた。その中に、出發前の訓示のあと、「單機になつても攻擊を續けるぞ」と部下にさとした武人肌の隊長宮前大尉もゐた。

○時間ののち、果せるかな先發の索敵機から、

「敵大船團見ゆ、方位速力十五節、東北進中」

の第一報が齎された。

「われ觸接を續行す」

と不敵にも、暗夜友軍攻擊隊の來着を鶴首して待つ若い觸接機の電報が、基地にゐる人の氣を苛だたせた。

その夜未曾有の惡天候、暴風雨を衝いて、わが精鋭攻擊機は、暗夜敵大部隊の中に突込んだ。○一飛曹機が飛び込んで、雷擊を無事果したのち、急上昇したとき、どの機の誰が放つたのか、一發必中の魚雷が、敵中型空母を瞬時にして轟沈させたのを見たのも、この時である。

ぽつ〳〵歸投して來た攻擊隊員の中に、敵輸送船目がけて體當りしてゐた友軍機を見たといふ偵察員もゐた。二日間一睡もせぬ血走つた瞳と瞳の中に、烈々たる鬪魂が燃えたぎつてゐた。

もどかしく戰果を待つた一晝夜は明けて、十一月二十日もきのふに劣らぬ暴風雨だつた。この惡天候を冒し、攻擊機が雷裝して基地を發つて行つた。

しかし敵はもう遠逃げしたものか、わが索敵機が猛烈なスコールの中を、鵬翼の伸びるかぎり、心眼の屆く限り、隈なく索敵したが、遂にその姿を現はさなかつた。

翌二十一日、暴風雨はややをさまつたが、それでもまだ日に一度乃至二度が普通のこの方面のスコールにしては、回數も多く　暗さも暗い、いやな日だつた。

「よし今日こそはやるぞ！」

整備員、魚雷員たちも、合羽をかなぐり捨てて愛機の下に集つた。飛行場の芝生の水溜りを蹴散らして傳令が、あちこちと飛ぶ。電報箱を持つた電信員が、いま來たかと思ふとまたやつて來た。

敵大部隊が今曉ギルバート諸島のマキン、タラワ島に上陸して來たのだ。水陸兩用戰車多數を先頭に、その後から上陸用舟艇約〇百隻をもつて、環礁の內側棧橋寄りのわが陣地目がけて、遮二無

二上陸を開始し、沖合からは戰艦、巡洋艦と思しきもの數隻が、艦砲射擊中との情報が、刻々に入つて來る。

「よし、やるッ！」

全員齊しく唇を嚙んだ。攻擊隊指揮官宮前信己大尉を始め秋山義秋大尉等の勇士が黑板に隊員の配置を書き出した。

やがて整列、いよいよ決戰に進發する。

參謀から達せられた詳しい敵情のあとで、司令は出で征く勇士を前に、

「タラワの友軍は、我に數倍する大敵を、邀へ擊つて、勇戰奮鬪してゐる。敵後續部隊を見つけてこれを潰滅、空から友軍を救援するのが、皆の役目になつた。死を賭して、任務を完うして來い。」

牢固として動かぬ敵必滅の大號令だ。聽き入る勇士等の眉宇が「死を賭して！」の瞬間　ピクッと動いたのが見えた。司令も溫顏に、動かぬ表情を、飛び征く若鷲達の額に注いだ。

どんなことがあつても、魚雷を各々の目標に命中させよう。

溫厚な宮前大尉が訓示してゐる。秋山大尉は「一番調子の惡いのに、私が乘つて征かう」といつた。平常の訓練と少しも變らぬ態度で、それ〴〵の愛機に跳び乘つたのだ。

急襲隊より約一時間前に、基地を出た觸接機は、難航〇時間、やつと雲下猛烈なスコールの積亂雲帶を突きぬけたと思ふと、眼下に油繪のやうな夕方のギルバート諸島が、見えはじめた。雲量三乃至五、攻擊には絶好の天氣である。

索敵機の指示した方向に、全速かけて直行して見ると、東南方洋上水平線に、先頭からみて、驅逐艦一隻、次は戰艦らしいもの一隻と、中型で改造空母らしいのが一隻、大型空母、そのすぐ後方に驅逐艦、中型改造空母などが、行儀よく並び、單縱陣をなして四、五節の緩やかな航跡を曳いてゐる。

攻擊には至極絶好である。攻擊機隊も全速かけて、決戰場に殺到した。時に〇時〇〇分。

指揮官機は、遽かに「突擊態勢をとれ」と指令した。敵はわが攻擊機來ると、その時氣づいたものか、艦隊は急に煙をはき、各空母の甲板からは、多數のグラマン機が發艦して、邀擊態勢をとつた。

「全軍突擊せよ」

隊長の指令に、機體が浪沫に濕るまで降下した。

指揮官宮前大尉、〇番機は隊長機と見て、群がる敵戰鬪機グラマンを尻目にかけ、大型空母に突

込み、また秋山大尉の〇隊〇番機も、その前方に航行中の中型空母に突進した。

必中の魚雷を發射したと見るや、そのまま敵艦橋目懸けて、愛機とともに、壯烈な體當りを決行したのであつた。

戰艦が燃え上つた。驅逐艦が瞬時にして、眞二つに割れた。も一つの大型空母が、黑々と煙を吐いて右舷に大傾斜した。輸送船が太つ腹を抉られて、中から器材兵員をどんどん吐いた。

夕陽を浴びたギルバートの海面は、一瞬にして、混亂の坩堝と化したが、約三十分ののちには、早くも再び靜謐にかへつた。その間僅かに四十數分。

かくして第一次ギルバート諸島沖航空戰は、中型空母、驅逐艦各一隻轟沈、大型空母二隻、中型空母一隻擊破、戰艦若くは巡洋艦、輸送船各一隻大破炎上といふ記錄を殘したのであつた。

大本營發表（昭和十九年十一月二十二日十六時三十分）

航空母艦並に戰艦を含む敵の有力なる部隊は十九日朝來艦載機及艦砲を以てマキン島及タラワ島を反復砲爆擊し、その一部兵力は二十一日朝兩島に上陸し目下激戰中なり

大本營發表（昭和十九年十一月二十三日十六時）

「ギルバート」諸島方面今猶激戰中にして特にタラワ島に於ては上陸點附近を中心とし激鬪行はれつゝあり、十九日以降海軍航空部隊並に地上部隊により得たる戰果左の如し

一、海軍航空部隊によるもの

撃沈　中型航空母艦一隻（轟沈）驅逐艦一隻（轟沈）　撃破　大型航空母艦二隻（大破、内一隻は沈沒の算大なり）中型航空母艦一隻（大破、沈沒の算大なり）戰艦（若くは巡洋艦）一隻（大破炎上）輸送船一隻（大破炎上）　撃墜　三十六機（内不確實三機）

二、地上部隊によるもの

撃墜　八十九機（内不確實二十二機）

我方の損害　自爆未歸還合計十五機

なほ十一月二十九日の大本營發表において二十二日のギルバート西方海面の航空戰を第一次ギルバート諸島沖航空戰と呼稱することになつた。

第二次第三次ギルバート諸島沖航空戰

第二次ギルバート諸島沖航空戰は十一月二十六日夕刻ギルバート諸島西方海面において敵機動部隊に猛攻を加へ航空母艦二隻を撃沈した航空戰である。また第三次ギルバート諸島沖航空戰は、翌二十七日夕刻ギルバート諸島西方海面で航空母艦二隻、巡洋艦二隻を撃沈し、巡洋艦若しくは戰艦一隻を撃破した海戰である。何れも敵の侵攻を見事に粉碎したわが必殺の鬪魂に燃える海鷲部隊の胸のすくやうな航空戰で敵大艦隊をして色を失はしめたものであつた。

「基地に漸く清澄な朝が訪れた。廿五日作戰開始後まる五日間見なかつた嬉しい晴天である。この朝前夜タラワ攻撃に出た部隊の歸還機は、「タラワなほ勇戰中、敵は新鋭部隊を混へてまだ來るらしい」と報告、撃つても撃つても足りぬ魚雷を裝塡するために、息つく暇もなく、それらの機が最寄基地に羽搏いていつた。戰友を失つた基地の寂しさ、またしても在りし日の懐しい勇士らの面影が浮ぶ。

司令も整備長も副長も、「淋しくなつたナア」と他を顧みて微かに笑はれる。皺い増した顔、絶好の獲物を前にして齒痒くて仕方がないといつたやうな顔、その日午後から夕方にかけて、堂々西の空を壓して友軍攻撃隊戦闘機隊の爆音が響いた。孤軍奮闘よく旬日を支へた本隊に對する無言の加勢である。

「來た、來たッ、來ましたッ！」士官舍の廊下を駈けて報道班員は報せて歩いた。

新鋭海鷲を腹一ぱい收容した基地は遽かに色めきたつた。廿六日遠來の友軍が慰ふ間もなく直ちに、第二次作戦開始である。

午前〇時索敵、觸接機發進、同〇時半攻撃機隊〇〇機が勇躍基地を發進、〇時〇分にはもう「空母二隻を中心とする敵機動部隊見ゆ。位置マキンの西北方」と索敵機から第一報が屆いた。

「よし今日は逃がすな」と觸接機に檄が飛び、同時に攻撃隊N指揮官機、列機全機に「敵を撃滅せよ」の指令が屆いた。全員勇躍、積亂雲を縫つて戦場に近づく。

中でも觸接機は懸命になつて敵にへばりついた。F飛曹の二番機は眞晝の中に現場に到著、艦型艦種、陣型、進路、速力など的確に見極めて友軍攻撃隊を誘導してゐるうちに、敵大型機B17三機に發見されとりつかれてしまつた。

「敵B17三機の妨害を受く。われ空戦。飽くまで觸接を續行せんとす」悲壯な電報が基地に齎らされた。一同その生還を危んだが、彼は觸接を續けながら勇しくも敵三機の中に飛び込み忽ちその一機の四つのエンジンを叩き潰してしまつた。他の一機は遙か洋上に遁走、殘る一機と觸接機は一騎討を演じて自らもガソリンを吐きながら、敵胴中を抉りこれをギルバートの海に直入させた。

「われ發動機に多少の雜音あれど基地歸投には差支へなき見込み」健氣にも味方攻撃隊誘導の大任を果して、F觸接機は眞黒になつて無事基地に歸還して來た。

一方この決死觸接隊の勞苦に感謝しながら、攻撃隊精鋭〇〇機はひたぶるな航行をつゞけた。敵はわが觸接機の密着を知つて薄暮前に反轉しだした。

「逃したら大變。是非兩方とも殲滅しなければ・・・」と攻撃隊は全速かけて急行したが、海面不案内のため夜になつてしまつた。おまけに生憎なスコールが敵の眞上を廣々と覆つて雲下は猛烈なスコールであつた。

「えイ・・・二兎を追ふ者一兎も得ず。空母だけでもやつつけよう」

とつさにN指揮官はさう決斷して遁げる空母目掛けて、まつしぐらに進んだ。暫くして右方に友軍觸接機が投下してゐる青白い吊光投彈の閃光を見つけることが出來た。

「あそこだ。全軍突込め！」

指揮官機が命ずるや否や、若武者達はもう高度をグッと下げて猛烈なスコールの海面を匐つてゐた。バーン、ヅシーンと底力のある炸裂音。

「やつたッ！」

N大尉指揮下の雷撃機隊の殊勲である。續いてその前方約百米ほどの海上に、空母が艦型のまゝ火の焔に包まれてゐた。

「空母二隻撃沈！」

意氣揚々と指揮官機は基地に打電。翌日の曉闇を衝いて歸還して來たが、この第二次ギルバート諸島沖航空戰で殊勲の列機一機は遂に歸つて來なかつた。

攻撃機隊のS司令は小兵だが、ガッチリとして愉快な人だ。

「東奔西走といふ言葉があるが、おつとり刀で駈けつけた甲斐あつてどうやら役に立ちさうだワィ」

昨夕の戰果を喜びに駈せ參じた記者にさういはれる。隊長のN少佐も重慶第一次空襲以來の古强者。賴母しい人々が刻々と揃つた。K司令官の部下を出す時の訓示。「成功を祈る」にも心なしか張りが籠つてきた。

二十七日。今日も朝から快晴で攻撃には申分ない。この朝一段と强化された索敵網を張つて○機が發進。その次には各種火工燈彈を滿載した觸接機が離陸し、暫らくして今日は索敵の完璧を期する第二索敵隊が大擧基地を出て征つた。

索敵機から時折「敵大型機見ゆ」の電報が送られて來るが、わが前進攻撃基地を脅かすなどは思ひも寄らぬ。屢次に亙る空母撃滅が見事に功を奏して敵の艦載機は艦隊の護衛にも役立たない位になつたらしい。

今日の指揮官N少佐に率ゐられた攻撃大編隊はS司令の

「愼重に奇襲し一艦たりとも生還さすな」

との激勵訓示に送られて、勇躍發進した。攻撃隊は約一時間も航行を續けるうちに猛烈な積亂雲地帶に入つてしまつた。○時。

「敵大部隊見ゆ。空母を含む數隻。方位タラワ、マキンの中間」

とわが索敵機から報せてきたが、それに急行すれば益々積亂雲の中に突入してしまふ。それに大部隊を繰り出した友軍索敵機は各機とも「敵見ゆ」を急報し、攻撃指揮官はどれに向つてよいやら迷ふ位。

しかし多少の誤差はあつてもそれらの誘導を綜合すれば、大體「空母を基幹とするタラワ、マキンの中間部隊」と「タラワ西方の艦隊」との二つに分けられるやうだ。

N少佐は意を決し、「先づ空母だ。それを叩いて餘力があれば程遠くない艦隊へ向はう」

「全機高度〇米の雲下飛行。一機も遲れるな」

と大スコール地帶の强行突破を斷行したのだつた。凄絶その比を見ぬ海鷲獨特の冒險だ。雨煙りに視界廿米もきかぬ南海を這つてじりじりと獲物に忍び寄る日の丸の翼。やがて決死飛行約一時間半攻擊隊の右翼機は薄暮迫る南の空に友軍觸接機が必死に翔び廻つてゐるのを發見し得たのだ。

「よく今までとりついてゐた」

攻擊隊の誰もの眼頭が熱くなつた。感謝の瞳の彼方にゐる、正しく敵空母二隻に巡洋艦、戰艦等が行儀よく斜めに並んで約十節の速力で、ジグザグを刻んでゐるではないか。それと見極めた攻擊隊の精鋭の軀は敵擊滅の鬪魂と化した。

各々屈强の獲物を目指して海面スレ〳〵に高度を下げた。乾坤一擲の雷擊態勢である。

「突込めッー」

指揮官機の命令一下各機は目標に向つて殺到した。敵艦隊の一つ一つからは如露を逆さに振り出

したやうな猛烈な防禦砲火が射ち出される。曳痕彈や榴霰彈の炸裂で夜空が燒け海が裂けるかと思ふ位の凄さである。絶好の射點で放つた精鋭の魚雷が無氣味な雷跡を曳いて幾本も〳〵敵艦に近づく。辛うじて體をかはして上空に避退した雷擊機が各自の戰果を確認しようとしたときは、大型空母一隻はすでに眞二つに割れて轟沈。その左方にゐた空母も火柱を冲天高く吹き上げ、〇分後には艦尾から沈沒して行つた。巡洋艦か戰艦らしい一隻がこれも母艦の炎上と殆んど同じ燃え方で斷末魔の喘ぎをやつてゐる。他に巡洋艦二隻も燃え盛つて、その明りが附近海面に敵空母の艦載戰鬪機が無數に燒けたゞれてゐるのを照し出したが、約十分後にはそれらの總てが海中に沒し去り、ギルバートの靜かな夜の海に再び星影が、そのさやかなきらめきを見せはじめたのである。

かくて第三次ギルバート諸島沖の攻擊は終了した。燃料ゲージを見てもう一方を斷念、攻擊隊は意氣揚々最寄基地に歸還したが、この赫々たる戰果の蔭にも尊い未歸還機が五機あつた。中でも連日健鬪した觸接機二機が至難な觸接任務を果すため、敵大型機と空戰、或ひは攻擊隊の來着を待ちきれず、自ら敵大部隊の眞只中に突入したなど、聽く者總てが慟哭する隱れた殊勳を銘記しなければならない。

大本營發表（昭和十八年十一月二十九日十五時）

ギルバート諸島方面其の後の戰況左の如し

一、帝國潛水艦は二十五日未明マキン島西方海面に於て敵航空母艦一隻を攻擊し之を大破（沈沒概ね確實）せしめたり

二、帝國海軍航空部隊は二十六日夕刻ギルバート諸島西方海面に於て敵機動部隊を攻擊し航空母艦二隻を擊沈內一隻轟沈せり

我方の損害　未歸還一機なり

（註）本航空戰を第二次ギルバート諸島沖航空戰と呼稱す

三、帝國海軍航空部隊は二十七日夕刻ギルバート諸島西方海面に於て更に來襲し來れる敵機動部隊を攻擊し左の戰果を得たり

擊沈　航空母艦　二隻（內大型航空母艦一隻轟沈）巡洋艦　二隻　擊破　巡洋艦（若くは戰艦）一隻（大破炎上）

我方の損害　未歸還五機なり

（註）本航空戰を第三次ギルバート諸島沖航空戰と呼稱す

四、タラワ島及マキン島の戰況については同島守備隊との連絡絕え狀況詳かならざるもタラワ島に於ては尙激戰續行中のものゝ如く海軍航空部隊は同島敵陣地を連續爆擊中なり

（附記）既報二十二日のギルバート諸島西方海面に於る航空戰を第一次ギルバート諸島沖航空戰と呼稱す

第四次ギルバート諸島沖航空戰

ギルバート諸島海面におけるわが海軍航空部隊の三次に亙る航空戰によつて敵太平洋艦隊は尨大な艦船を失つた。敵の反攻はこの大消耗にも屈せず飽くまで攻勢に出で十一月二十九日薄暮またも空母を中心とする大艦隊をギルバート諸島東方海面に繰り出し出擊してきた。

晝夜間斷なくこの海面を索敵警戒中のわが海鷲の報告によりわが海軍雷擊機隊は捕捉發見、直ちに肉薄攻擊を加へた。敵は熾烈な防禦砲火を浴びせると共に、敵戰鬪機も挑戰してきた。必中の魚雷を抱いた雷擊機は、敵空母陣に殺到して、先づその一隻に魚雷を命中させ、これを轟沈、更に他の一隻も亦わが猛攻の前に全艦火焰に包まれ、艦尾から海中に沒し去つた。

かくて空母二隻を屠つたわが雷撃隊は、これを護衛する敵艦陣を攻撃し艦種未詳一隻を撃沈、更に大型巡洋艦一隻を大破炎上せしめた。わが方もまたこの激闘において未歸還六機の貴い犠牲を出した。

かくて敵の太平洋艦隊はわが猛攻の前に十一月二十九日の第四次航空戦までに艦船二十二隻といふ大打撃を蒙つたのである。

大本營發表（昭和十八年十二月一日十五時）

帝國海軍航空部隊は十一月二十九日薄暮ギルバート諸島東方海面に於て敵機動部隊を攻撃し左の戦果を得たり

撃沈　航空母艦二隻（内一隻轟沈）　艦種未詳一隻　撃破　大型巡洋艦一隻（大破炎上）

我方の損害　未歸還六機

（註）本航空戦を第四次ギルバート諸島沖航空戦と呼稱す

マーシャル諸島沖航空戦

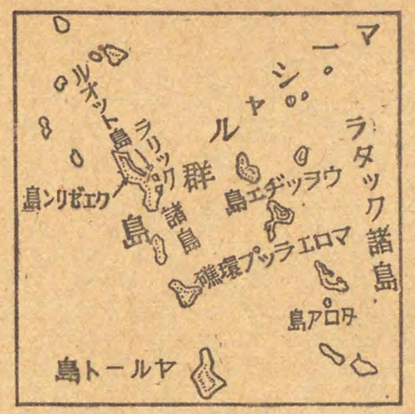
敵わが領土に侵攻

わが海鷲のギルバート海域連續出撃によつて、甚大な出血を南溟に撒き注いだ敵米軍は、わが海鷲の鋭鋒を先制攻撃によつて防止しようと、十二月五日朝機動部隊を以てマーシャル諸島方面に出撃してきた。わが海鷲はこれを同日夕刻マーシャル諸島北東海面に捕捉攻撃を加へて、中型空母一隻大型巡洋艦一隻を撃沈、大型空母一隻巡洋艦一隻撃破の大戦果をあげた。

敵が十一月二十一日、マキン、タラワ兩島上陸以來マーシャル諸島沖航空戦に至るまでギルバート及びマーシャル諸島の中部太平洋方面に於てわが海軍部隊の收めた綜合戦果は、空母十三隻、戦艦以下十三隻を撃沈破し、撃墜敵機は百四十五機に達してゐる。

決戰に明け決戰に暮れる中部太平洋。珊瑚礁も海の底も、其のため形が變りはしないかと思はれるほど、爆彈が落ち、母艦が沈む。沈む母艦や兵隊に未練も愛着もないのか、またも、のこのこ近寄る敵の無謀さ加減は全く正氣の沙汰と思へない。

去る十二月五日夜、マーシャル諸島北東沖に迷ひこんで、わが海鷲のために慘敗を喫した敵空母集團などは、まさしくその典型的なものだ。わが海軍にしてみれば、これまた胸のすくやうなマーシャル諸島沖航空戰であつた。



五日朝四時頃、朝食を終つた〇〇基地に、めづらしく空襲警報のサイレンが鳴りだした。スワ敵機來襲：：地上部隊は直ちに砲を固め、戰鬪機搭乘員は瞬時に愛機に跨つた。

「來いつ！　一擊のもとに叩き潰してやるつ！」と待ち構へてゐるうちに、無慮百機、西の空から東の雲の中から、はては南の水面を翔つて、誘導の大型機を先

頭に、グラマンが廿七、八機乃至三十機ほどの小型戰爆連合の大編隊で、一方は〇千ほどの高度、他は海面スレ〳〵に島に近づいて來た。グッと機首を下げた胴は青く、丸に星のアメリカのマークが憎々しく光る。グアングアン〳〵〳〵、キユー、ズドンと響くのは、まぎれもなく敵艦爆の盲彈投下。地上味方飛行機を狙つた數十彈は滑走路の十字路の眞中に二發落ちて、徑七、八米、深さ五米ほどの穴二つだけ、格納庫を狙つた無慮數十發は、大半海に墜ちてそれでも二、三彈が防空壕の入口と、空つぽの格納庫一棟に命中して、天井を破壞炎上しただけだつた。グラマンの銃擊もきびしかつたが、地上飛行機は全部無事、兵舍にも人員にも微傷だになかつた。

敵近づくと見るや急上昇して、邀擊態勢を整へる戰鬪機、その戰鬪機に魁けて、敵をグッと近寄らせた地上砲火が一齊に砲門を開いたときの素晴らしさ、西から入つて來た敵は、そのために算を亂して目標を誤り、東から侵入してジャングルの眞上に來た敵は、思はぬ高角砲の應射に、たちまち九機ほど墜落した。虎口を脱して辛くも目標に近づいた敵機は、待ちかまへた無敵戰鬪機に叩かれ、受身であるべき我方に、敵機擊墜二十機といふ大戰果が擧げられた。

「敵機動部隊近し」反射的にさう頷いた無敵海鷲は遣る方ないその憤懣を遽かに莞爾と微笑んで必殺の魚雷を一本づゝ抱へ込んだ。そしてそれから十時間後に繰り展げられたのは世にも凄絶な帝國

海軍航空部隊の報復追擊戰であつた。

「避退中の敵機動部隊を急襲すべし」

わが攻擊隊に攻擊命令が下つたのは、敵襲が終つたか終らぬうちだつた。最寄の基地に嚴戒中の友軍攻擊機隊は直ちに出擊、暗雲を衝いて索敵行動を開始し、これとはまた別個に索敵觸接機が翼を怒らせて、直ちに修理成つた滑走路を蹴たてゝ出ていつた。

「今日はどうあつても捉へて貰はねばならぬ」吉報來るか。この電報がさうではないかと電信員が飜譯するたびに幹部の頭が並ぶ。○時間。來たッ？　空母二、重巡三、驅逐艦八乃至九の輪型陣。約二十節の速力で東北進行中、完全だ。申分なく捕捉した。

しかしよくも、のこ〳〵とわが鐵環內に潛つて來たものだ。しかし一旦わが陣地に突入した以上は殲滅だ。攻擊機隊のN隊長が堂々出擊前の部下に斯う示した。

「敵はマンマとわが網の目に掛つた。じたばたしても、もう追ひつかぬ。吾々はこれから行つて、その地引網を絞つて來るだけだ。驅逐艦などの小魚には眼も呉れるな。鯛だ。母艦を先づ締めあげろ。それから大きな順に魚雷を見舞へッ」ニッコリ笑ふ若い搭乘員。「けふもまた獲物にありつける」滿々の自信だ。

全速で敵は遁走中だが、船脚とプロペラの廻轉とは競走にならぬ。N指揮官機が眞先に現場に到着してみると何と味方索敵機の報告通りの陣型である。先頭かけて逃げまくつてゐる空母二隻は正しく今朝基地を空襲していつた艦爆戰鬪機の塒である。その前、横、後尾に重巡が各一隻づつ、右側にはそれらを包むやうに驅逐艦がバラ〳〵してゐる。

「俺が突込んだら、その後に續かないで、右と左に分れて遠まきにしろ。そして目ぼしいのに一機づつ突込めッ！」

四日月の明りの中に指揮官機は、部下にさう命じて置いて、アッといふ間に雲間に潛つた。それと同時にバラ〳〵と幾千條の火箭が、指揮官機の爆音をたよりに集中、列機は「あつ、隊長ッ」と思つたが、命ぜられた通りに、ブン〳〵右旋回左旋回をやり出した。火箭の集中した方に、ズシーンと翼に響く轟音「自爆か？」と思つた瞬間、遙か彼方の雲の上に指揮官機がヒョッコリ頭もをたげた。「やつたッ！」「それ吾々もッ！」二番機が旋回を止めて突込むと、三番機はそれに間を置いて他の獲物にぶつかる。狂ふやうな高角砲の火幕を縫つて、敵艦を擊つては昇り、擊つては揚る樣は「車がかり龍卷戰法」とでも名を附けようか。何か名を附けてくれと隊長が言はれる。

あゝ、ニミッツが命ずるまゝに乾坤一擲の勇を鼓して、けさわが基地に來襲した敵艦隊は、いま

斷末魔の苦しさに喘ぎ哭いてゐる。先頭の中型空母とその前の重巡は瞬時に擊沈、次の大型空母もその脇の重巡一隻も、相次いで傾きながら海面をのたうち廻つてゐた。

最後にこの痛快極まる報復急襲マーシャル諸島沖航空戰に我方も尊い六機の未歸還機を出してゐることを忘れてはならぬ。

大本營發表（昭和十八年十二月六日十六時）

一、十二月五日朝敵機動部隊の艦載機約百機マーシャル諸島の我基地に來襲せるも所在帝國海軍航空部隊、守備部隊並に海上部隊は之を邀擊し其の廿機を擊墜せり、我方地上に於て若干の損害あり

二、帝國海軍航空部隊は同日夕刻マーシャル諸島北東海面に於て右機動部隊を捕捉攻擊し之に壊滅的打擊を與へたり、本戰鬪に於て得たる戰果左の如し

擊沈　中型航空母艦一隻（轟沈）　大型巡洋艦一隻（轟沈）　擊破　大型航空母艦一隻（擊沈概ね確實）　巡洋艦一隻（擊沈概ね確實）

我方の損害　未歸還六機

（註）本航空戰をマーシャル諸島沖航空戰と呼稱す

北太平洋戰局

アッツ血戰の前奏曲

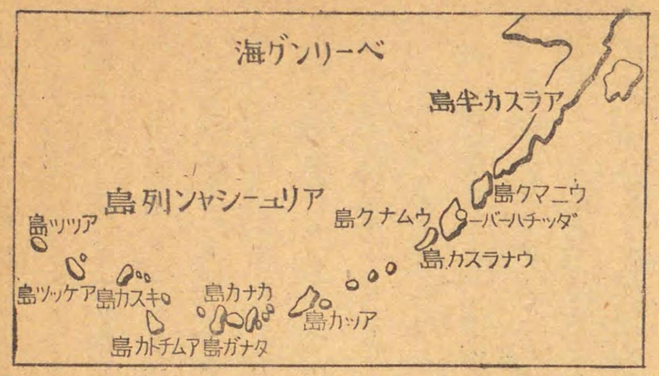
祖國をへだててはるかに二千浬、北太平洋の孤島アッツ、キスカ兩島に荒涼たる冬を越した我守備隊將兵たちにも遲い春がめぐつてきた。春の前觸れである乳白色の霧が、島を覆ふ日が續くと、ツンドラの間には點々と青いものがみえはじめた。くすんだ冷い灰色ばかりの中に暮してゐた將兵の眼には、しみ入る樣に思はれる青さであつた。福壽草の樣な黃色い可憐な花や、菫の樣な花の固い蕾もふくらんできた。キスカヒバリも囀りはじめた。絶えて久しい青空も時折チラッとみえることがあつた。北太平洋の嚴しい自然に固く閉ざされてきた身と心を溫く解放して吳れる季節の息吹きであつた。

だが、兩島の將兵たちには、ゆつくりとこの季節の喜びを滿喫するどころではなかつた。春と共に敵の反攻はいよ〳〵激烈の度を加へてきたのである。

「日本の頭上に突きつけた焰の線」と戰前から豪語してゐたアラスカ、アリューシャン列島を結ぶ北方進攻路の尖端を、善謀皇軍の果敢な先制進攻にもぎとられた敵は、必死に奪回を企圖した。二千六百キロに及ぶアラスカ公路を完成すると共に引き續き島から島へと航空基地を逐次進め二月中旬にはキスカの東南方僅かに六十浬のアムチトカにも前進航空基地を築いたのであつた。そして冬明けの天候回復を待つて、豐富な飛行機の量にあかして行ふ執拗極まる爆擊と、艦砲射擊は日に日に激化してきたのである。ロッキードP38、カーチスP40、ノース・アメリカンB25、コンソリデーテッドB24などが殆んど連日の樣に束になつて來襲した。地と空の凄絶な戰ひの明け暮れだつた。キスカに對する爆擊だけでも三月は來襲回數八十一回、延機數五百餘機以上。四月に入つて天候が更によくなると、一層激しく來襲百四十數回、延機數一千機に近かつたのである。特に四月末、珍らしい上天氣が續いた時には、一日に來襲實に十四回、延百餘機といふことさへあつた。この爆擊を「配給」と呼び、いささかのたじろぎもみせぬ守備隊將兵ではあつたが、これではゆつくり「春の歡び」にひたる暇もないわけだつた。また爆擊の激化と共に敵艦隊の蠢動も頓に活潑となつてゐ

た。三月末アッツ島西方海上で北洋最初の海戰が行はれ、我海軍水上部隊は當時の大本營發表にもあつた通り、敵甲巡以下三隻擊破の戰果を擧げたのであつた。

以上の樣に次第に熾烈、執拗の度を加へてきた敵の反擊は、兩島奪回を目指す上陸作戰の前奏曲であつた。遂に五月十二日、折からの濃霧にかくれて敵はアッツ島に大部隊を上陸せしめるに至つたのである。



伊號第〇〇潛水艦奮戰

アッツでは山崎部隊長指揮の陸軍部隊、江本弘中佐以下の海軍部隊將兵の悲壯な死鬪が續けられた。この陸上戰鬪に呼應して、當時同方面にあつた我潛水部隊は上陸部隊護衛の敵艦に對し、傳統に輝く果敢な肉薄攻擊を斷行したが、特にアッツ島チカゴフ灣外にあつて優勢に心驕れる敵艦隊の眞只中深く潛入、二日間にわ

たり三回におよぶ強襲を敢行、遂に北太平洋の海底深く艦と運命を共にした伊號第〇〇潜水艦井上規矩中佐以下の偉勲は、アッツ島部隊の玉碎と共に敵の心膽を奪ふものがあつた。

伊號第〇〇潜水艦は敵のアッツ島上陸當時同方面海域にあつた。荒風、怒濤の北洋に永い間人知れぬ特殊任務に從事し、これといふ敵と戰ふ機會に惠まれてゐなかつた。それが空母、戰艦を含む有力な敵艦隊に對する攻擊命令を受けたのである。艦長井上中佐以下の乘員は

「いまこそ！」

と文字通り雀躍したのであつた。

「我々は勇躍、敵擊滅の途に就く……」

出擊にあたつて發せられたこの電文にもその意氣込みの程が察せられるのである。

同潜水艦は十三日白晝、大膽にも敵の警戒網を突破し、濃霧を利用してまづ敵戰艦に肉薄した。アッツ島部隊が確認したところでは同日十三時三十分頃、おぼろに浮ぶ敵戰艦の胴ッ腹から二本の水柱が高く高くのぼつた。魚雷二本の命中である。敵驅逐艦が狂氣の樣にぐるぐるはしり廻つて爆雷を投下しはじめた。伊號第〇〇潜水艦はその爆雷の下にぢつとひそんでゐたのである。そして同日十八時三十分、またもや艦型不詳の一艦を攻擊した。濛々たる黑煙が天に冲し、更に火焰が同夜

深更に至るまで燃え續けるのが地上から認められたのであつた。ただ殘念ながら附近一帶を覆ふ霧が餘りに深く、その成果は終りまで十分に確認することは出來なかつたが、この攻擊がアッツ島部隊をどれ程力づけたか知れなかつた。しかもその翌日、猛烈極まりない敵の反擊を物ともせず同潜水艦は飽くまで不屈、三度攻擊を繰り返へしたのである。十四日の十時三十分、敵乙巡にまたも二本の水柱が高くのぼつた。霧は依然として深く、その最期をみとどけるに術はなかつたが、擊沈或は大破は確實であつた。

敵上陸以來アッツ島部隊は悲壯な死鬪をつゞけてゐた。しかしながら我に十餘倍する兵力と豐富な火力に惠まれた敵上陸部隊を相手に、大勢は我に利あらず日に日に憂色は濃くなつてゐた。しかも恐るべき濃霧と荒天に阻まれて、我航空部隊も全く活躍を封ぜられてしまつてゐた。五月二十三日、その日もあいかはらずの濃霧が海を覆ひ、手のつけられない荒天であつたが我海軍航空部隊は敢然としてその惡天候を衝いて長驅した。そしてアッツ島附近で敵水上部隊に果敢な攻擊を加へたのであつた。

その翌日の五月二十四日我大本營は伊號第〇〇潜水艦ら潜水部隊及び航空部隊の攻擊に就て次の

様に發表した。

大本營發表（昭和十八年五月二十四日十六時）

一、帝國海軍航空部隊は五月二十三日アッツ島附近において敵巡洋艦一隻を擊破、驅逐艦一隻を擊沈、他の一隻に火災を生ぜしめたり、我方損害なし

二、帝國海軍潛水部隊は五月十二日以後アリューシャン方面に行動中の敵艦艇攻擊を續行、本日までに敵戰艦一隻、巡洋艦一隻を大破し、艦型未詳のもの二隻を中破せしめたり

「玉碎」に復仇の士氣軒昂

アッツの戰況は刻々にキスカに傳へられた。アッツとキスカは北太平洋の二つの眼であり、北洋の兄弟であつた。アッツの一兵の戰死はそのままキスカの將兵にとつてはわが身を斬られる思ひであつた。出來るものなら海を飛び越へてもアッツ救援に行つてやりたい。それは切々として身内からほとばしる戰友愛の止むにやまれぬ氣持だつた。だが、どうにもならぬことなのである。

「しつかり頼むぞー」

とただ心の底から祈るだけだつた。それがたうとう五月二十九日、

「電信機を破壞、最後の攻擊を行ふ」

といふ悲痛な電報が打たれてきた。そして午後七時四十五分、電波はプツリと切れて呼べども呼べどもアッツは永久に答へなくなつたのである。アッツ島將兵はその夜ことごとく悲壯な玉碎を遂げたのだ。キスカの將兵はもとより一億國民を胸の底から痛憤せしめた壯烈な最後であつた。

キスカはいまや文字通り北太平洋に孤立することになつた。敵は今度はキスカに上陸を企てるであらう。キスカの將兵は淡々たる態度のうちにも固い覺悟を祕めてゐたのであつた。

「野郎ども、上つてきたら一泡吹かしてくれるぞー」

既に誰一人生きてキスカを離れることがあらうとは考へなかつた。アッツのうらみは必ず晴らすのだ。それにキスカ上陸以來飛行機のほか敵を相手にしたことは一度もなかつた。上つてきてくれればはじめて防備一方の一年間の鬱積した胸のわだかまりを思ひ切り白兵戰にぶちまけることが出來るといふものだつた。いまや敵の上陸に備へるなどといふ生易しい氣持ではなくて寧ろ待ちこがれてゐるのである。だがキスカに敵はなか〳〵上つて來なかつた。

「アッツの手強さに腰を抜かしたのかなあ……」

キスカの海軍部隊では豚を三頭飼つてゐた。爆彈の雨が降つてもかすり傷一つ負はず豚はすく〳〵と成長した。一番大きい奴は三十貫以上はありさうだつた。海軍記念日や上陸一周年の日など

「豚カツを食はせろ」

といふ邪氣のない要求が殺到した。しかし主計兵はなか〳〵うんといはないのだつた。

「可哀相だよ、かうして苦勞を共にしてゐるとね……」

しかし待ちかねる敵が上陸してきたら……

「その時にはまづこの豚をつぶしてみんなに振舞ひますワ……」

主計兵はから〳〵と笑ふのだつた。

敵は一向に上つて來ない代りに爆撃と艦砲射撃の方は六月以來滅茶々々といつていい程更に猛烈となつた。爆撃は一日に五回から十回、延五十機乃至百機の飛行機でやつて來た。七月になるとます〳〵熾烈を極め、特に七月二十三日の如きは一日九十六機、越へて二十五日には六十六機が押し寄せてきた。また艦砲射撃は七月七日と二十三日の二回。わけても二十三日には巡洋艦四隻、驅逐艦四隻を以て三十分間も射ちこんできたのである。

「鳴り物入りの先ぶれは大變だわい」

「とかくアメリカさんのお化粧は長うござんす？……」

このキスカ一島に集中してくる猛烈な爆撃と砲撃下にキスカ將兵は飽くまで軒昂たる士氣を失はなかつたのである。

キスカ撤收作戰

かうしてアッツ玉碎から約二ケ月が經過した。その間に一方我北方〇〇艦隊は着々としてキスカ部隊撤收の準備を進めつつあつた。敵北方進攻路の尖端に進むべくして兵を進めて約一ケ年。兩島守備隊の地味な奮戰の賜たる「時」を得て我北方基地の整備と强化は既に成り、我北方に對する戰略態勢は、いまや不動の重きを加へてゐた。この上何時までも絶海の孤島キスカに兵を止めて困難極まる補給に力をそがれる必要はなくなつてゐた。掩護作戰の任務を果したキスカ部隊は退くべくして退かねばならぬ時期が來てゐたのである。

だが、古今の戰史にその例をみても撤收作戰こそ至難中の至難事なのである。しかもキスカの場

合は、既に敵の手中に歸したアッツを越えてゆかねばならぬばかりか、ダッチハーバーからアムチトカに至る一聯の敵基地を眞近にひかへて、制海權、制空權共に全く敵に有利な實に〇〇浬を往復しなければならないのだつた。加ふるに、各種艦艇、飛行機、電波兵器の豐富な數を恃む敵のすぐ鼻の先で時間のかかる撤收乘艦作業をやらねばならないのである。敵に發見されないですむとは絶對に考へられないことだつた。普通なら敵とぶつかるのはもとより切望するところ、またぶつかれば必ず敵を叩く滿々たる自信はあつた。だが〇〇艦隊に命ぜられた任務は飽くまでキスカの部隊を無事に撤收せしめることなのである。見付かれば敵を叩くことは出來ても、それだけ任務の達成が困難となるのは明白なことだつた。

その上更に、北太平洋の天候——特にアリューシャン特有の濃霧が作戰を二倍に困難にする障碍であつた。〇〇浬の長大距離を直行するのではなくて相當迂回しなければならない。とすればキスカまで少くとも〇日間はかかるとみなければならない。餘程天候を見定めて行つたとしても激變は當然予期すべきことだつた。航海術の原則に反する大艦隊の霧中航行も覺悟しなければならなかつた。即ち大艦隊が霧中集團航行の後、うまくキスカ灣に入れるかどうか——これは大變なことなのであつた。

この様にあらゆる條件は全く我に不利なのである。恐らくキスカ部隊の三分の一を無事に引かせ得れば寧ろ大成功と言つてもいい——とまでみる向きもある程だつた。

〇〇艦隊首腦部は精魂を傾け盡してあらゆる障碍に處する萬全の作戰計畫によつて準備を進めたのである。

まづ成し得る限りの手段を盡して不斷の敵情偵察が續けられた。また天候に關する周到な觀測と研究がなされたのである。同時に霧中に突入しても艦隊が集團のまま迅速、的確、安全にキスカに達し得るやうにキスカ島およびその附近海面に諸種の準備作業が實施された。企圖祕匿のため恰もキスカに增强しつつあるかのやうに敵の眼をごまかす補給と地上施設の擴充作業もどし〳〵續けられた。骨身をけずる苦心の撤收準備であつた。この間に於ける我方の尊い犧牲も決して少くはなかつた。同方面の敵艦隊は北洋作戰に必要な訓練を久しく受け、しかも適當な基地を持つ米加聯合艦隊だつた。特に大西洋でドイツ潛水艦にさんざん惱まされた結果、潛水艦に對してはあなどり難い實力を持つ英國海軍の亞流とも言ふべきカナダ海軍の跳梁は輕視し得ないものがあつた。

七月に入るや一切の準備は完了した。殘るは決行の斷を待つのみとなつたのである。撤收實施にあたる艦艇部隊の自信と鬪志も滿々として天を衝くの概があつた。だが撤收作戰の困難さに對する

暗默の覺悟が固く決められてゐたのは言ふまでもない。各艦とも必要の最少限のもの以外は全部、陸揚げをしてしまつてゐた。餘計なものは一切捨てて裸身で死地に飛び込む覺悟であつた。

かくてその機を待つこと約二旬、決行の機がいよ〳〵熟しつつあつた七月下旬、キスカ南方海上の濃霧中で敵が四十五分間にわたる同士討ち海戰を演ずるといふ椿事が起つた。

二十六日夜のことであつた。キスカの電波探知儀は東方と西北方の兩方面から二つの大鐵塊群が相互に近接してくるのを感覺した。すると間もなく濃霧の海上遙かに殷々たる砲聲がとどろきはじめた。キスカの將兵はてつきり彼我兩艦隊の海戰がはじまつたと思つた。そして切に我艦隊の健闘を念じたのである。砲聲は斷續して實に四十五分間に及んだ。その間に探知儀に感じてゐた鐵塊群の量は双方とも次第に減つていつた。兩艦隊が激闘の末、共に傷き相次いで海底に沒していつたと思はれた。勿論我勝利は念じて疑はなかつたが、我方にもまた少なからぬ損害が出たとみる以外に考へようがなかつたのである。ところが不思議なことには共に少くなつた鐵塊群は二つとも砲聲が止むと間もなく、どちらも次第に東の方に遠去かるではないか。一方が我艦隊であるとすれば如何にも解せないことであつた。キスカの將兵は憂色のうちに首をひねらざるを得なかつた。

この砲聲は當時キスカ南方にあつた我潛水艦でもはつきりときいたのだが、潛水艦では近くに我

艦隊がゐる筈のないことは勿論わかつてゐた。それだけに敵艦隊の同士討ちであることをはじめから知つてゐて全く高見の見物をしたわけだつた。

この砲聲が敵艦隊の同士討ちで、お互に天晴れなお手並をみせ合つたことが間もなくキスカの將兵にも傳へられた。ホツとすると同時に

「ざまあみやがれ！」

と肚の底から笑つたのであつた。

アメリカ海軍もこれには愕然として色を失つたのである。

「アメリカ海軍部内に未曾有の一大不詳事件發生す！」

とは當時、アメリカ海軍部内に發せられた驚愕の祕密指令であつた。それと同時に同方面にあつた敵艦隊はことごとく姿を消してしまつた。恐らく査問會か何かのために急遽後方基地に歸つたのであらうと察し得る節がある。

この同士討ち海戰が如何にして惹起したか——色々の原因…例へば米加聯合の寄り合ひ艦隊にあり勝ちな不統一——が考へられるが最大のものはアツツ島部隊の玉碎が彼等に與へた恐るべき精神的打撃であつたと思はれる。特に電波兵器といふ魂と精神力の伴はぬ單なる物質的機械力以外に

は據るべき何ものも持たない彼等の最大の弱點を餘すところなく暴露したのであつた。アツツ島部隊の玉碎以來蒙つた精神的壓迫感に、彼等は戰々兢々、一寸先もみえない霧中では僅かな徵候にもおびえ切つてゐたのであらう。だから電波兵器に艦艇の近接を感受すると周章狼狽、敵味方の判別の餘裕もなく相互にただ滅茶々々に砲擊の火蓋を切つたとみられるのである。これが〝壯烈な〟同士討ち海戰の眞相であつた。

その結果、敵艦隊に一大混亂を招來したであらうことは想像に難くなかつたのである。現に敵艦隊の大部隊はキスカ附近から姿を消してしまつたのであつた。

これこそ我方にとつて乘ずべき願つてもない好機であつた。我艦隊作戰首腦部がこれを見逃す筈はなかつたのである。

七月〇〇日、「決然邁進するを可とす」といふ意味の最後の意見がキスカ灣に突入、徹收實施にあたる艦艇部隊から上申された。司令長官の決意もピタリとこれに呼吸が合つてゐた。この日濃霧は灰色の壁の樣に厚く渦卷き、アリューシャン列島一帶を覆ふてゐた。

やがてキスカまで〇〇浬に近接した。依然たる濃霧であつた。

「これでは敵機に發見されることはあるまい」

とその點はまづ安心が出來た。その代り、突入部隊の先頭をゆく軍艦〇〇航海長の苦心は容易ならぬものがあつた。〇〇基地を出擊以來太陽をみたのはたつた一回、それもみえたと思ふとすぐにかくれて定かではなかつた。艦現在の位置と針路が果して所望通りにいつてゐるのであらうか、自信は持ちながらも矢張り心は重かつた。航海長が舵のとり方を一歩誤れば容易ならぬことになる。その責任感であつた。

それにしてもキスカ附近には敵哨戒艦艇は必ずうろついてゐる筈だ。どうしても島の近くでこれとぶつかることは豫期しなければならなかつた。これを如何にさばいて一刻も早くキスカ灣に確實に入るか――そして敵哨戒艦艇と戰へば恐らくその後敵機は霧を通して爆擊してくるのは明かだ。その妨害下にまるで暗夜同然の霧の中で困難を極めるであらうキスカ部隊の乘艦作業を如何に運ぶか――艦長の心配はこれであつた。砲術長は艦橋のテツペンにある指揮所で現れてくる敵艦に備へて濃霧の中をにらみ續けてゐた。この作戰で砲術長が全然働く機會がなければない程、成功の大きいことは十分わかつてゐた。しかし心の底には矢張り敵とぶつかつて思ひ切り射ちたい希望が祕められてゐた。まだこれといふ敵と戰ふ機會に惠まれてゐない士官次室（ガンルーム）の若い士官達の正直な氣持もこれと同樣だつた。

やがて時間からみてキスカ附近に來てゐる筈だつたが、島の姿はてんでみえない。針路も普通なら絶對にあり得ない岸寄り〇〇米まで近接してゐるのだつた。萬一の暗礁に備へて速力が第〇戰速に落された。と、丁度その時見張員が突然に叫んだ。

「ア、島がみえます」

濃霧の中に島影らしいものが黒くにじんでみえるではないか。

「キスカだ！」

と見定めようとするとすぐにかくれてしまつた。專門の見張員以外には全く氣の故だとしか思はれない程のこの偶然も航海長にとつてはまさに千萬力の思ひだつた。よし！　大丈夫！　霧中航行にも狂ひは殆んどなかつたことが確實となつたのだ。

かくして目指すキスカ灣口に刻々と近づいていつた。灣の入口を確認しなければならぬ――と航海長が霧の中に瞳をこらした時スーッと霧が薄れて灣口に近い小キスカ島がみえた。

「灣の入口は此處ですよ！」

とまるで招き寄せてゐる樣だつた。

たうとう來たぞ！

喜びをこめて入港準備のラッパが高らかに吹かれると、霧の彼方からこれに應へる「我はキスカ部隊なり」のラッパがかすかにひびいてきた。感激の應酬であつた。小キスカ島もみえたと思ふとすぐまた霧の中にのまれたが、やがてキスカ灣内に全艦が相次いで入つた頃になると霧は再び晴れ上つた。しかも、高さ一千米、水平視界二千米程に丁度キスカ灣だけが、霧のトンネルの樣に晴れてゐるのである。若し灣内にも濃霧がたちこめてゐたら乘るべく指示されてゐる艦に達することだけでも容易ではない。撤收部隊の乘艦作業は餘程困難となり遲々として進まなかつたであらう。またもつと晴れ上つたら敵機に發見されるに決まつてゐる。それは文字通り奇蹟であつた。乘艦はトン〳〵拍子に進んだ。一番後に殘つた爆破作業班があの山、この山から海岸に驅け下つてきた。そしてそれが乘艦を終る頃には、地上のあつちこつちの各施設に次ぎ次ぎに爆破炎上する焰が立ちのぼりはじめた。かくてうまくいつて〇時間、下手をすれば〇時間はかかると豫定してゐたのがその〇分の一以下の僅かの時間で乘艦作業は全部終了した。

「こんなにうまく運ぶんならあの狐も連れてくるんだつたのにな……」

と飼ひならしたキスカ產の青狐を殘してきたのを殘念がる兵もゐた。間もなく各艦は相次いで出港しはじめた。

みかへれば約一年間住み慣れたキスカはいまや全く無人の島にかへつて、ひッそりとくろずんでみえた。その山の中腹に炎々として立ちのぼる焔の赤さよ！　乘艦してきたばかりのキスカ部隊將兵はただ默々としてそれを睨んでゐた。不足勝ちな米を成る可く永く食ひのばすために毎日粥にしてすすりながら、あの飽くなき爆撃にもめげず血のにじむ苦勞を重ねて作り上げた施設を自分たちの手で爆破しなければならぬ口惜しさであつた。灣内には乘り捨てられて間もなく沈む舟艇が淋し氣に浮んでゐた。さらばキスカよ！　何時の日か再び！　キスカ部隊將兵は無言のうちに眦を決して復仇の誓を固く心に刻みつけたのであつた。

濃霧の奇蹟は更に續いた。各艦がキスカ灣を出港するや、霧は再び濃く、寄せてきたのである。各艦はこの濃霧に包まれたまま一路我北方〇〇基地に向いて航行し得たのであつた。しかもまるで我が行動を祕匿してくれるかの樣なこの濃霧は我〇〇基地の制海空權の威力圏内に達するまで續いた。そして〇〇基地入港の日になつて久し振りに晴れ上つたのである。その青々とした空を仰いだキスカ部隊將兵は實に久し振りに我飛行機の翼の日の丸をみたのであつた。

「もつと飛行機を、もつともつと飛行機を」

キスカ部隊將兵は溢れる感激の涙のうちに思はず異口同音に叫んだのである。それはキスカ守備

の一年間の勞苦と、兄弟以上のアッツの戰友を失つた悲憤の底からにじみ出た切實な叫びであつた。

北太平洋戰局新段階へ

この樣にして退くべくして退いたキスカ撤收作戰が餘りに鮮かに敵の虚を衝き、加へるに天佑の濃霧が終始我行動を隱蔽してくれたために、敵は全く我撤收に氣付かなかつた。そして八月十五日上陸するまで約半月にわたつて無人島キスカにあいもかはらぬ爆撃と砲撃を續け次の樣な敵側公表の通り三千トンに近い鐵量を浪費したのである。

八月二十一日米海軍省公表

八月一日　リベレーター重爆撃機隊はキスカ島の日本軍主要陣地に對し濃霧を透して爆彈を投下した。

八月二日　午後リベレーター重爆撃機はキスカ島北端を爆撃し、同地區に、命中彈を浴びせた。

右爆撃の直後、米國海軍の重輕水上艦隊は日本軍主要陣地、北岬における潜水艦基地ジェルトルード及び小キスカ島に艦砲射撃を加へ、大小砲彈二百發を射ち込んだが、日本軍は應射しなかつた。

同夕刻ミツチエル中爆並にライトニング戦闘機隊は小キスカ島を爆撃した。

八月三日　拂曉輕海上艦艇はジエルトルード入江並に日本軍主要陣地を砲撃、日本軍の應射は輕微であつた。更にミツチエル中爆、ウオアホーク並にライトニング戦闘機隊はキスカ島の北岬、南岬滑走路、水上機格納庫並に主要陣地に爆撃を加へた。更に小キスカ島を掃射、目的地區のすべてに爆彈が命中したことを目撃した。

八月四日　夜半海軍哨戒爆撃機はキスカ主要陣地並に潜水艦基地に爆彈並に燒夷彈を投下その結果大火災起る。拂曉から夕刻まで米空軍は十八回にわたりキスカ島並に小キスカ島に對して爆撃を加へた。日本軍の抵抗は散發的な地上砲火だけであつた。

八月五日　拂曉輕海上艦艇はジエルトルード入江、キスカ島の主要陣地に艦砲射撃を加へた。但し日本軍から應射なし。

八月六日　輕海上艦艇はキスカ島に砲撃を加へ、目標地區に命中彈を浴びせた。日本軍から應射なし。

八月七日　（土曜日で休んだらしい）

八月八日　輕海上艦艇がキスカ島の主要陣地、ジエルトルード入江に砲撃を加へたが應射なし。

八月九日　輕海上艦艇はジエルトルード入江主要陣地、北方の日本軍陣地に砲撃を加へた。

八月十日　拂曉、ジエルトルード入江主要陣地に對し水上艦艇砲撃、また空軍は二十四回にわたつて爆撃、機銃掃射を浴びせ、輕微な地上砲火に遭遇した。

八月十一日　早朝輕海上艦艇はキスカ島の南岬、ジエルトルード入江に艦砲射撃、空軍は二十一回にわたつて出撃、日本軍陣地は著しく破壊されてゐるのを目撃した。

八月十二日　夜半直後輕海上艦艇砲撃、午前重輕海上艦艇はキスカ島の南岸に艦砲射撃を加へたが日本軍は應射せず。空軍は午後二十回出撃隨所に火災起る。

八月十三日　早朝輕海上艦艇砲撃、日本軍から何等應射なし。空軍は午後九回にわたり出撃、建物に命中彈を浴びせ、輕微な地上砲火に遭遇した。

八月十四日　早朝三回にわたり爆撃、輕海上艦艇は一時間にわたつて艦砲射撃、日本軍から應射なし。

以上の敵側公表は二十一日（米時間）のルーズベルト、カナダ首相マツケンジー・キングの「强力なる米加聯合軍は海軍部隊の掩護の下に八月十五日アリユーシャン列島のキスカ島を占領し

た。同島には日本軍一兵も發見し得ず。米加軍占領以前に濃霧を利用し撤退したものとみられる。」

といふ共同聲明と前後してなされたものだが、我撤收を全く偵知し得ず、約半月にわたる無意味な砲爆擊を敢てした間抜けさ加減を餘すところなく自ら告白したものであつた。しかも既に我一兵もゐないキスカから「輕微な應射があつた」などとおくめんもなく述べてゐるのは、その間抜けさ加減のテレ隠しとみるべき笑止な言ひ草にすぎないのである。

敵側が自ら氣付くまで敢て發表を差し控へる苦肉の策に出た我大本營は八月二十二日正午、敵側の發表を待つてはじめて次の様に撤收を明かにしたのである。

大本營發表（昭和十八年八月二十二日十二時）

キスカ島守備の帝國陸海軍部隊は何等敵の妨害を受くることなく七月下旬全兵力の撤收を完了し既に新任務に就きあり

アッツ、キスカ兩守備部隊の一年有餘にわたる勇戰によつて我北方防備は既に完璧となつてはゐるが、北太平洋戰局はここに新らしい段階に入つたと言ひ得るであらう。

潜水艦作戰

忍苦の中の敢闘精神

華やかな〇〇作戰、〇〇海戰の蔭にあつて、默々隱忍の戰闘に挺身してゐる、わが潜水艦部隊の活躍は、大本營發表に明らかな如く、十七年九月十五日の敵空母ワスプ擊沈をはじめ、南太平洋だけでもエンタープライズ類似型空母一隻大破、艦型不詳空母一隻大破、テキサス型戰艦一隻大破等の殊勳を樹てたほか、輸送船多數を海底に葬つてゐる。

昭和十八年に入つてから、かつての米本土および濠洲砲擊以來の、胸のすく快擧が傳へられた。

一月廿三、卅の兩日、敵がソロモンへくり出す中繼基地、最大の貯水池としてゐるフェニックス群島のカントン島を强襲、同島沿岸一帶の軍事施設、および折から碇泊中であつた水上機母艦に果

敢な砲撃を加へ、多數の命中彈によつてこれを炎上させたのち、悠々その巨姿を波間に沒して、敵を戰慄させたのであつた。

水上艦艇に比較するとき、きわめて脆弱な外殼をしか持たない潜水艦が、嚴重な武裝を有する敵港灣近くに浮上して、その軍事施設に砲撃を加へるなど、一見無謀に近い大膽な行動なのだが、帝國潜水艦部隊は開戰以來いくたびか、敵軍事施設の砲撃を敢行して大きな成果を收めてゐる。

北海道の無防備の牧場あたりをねらふ、アメリカ潜水艦とは戰鬪精神が違ふのである。

このころを一轉機として、ソロモン方面のわが作戰は一應その戰略形態を變へたごとくであつた。つまりソロモン方面の基地整備を完了して、ガダルカナル島およびニューギニア島ブナ附近の皇軍は、敵の裏をかいて鮮やかな轉進をしたのであつた。

この轉進作戰に協力する海鷲部隊と相呼應して、わが潜水艦は濠洲東岸へ布陣して、敵躍起の補給線を脅威したのである。敵はわが潜水艦の猛威に怯え、商船の單獨航行を禁止し、その量にものを言はせてわづか數隻の商船にも、驅逐艦、驅潜艇等の護衛艦艇を配し、また惜氣もなく哨戒機、直衛機を間斷なく飛ばせた。

しかも危險海域は常に哨戒艇を以て警戒するといふ堅固な對潜防備を施すにいたつたのである。

潜水艦にとつて、商船攻撃は軍艦に比すれば、割合に容易な仕事に思はれてゐたのであつたが、事こゝに至つては、護衛艦艇、飛行機と戰ひつゝ輸送線破壞に從事するのだから、戰艦、巡艦、空母等との決戰と、實質上何らの變りもないことになつてきた。

この嚴戒陣を衝いて、わが潜水艦部隊は一月中旬から二月中旬までの間、濠洲東岸だけで敵船六隻、五萬四千トンを撃沈した（二月十二日大本營發表）

敵の防禦が固くなればなる程、わが傳統の潜水艦魂は燃えさかり、技術的にも尠からぬ進歩をしめしてきた。

一月〇〇日、メルボルンとシドニーの間を哨戒してゐたわが〇〇潜水艦は、シドニーに向つて北上中の敵輸送船團を發見した。即ち驅逐艦數隻に護衛された、八千トン級貨物船十隻の船團が大きな之字運動を描き乍らやつてくるのに遭遇したのである。

〇〇潜は直ちにこれに肉薄攻撃、魚雷數本は一擧に敵船二隻に命中、ものゝ美事に二隻を沈めたが、これなどはわが潜水艦の優れた技倆を示すものである。

四月、五月にかけてわが潜水艦部隊の精鋭は、南太平洋一帶に布陣して敵補給路を寸斷した。當時の新聞にもあつた如く、濠洲首相カーチンは、

「日本潜水艦の濠洲總攻撃が開始された。かくては濠洲は全く孤兒とならざるを得ぬ」と米英に向けて援濠泣訴の放送を何回か行つた程であつた。

入れ代り立ち替り、濠洲水域を荒し廻つたわが潜水艦は、この間敵船十數隻を撃沈した。何れも飛行機、護衛艦艇との必死の角逐を試みつゝの戰果である。

五月、濃霧やうやく晴れ間を見せんとする北邊アリューシャンの孤島、わが陸海軍部隊の死守するアッツ島に、米軍大兵團は大艦隊と大航空部隊援護のもとに上陸を開始した。わが潜水艦部隊は時を逸せず出撃、濃霧と激浪、困難きわまる視界を冒してつひに敵艦隊を、同島沖合海上に捕捉、猛烈果敢な攻撃を加へた。

五月十二日、アッツ島のわが勇士を攻撃中の戰艦一隻、巡洋艦一隻を雷撃、魚雷は見事命中して兩艦とも大損害を蒙つた外、艦型未詳の軍艦二隻をも雷撃、同じく大破させた。が、わが方にも尊い犧牲のあつたことを忘れてはならない。

この前後、濠洲作戰に行動中の伊號〇〇潜は四月廿九日の天長節、五月五日の端午の節句の佳き日に、兩日とも敵輸送船一隻宛を撃沈、「瑞祥われにあり」と乘組員を雀躍させた。

六月に入つてから、またも一擧二隻撃沈といふ快記錄が作られた。

若いN大尉を艦長にいたゞく、新進氣鋭の〇〇潜水艦は、濠洲東岸であるひは白晝浮上して敵船を砲撃し、また夜陰に乘じて貨物船に肉薄擊沈するなど大活躍をしたが、六月十六日夕刻、驅逐艦四、五隻に護られた輸送船十隻以上の大船團を發見、薄暮これを攻撃して一擧に、一萬トン級一、八千トン級一の二隻を撃沈、爆雷多數を投下されたが沈着巧妙の操作で被害なく基地に歸投した。

このころ印度洋方面でも帝國潜水艦部隊の活躍は續けられてゐた。

雨期明けのビルマ反攻を呼號する敵は、地中海方面の戰局の一時的平穏を利して、印度に兵力物資の集中を開始し、俄かに印度洋航路の活潑化が見られた。わが鐵鯨部隊が何條これを見逃さうか

英國船數隻は須臾にしてわが魚雷の餌食となり、中には英貨物船の船長を生捕りにして基地まで連れかへつた、殊勲の潜水艦もあつた。

印緬攻防戰の展開と共に、印度洋のわが潜水艦戰は更に活潑化するに違ひない。

サンフランシスコ型撃沈

七月廿八日、ラジオは國民の心をゆすぶる軍艦マーチを高く奏で、ついで大本營發表を次の如く